
詰め合わせギフトパック

たまさ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詰め合わせギフトパック

【Nコード】

N98580

【作者名】

たまさ。

【あらすじ】

色々ごちゃまぜ企画のページです。

まさに闇鍋状態ではありますが、何か気に入るものがありましたら宜しいのですが。気分しだいで増えたりへったりするかもしれません。

本編とは一切関係がありませんので、まったくおかしい現象が多発します。本編ではありえないあんなことやこんなこともあるかもしれません。

楽しんでいただければ幸いです。

私立魔女猫学園（笑）

私立魔女猫学園——もう企画からして阿呆ですか。開幕。

「役割の変更を要求する！」

律儀にも手をあげて言う生徒Aロイズ・ロック。もともとが警備隊の隊服姿なので、学生服も良く似合う。

というか、違和感はないが、学生は確かにある意味アウト。

「オレが生徒でおまえが教師って、ないだろう」

むむむっ、せっかくエリイフィアから乗馬用ムチを奪ってきたあたしに対しての暴言、あたしはびしびしとムチのしなりを楽しみながらにまーんっと口元に笑みを刻んだ。

「あらーん、こんな可愛い教師でいいじゃないの」

猫耳猫尻尾は相変わらずついていますが！

今日のあたしは女教師に相応しいツーピース。胸が大きいのはご愛嬌——上げ底パッド二枚の威力を思い知れ！

女教師はやっぱりほら、ある種色気を撒き散らしたいものです。

「問題は無い」

同じく生徒Bエイル・ベイザツハ。本を繰りながら言葉にしたが、ふっとその灰黒の眼差しをあげてあたしをひたりと見た。

「悪くない」

……何に対して悪くないのか聞いたら駄目な気がする。あたしは力をうしなってへこんだ耳に活力よ戻れとなぞの元気をおくりつつ、べしべしと机を叩いた。

「ロイズ、あんたに他の役割を振り分けたら確実に用務員よ！ チリトリとか箒とかが似合うっ」

「くっ。オレ自身も似合うかと思ってしまったじゃないか。もつと他に……体育の先生とかないのか」

「でもね、そうすると、あんたが用務員、もしくは体育教師。ダーリンが保健室の怪人になってしまうのよ」

「怪人ってなんだよ」

いや、なんというか保健室にいきそうでしょ。エイルって……

「そもそも、常々言いたいと思っていたんだが。そろそろそのエイルをダーリンと言うのを止める。少なくともこの企画では絶対に駄目だ。却下！」

激しく言うロイズに、あたしは眉をひそめた。

「なんでよ」

「教師が生徒をダーリンなんて言ったら倫理的に問題だ！」

エイル当人はそ知らぬ顔だ。

あたしは更に笑いを深めた。

「判った。ダーリンは駄目なのね」

「そう」

「ふふふ。じゃあロイズ、ハニーって呼んであげる」

ほおら嫌がれ。

あたしはロイズの机の近くまでこつこつと足音をさせて歩み、エリイフィアのムチの先端でロイズの顎先をくんと持ち上げた。

「ね、ハニー？」

「あ、あ、ううっ」

「却下！」

ロイズからではなくエイルから物言いがつかまりました。

おや？

「そもそも、あんた達まで教師になったら生徒がいらないじゃないのよ」

魔女猫は年齢が高いのです。

一番年齢が低いのは、見た目だけ14歳程度のティラハール。その実年齢は300歳超えです。

もし授業中にアレに説教かました日には、あの口から炎を吐きそうだしヤダ。

「おまえが生徒でいいじゃないか」

「……だから、生徒が少ないのよ。あたしが生徒だとして、アンニナはぎりぎり生徒？ 教師？ カス生徒でいいけど」

あたしが指を折りつつ言うのと、あたしの肩にふわりと何かが巻きついた。

「あたしは教師！ 音楽教師とか英語教師がいいわー、お色気たっぷりに教えてあげるっ。

ふふふ、Rの発音は舌をうまく使うのよお。もっと他の使い方も教えてあげようかしら、子犬ちゃん」

ふわふわと浮かんだエロ妖怪はそのまま生徒Aのロイズに焦点を合わせた様子。ロイズが完全にびびって腰を引かせた。

「あんたの標的はエイルじゃなかった？」

あたしは二人の阿呆な様子を見ながら言うが、アンニナはロイズの顔に豊満な胸を押し付けながら笑った。

「堅物を飼いならすのは楽しいわよお。それに、そっちのは幼女趣味なんだもの。オトナの女の魅力が理解できないのよ」

合唱。

「誰が幼女趣味だ」

冷やかなエイルはあくまでも一人で個人勉強中。団体行動には向きません。

「ちょっ、ブランっ。助けてっ」

ロイズが泣きそうです。熊涙目。

さすがにちよっと可愛そうだよ、アンニーナ。

だがしかし、ロイズは現在無敵アイテム所持者だった。突然飛来したチビ獣形ティラハールが、その獅子の口をぱっかりとあけてアンニーナにかじりついたのだ。

「きゃあああっ」

「ティラハール、そんなの食べたら駄目だっ。病気になる。ぺっしなさいっ」

「あたしは病原菌かつ！」

「そもそも、この話が学園である必要があるのか？」

エイルはあくまでも冷ややかに言う。

「……ない、かな」

「とりあえず、この魔法理論についての見解をお聞かせ願おうか、ブランマージュ先生」

くいつと顎で呼ばれ、あたしは引きつった。

「ま、まほー、りろん？」

「それくらいは判るのだろうな、ブランマージュ先生？」

エイルの瞳が楽しそうに揺らめく。

あたしは両手を突き出すようにして「生徒でいいです！ 生徒でっ」

と役柄をかえることにした。駄目だ。教師っていう役柄は面白そうだけれど、人に教えるのは難しい。

「では私が教師で構わないな」

ふっと皮肉に言うエイル。

って、あんためっちゃくちや楽しんでない？ この企画。

エイルは首筋のネクタイを緩めながら先ほど自分が読んでいた本をぱたりと閉ざした。

「ブランマージュ、魔法理論と魔導理論の違いについて答えなさい」

「え、えええっ？」

エイルの口元が緩く口角をあげる。

「放課後個人講習。逃げるなよ」

はろういん

突然首の裏、襟の辺りをつままれてあたしは「うなうつ」と鳴きながらじたばたと足を動かした。

「とりつく・おあ・とりいいい」と

うふうつと謎の吐息を落としつつ、ぶらりとぶらさげた白猫相手ににんまりと笑ってみせる黒紫の巻き毛のアンニーナに、あたしは思い切り顔をしかめた。

「何してんの、アン？」

「いやあね、ハロウィンに決まってるでしょ」

って、いつもと同じ格好だから決まってるって言われても判る訳がない。しかも、レイリツシュのように三角帽子をかぶって黒いドレスを着ている訳でもないアンニーナときたら、一見すればただの娼館のねえちゃんに見える。

ふわふわの巻き毛——魔法でセットするのではなくて、いちいち自宅にいる色男下男にきっちり巻かせるらしい——に胸元を強調する真っ赤なドレス。サイドにはスリットが入り、絹の靴下やら生足かってくらしいのバリエーションのみ。

「どこがハロウィン仕様？」

「馬鹿ねえ。私は魔女なんだから、どんな格好していようと魔女なのよ。それに、あんたは観察眼が駄目ね。そんなじゃあたしの男にはなれないわよ」

いや、なんであたしがあんたのオトコになんなきゃいけないんだよ。

何故か胸を張るアンニーナは片手で自分の耳に下がるピアスを弾いてみせた。

……かぼちゃ。

金色のかぼちゃのデザインのピアス。

言っとくけどね、そのピアスでハロウィンって気づくような男はあたしの周りには居ないと断言してやってもいい。絶対に大雑把なロイズは気づかないだろうし、エイルなんて気づいたところで無視するだろう。

「それに、今日のネイルはハロウィンカラー」

「はいはい」

あたしはげんなりとしつつ、ぶらんとぶらさげられている現状がイヤでぶるりと身震いするようにして人の姿へと変化した。

途端にいつも居るんだかいんだか判らないうちの蝙蝠が追従するかのように変化し、ぼわんとあたしの背に張り付いた。

「あら、あんたの蝙蝠ってはまだ魔導師の顔じゃないの。あんたも好きねえ」

「いやいや、好きでその顔させてる訳じゃないってば」

何よりその話題は駄目だ。

魔術を紐解くだけなのだから、本来であれば大元の顔を忘れたところで問題が無い筈だというのに、あろうことか——なんか微妙に違うのだ。違和感ばかり。

もつとのほーんつとした、もしくはのペーんつとした顔だったと思うんだけどね。色々いじくっていたら、のっぺらさんになってしまったのでシュオンは相変わらずエイル仕様だ。

「あ、でもそれっていいわよね」

ふいにアンニーナはにんまりと唇をゆがませ、あたしの背後に張り付く似非エイル——三割増しアホ増量をじろじろと眺め、ぱちりと指を鳴らした。

「いやあん、似合うわ魔導師」

「何するんですかあつ」

シュオンがわたたと慌てているが、あたしはべりりとシュオンを自分から引き剥がし、ふむつとその姿をじっくりと観察してしまった。

はつきりいって趣味がおかしいアンニーナにしては上出来の部類だろう。

エイル吸血鬼バージョン。

蝶ネクタイに真っ黒いマントといういかにもわかりやすうい感じの吸血鬼。

「つてか、考えてみればシュオンってもともと蝙蝠じゃないの」

「でもぼく血い吸い系じゃないですしい」

そう、シュオンは蝙蝠だけれど血は吸わない。

フルーツを主な主食としているのだ。魔獣、もしくは使い魔としての自覚が足らん。気合で血ぐらい吸ってみろ。

「マスター、マスター、似合います?」

ばさばさとマントを羽のように広げてみせるシュオンに、あたしはいつもと同じように「はいはい」と適当に相槌を返してやった。

途端にシュオンの顔——三割り増し残念エイルが破顔する。

うおっ、なんかキシヨイ。

思い切り鳥肌がたってしまった。

あああ、早くコレの顔なんとかしないと。もういつそのことそのへんの村人Aさんとかを見本にしちやえばいいような気がするけどね。

「ブランっ、お菓子要らないからさ、ちょっとコレ貸してよ。なんなら、うちの鷹貸してあげるから」

「あー、別にいいわよ。でも鷹ってちょっと怖いし、なんならうちの蝙蝠永久——」

「ひどいつ、ひどいですよっ。ぼくは身も心もマスターのものなのにつ。勝手にやりとりしないでくださいよおお」

びゃんびゃんうるさい蝙蝠をアンニーナに押し付け、あたしは「そかー、今日はハロウィンだっけ」とにんまりと口元を緩めた。

魔女にとってはやっぱりハロウィンってのは特別なお祝いよね。何より、「悪戯されたくなければお菓子をよこせ！」なんて、なんて素敵なフリーズ。勿論悪戯だってやりたいし、お菓子だって大歓迎だ。

あたしはとんと床板を蹴った。
勿論——こういう時にからかう相手は決まっている。

「つーまーらーなーいいいいいい」

あたしはがっくりとうなだれた。

現在絶賛仕事中であるロイズ・ロックときたら、あたしが突然その背後に現れ、定番の台詞を口にした途端に菓子をひよいと出した。バスケットひとつ分。

「ほら。ちゃんと座って食べろ。飲み物は果実水がいいか？ 紅茶？」

「……いや、んー……お菓子は嬉しいんだけどね」

この反応がつまらんわー。

もっと嫌そうな顔したりさ、追い出すような素振りとかされたら面白いのにさあ。この準備万端待ってましたっていう感じはどうなの

？

どうなのさっ。

警備隊の隊舎内――ロイズは自分の執務用の机に向かって本日の報告書に一枚一枚目を通していたようで、苦笑しながらあたしの頭をなでた。

まったく、いつまでたってもチビブラン相手にしているような態度ってちょっと腹立つ。

あんまり腹が立つものだから、あたしはぼふりと自分のサイズをチビサイズに切り替え、ロイズの膝に乗っかり嫌がらせ全開で菓子ของ包みを解き始めた。

「ブラン、ちょっと仕事ができない」

「しらなーい」

知るか、ボケ。

「職場なんだぞ、ここは」

「しーらーなーいー」

あたしは言いながら口の中にボンボンを放り込んだ。

熊は苦笑をひとつ落とすと、あたしの体をちよつとだけずらして自分の仕事をやりやすいようにと画策してみるが、当然そんなの許す訳がない。あたしは更に邪魔をしてやろうと、もうひとつ菓子の包みを解いてロイズに差し出した。

「はい、どーぞ」

ほら、どうだ。

こうなったらとことん邪魔してくれる。

悪い魔女ブランマジュを舐めるでないわ。こちらら嫌がらせのエキスパートですよ。

当初の——トリック・オア・トリートなどなんのその。菓子も悪戯もあたしの本領でございますよ。

親指と人差し指でつまんだボンボンをずいずいと口に押し付けてやると、実は甘いものが苦手なロイズが渋々という様子で口を開いた。

途端に、あたしはむぎゅりと口の中にぼんぼんを詰め込んだ。ちよつと指先舐められたけど構うものか。相手の嫌がることは大好物です！

「くそっ、職場で鼻血がでたらどうしてくれる」
ぼそりとつぶやく熊の言葉に、あたしは心の中で高らかに勝利宣言をしていた。

くははははは、ざまあみろおお。

「あんな、ブラン」

「んー？」

なによ？

機嫌を良くしたあたしがロイズを見上げると、ロイズはふいに眉間に皺を寄せた。

「——ハロウィンだから来たんだよね？」

「当たり前でしょ」

「じゃあ、もしかしてエイルのところとかも……いくつもりか？」

なんだか口調が固いが、あたしは顔をしかめた。

「もう行った」

「行ったのか？」

「それ以上聞かないでくんない？　　つとに、あいつつてば腹たつうううう」

あたしはきいいいと怒りながら口の中に菓子を放り込んだ。

——トリック・オア・トリート。

あたしが言うより先にあのエロ魔導師ときたらさっさと口にした。

——トリック・オア・トリック。

本当に本当にほんとうにつ、あのオトコときたらこっちの斜め上の思考回路をしくさってくれてむかつく。

絶対にいつかぎゃふんと言わせてやる。

ごめんなさいブランマージュ様って言わせてやるんだからっ。

覚えてなさいよっ。

「ブラン、えっと、エイルと何が」

「うるーさーいいいい。御菓子がまずくなるっ」

あたしは真っ赤になりつつ、ばりばりと菓子の包装紙を破り捨てた。

ファティナ&ルティア対談。

企画！ ルティアとファティナを会わせてみた。

二人の名前は実に似ている。そして、二人の性格は正反対。ということ、お二人を会わせてみることにする。

【あたしの魔法使い。】ルティア。

【陽だまりのキミ】ファティナ。

「こんにちは、ファティナと申します。現在十六歳、夫と義息二人がおります」

蜂蜜色のゆるいウェーブのかかる髪に翡翠の眼差しでほやんと微笑むのがファティナ。対して、淡いブラウンの髪に同色の瞳の女性はヘッドドレスに侍女服、いわゆるメイドさんのような姿のルティア。

「ルティアですわー、二十四歳独身。婚約者アリですう」

二人はにこにこ言いながら小首をかしげた。

「名前は似てますけど、外見は随分違いますわねえ。年齢もちがいますしい」

外見ではなく、格好が違うが正解。

「ですわね。ルティアさんは婚約者の方とは仲が宜しいの？」

「ルティとエディ様は相思相愛のらぶらぶですわよお」

あっさりと答えたが、ルティアの婚約者のエルディバルトは少し離れた場所で「ちょっと待て！」と声を荒げているが、完全無視。

「よろしいですわね」

ちょっと寂しそうなファティナは瞳をそっと伏せた。

「ファティナさんは旦那様と仲良しでいらっしゃる？」

「旦那様と仲良し……かはちょっと判りません。ですが、義息とはとっても仲良しです」

気を取り直すようにファティナが元気に言うと、ルティアは小首をかしげた。

「旦那様との間にお子さんの予定は？」

「ふふ、今度旦那様に授けていただだけきまわっ」

「まあっ、素晴らしいですわね」

ルティアは嬉しそうに言い、ファティナの手をぎゅっと握った。

「産み分けの方法とか、私知ってますわよー。知ってるだけでいまのところ役立たずですけどお」

「産み分け？ あ、子供を産み分けるのですか？」

ファティナの常識の中では未だコウノトリ説が有力です。男女が同衾すると子供ができるという説はどうやら嘘だと学びました。何故なら義息と同衾しても子供ができないので、これは嘘なのです。

「そうですね、女性の方が上のほうが――」

「女性が、うえ？」

ファティナはきょとんと瞳をまたたてしまった。

「それに一回目と二回目では、二回目の方が新鮮ですから、断然二回目のほうが良いと思いますのよお。ですから、一回目は、口でしてさしあげると宜しいですわあ――エディ様は上のほうよりも下の……」

「え、あの……？」

「でも一回目の方が濃厚っていう説も捨てがたいのですわあ。ファティさんはどう思いましたえ？」

「あ、あの……？」

ルティアの背後からエルディバルトの手が伸び、その口をがしり

とふさぎ、ファティナの背後からは彼女の義息であるヴァルフアムがぐいっと力任せにファティナを抱き込んだ。

「よけいなことを吹き込むな！」

「バカなことを言ってるんじゃないっ！」

ルティア・ファティナ対談失敗……

このまま放置していたらファティナが許容量一杯で寝込む恐れアリ。ファティナには当然今まで通り無垢——というおばかさんでいてもらいたいと思います。

【魔法使い】三人娘対談。

「【あたしの魔法使い。】の謎を暴露、対談でーす！」
マイク片手に元気なルティアさん。

あたしはうんざりとしながら彼女を見て、

「謎って、イロイロありそうですけど暴露しちゃ駄目でしょ」

「そうなのですよー、この話ってAさんは知ってるけどBさんは知らない。AとBさんは知ってるけどCさんは知らないってハナシ実は多いのです」

「半分以上誤解と勘違いでできてますわよね？」

「そうなのですわー！ 私はエディ様がXXする時XXXな癖を知ってますけれど、皆さんは知りませんものねっ」

「知らなくていいですっ！」

「え、あの、それは……」

「マリーはまだ十四歳なんですよっ、へんなこと教えないで下さいっ」

ルティアさんっ。

どうしてもかんでも下ネタなんですか。

誰もそんなエルディバルトさんの癖なんて知りたくありません。

「じゃあ、各自これだけはお墓にもって行こうという秘密暴露大会！」

「全然墓までもっていったくないじゃないですかっ」

「もお、リドリーさんってば頑固」

頑固とかじゃないです。

それに、墓まで持って行きたい秘密なんて……初キス話はすでにアマリージェにはばれていたし、きっとルティアさんにもばれている

に違いない。

「じゃあっ、公の秘密をばらしまーす！」

「ちよっ、ルティア様っ」

アマリージェが慌てたが、あたしはその話には俄然興味がわいてしまった。

「公は、十六歳で八歳児に初恋です」

……それは全然ちっとも謎でも秘密でもないです。

「八歳児に臆面もなくエロエロいキスをしましたあ」
だから、それはもう秘密でもなんでもないんですね。

「よく考えれば幼女趣味ロリコンですよね」

「よく考えなくても変態ですわよー」

二人とも元気いいですね。

「公はもともと色々と制約のある方ですから、遠く離れたリドリーさんに会いにいきませんでしたのよー」

「基本的に竜峰から長く離れられませんからね」
どんな人間だ。それともお勤めの関係で？

「それを寂しく思った公がナニをしたと思いますかー」

ルティアはまるで本当にナイシヨ話をする様子でふふふっと口元を緩めた。

なんだかとってもイヤな予感を覚えたあたしは引きつり、アマリージェは首をかしげた。

「水鏡で時折りリドリーの様子は見ていらっしやいましたわ」
なにそれ？ は？

「あまいですう。マリー、公は変態なのですよっ」
ちよっ、なにをっ。

「公の屋敷にはリドリーさんの部屋があります！ 愛の間ハニと呼ばれていてその中には公がい誰も入ることはできませんが、本日はこっそりと内部を教えてさしあげますっ」

ナニその腐った名称！ 気色悪い。絶対あの男趣味おかしいって。

——母があたしに用意した部屋は、お花畑のように乙女チックな部屋でした。

ええ……

そして、あのバカが用意した「愛の間ハニ」は、

あたしの写真とあたしの絵姿とあたしの使った教科書やあたしの昔の洋服、あたしの……

「なんでこんなものまで！」

見覚えのあるリボンとかっ。

あたしが町の日曜学校で意地悪されて無くしたと思っていた数々の学用品！ 靴って、えっ、どうしてこんなものまで？

あたしはその商品の数々に卒倒しそうになった。

「なんというか、下着はもう完全に駄目ですわよね」

「見境いなくくらい変態ですからーっ」

「いやあああああっ」

って、なんで？

なんでこれ、どうして、えええ？

「変態とか言う前に犯罪ですっ！」

ああああ、もおやだ。本当に駄目人間っ。

これが神官長とか絶対にありえないっ。こんな最大の矛盾を許しているのか！？

【魔法使い】三人娘対談。(後書き)

一人ぼっち寂しい変態…

陽だまりCM&コネタ（前書き）

実は以前陽だまりの宣伝を他の作品のweb拍手の中に入れてました

そこから三つ。あと、他に十……ラストはぷちいやんな表示ありなので、駄目な人は見ない！

陽だまりCM&コネタ

「はじめまして、私ファティナと申します。

——宣伝の為に御邪魔させていただきました」

につこりと微笑むのは翡翠の瞳と緩いウェーブのかかる金髪の少女。年齢十三歳のファティナ。たまさ。が書いている【陽だまりのキミ】のヒロインです。

「【陽だまりのキミ】は私と旦那様との愛を綴った恋愛物語です」
「嘘についてはいけません」

冷やかな言葉を発する男の姿に、ファティナはふわりと微笑んだ。夫に良く似た面差し。色素の薄い金髪に冷たい碧玉の瞳のヴァルフアムは、ファティナの継子です。

「ヴァルフアム様もいらしたの？」

「貴女に宣伝などさせてはどうなるか判りませんからね。案の定、そんな見え透いた嘘をおつきになる」

「嘘なんて」

「【陽だまりのキミ】は私が八つも年下の義母であるあなたを育てる涙ぐましい育児の物語です」

「……ヴァルフアム様」

「なんですか、義母うえ」

「言ってて切なくなりませんか？」

「——」

「それに私は義母ですよ？ 育てるといえば、私がヴァルフアム様を育てるのが筋というものではありませんか」

「八つも年下の小娘に育てられる覚えはありません！ そもそも、あなたときたらっ」

——陽だまりのキミは八つの年齢差の義母と継子の日常を書いた物語です。年下の義母に振り回されるヴァルフアムの、もしかして禁

断の恋？かもしれませんが、まあ、基本的には育児かもしれません。

——自分が何を見ているのか、メアリは正直理解できなかった。

階下と呼ばれる場所がある。

邸宅・屋敷の半地下を示す言葉で、一般的には厨房や洗濯場、リネン室、使用人の為の部屋がある場所を示し、主筋の人間がそこを訪れることは滅多にない。そこを取り仕切るのは女主ではなく、執事の仕事であるからだ。

だから、その階下の一室で執事を目にすることは何の問題も無い。あるとすれば、その執事の口には細身の葉巻タバコが咥えられ——軽く手を添えて火をつけているというの現状だ。

「煙草——吸うんですね」

「すみませんが、嫌いでしたら他をあたって下さい」

クレオールはほんの少しだけ眉間に皺を刻み、中指と人差し指に煙草を挟むようにして言った。

メアリは逡巡したが、その珍しい光景に思わず退出ではなく留まることを選んでしまった。

自分はただ、菓子鉢を取りに來ただけなのだが。

「意外です」

「何がでしょう」

「煙草ですよ、勿論」

「——」

「ファティナ様はご存知……ではないのでしょうか？」

半眼で睨まれ、思わず言葉が小さくなる。

しかし、クレオールは深く煙草を吸い込み、ゆっくりと紫煙をくゆらせながら壁にもたれた。

「問題でも？」

「ありませんけれど。でも」

くすりと笑みがこぼれてしまった。

「普段のクレオールさんからはちっとも想像できませんから」

「時々、ほんの時々——吸うだけです。精神安定剤のようなものです」

嘆息するように言われ、ふとメアリは好奇心にかられてしまった。

「胃痛にもきますか？」

「——」

「いえ、あの……最近ちょっと、胃が痛くて、ですね」

思わず視線を逸らせれば、クレオールは煙草を灰皿に押し付け、自らの上着の内側から小さなピルケースを取り出し、中からいくつかの丸薬を取り出して顎先でメアリに手を出すようにと示した。

「胃薬です」

「ありがとうございます」

そう告げながら、メアリは手の中の丸薬をしげしげと見つめてしまった。

クレオールさんもストレスがたまるのね。

——そしておそらく、二人の胃痛の種は同じものだろうと容易く推察できた。

「お互い苦労しますね」

愛想笑いで言った途端、クレオールは半眼を伏せてメア리를睨みつけた。

……もう少し打ち解けたいものだ。

メアリは切実にそう思うのだった。

たまさ。が毎週水曜日に更新を（予定）している【陽だまりのキミ】は、八つ年下の義母と八つ年上の継子の物語です。

「義母さま……」

「駄目ですっ、私とあなたは親子なのですよ」

「血だって繋がっていない。何の障害があるというんだ」

「お辞めになって、私は旦那さまをっ、ああっ」

——という物語ではありません。

「馬は危ないと何度言えればいいんですか！ あなたの様な体力の無い人間が乗馬などとあつかましい！」

「いいじゃないですかっ、ヴァルフアム様の意地悪っ」

「怪我をしてからでは遅いんですよ、ちよっとそこに座りなさい！」

「——怒りんぼう。男のヒステリー……」

「聞こえてますからね！ 今日はおやつ抜きです！」

という——継子であるヴァルフアムが義母であるファティナを育てる涙ぐましい育児日記です。

今のトコロは……まあ、うん？

「添い寝は平気ですか？」

「親子ですから」

「キスは平気ですか？」

「親子ですから」

「御風呂は平気ですか？」

「――どうでしょう？」

翡翠の瞳の少女は小首をかしげてしばらく考え込みました。

どうやら回答が思いつかないようです。

「ヴァルフアム様に聞いてみますね」

にっこりと微笑んだ少女でしたが、彼女の八つ年上の義息に小首をかしげて尋ねてみました。

「ヴァルフアム様、御風呂は一緒に入れます？」

「親子ですから」

「……でもちょっと駄目な気がするのですけど」

「義母うえも子供の頃はご両親と御風呂に入ったりしたでしょう？」

「しなかったと思います」

それに今は子供ではないと思います。

「私はしましたよ。義母うえのご家庭ではそうしなかっただけで、うちでは普通にありました」

絶対に嘘だと思われます。

「普通は一緒に入ったりするものでしょうか？」

「ええ普通は」

だから嘘ですよ。

「恥ずかしい気がしますけど」

「何が恥ずかしいんですか？」

恥ずかしいでしょう。

「……だって」

「義母うえにとって私は恥ずかしい存在なのではないですか？ とても悲しいですね」

「そんなこと思っておりません！」

「では何も恥ずかしいことはありませんね」

――そんな義理親子の二人を、執事クレオールが生あったかい眼差しで見つめています。

ほやんなファティナと最近ちよっと「親子」の上に胡坐をかきだした息子の――下らない日常。それが【陽だまりのキミ】です。
毎週水曜日更新【予定】で連載中。

以下は暑中見舞いでweb拍手にして掲載されていたもので、ちよっとぶちいやんな表現があります。

そういったものがダメダメ！ な方は下に行かずにおとなしくバツテンクリックが心の平穩の為だと思われます。

白い肌にシーツをまとわらせ、胸元でそれを押さえ込んだ指先。見上げてくる瞳には戸惑いが溢れ、ぬれた唇は誘うように薄く開いていた。

「ヴァルフアム……さま？」

問いかけが、甘い。

いつもは結い上げられた髪がピンや飾りを全て取り払われ、その蜂蜜色の豊かな髪が白い肌の上でさらりと揺れる。

触れと――それは命じているのだ。

きしりと片膝を寝台の上に乗せ、伸ばした指先がみっともなく震えやしないかと口元に笑みが浮かんだ。

「義母うえ……」

伸ばした手に白手があり、直に触れたい欲求にもどかしげにもう片方の手で白手を抜き去ろうとしても、みっともなく白手の上を指が滑る。

緊張と、期待に胸が震えていた。

咄嗟に自分の指に歯を果てて白手に緩みをつくり、今度こそ反対の手で一息に白手を抜き去った。

そのままの勢いに任せ、彼女の細い首筋にふれ、うなじの辺りを
なで上げた。

ファティナの瞳が不安にゆれ、こくりと喉が上下する。

――わずかに見えるおびえが、ぞくぞくと体内に新たな熱を呼び覚
ます。喉が無意識に動き、いつの間にか溜まった唾液をこくりと飲
み干した。

「何を、なさいます」

「――黙って」

逃げないで……

囁きがかすれ、そのままの勢いで唇を押し当てた。

華奢な体をのけぞらせ、その唇をむさぼる。

――唾液が、甘い。進入した舌先が相手の舌を捕らえようと奥へ奥
へと侵略をしかけても、おびえた相手は必死に逃れるように身をよ
じり、舌さえ萎縮するように奥へと引き込む。

更に力を込めて抱きしめ、意地悪くあいた手でファティナの鼻を
つまんだ。

口付けしながら酸素をむさぼるなどということができない小娘は、
すぐに苦しさに身を震わせて体をこわばらせた。

力が抜けそうになったところでふさいだ鼻を自由にしてやれば、
慌てたように身じろぎし、その舌が動く。途端に自らの舌を絡ませ
て引き出し吸い上げる。

自分の口腔にファティナの舌を招きいれ、ついで彼女の唾液を吸
い上げた。腕の中の少女の体温があがる。もっともっと反応を引き
出したくて、わざとびちゃりと音をさせた。

小さな吐息が耳に入り込み、羞恥に身もだえする義母に自身が固
く強い欲望を募らせるのを感じた。

――こうすれば良かったのだ。
笑い顔を護る？

泣いた顔だって愛しいのだから……もとから、こうして閉じ込めてしまえばよかった。

そのまま肩を押して寝台の上に倒せば、ファティナの潤んだ眼差しが不安ばかりをにじませて自分を見上げ、ゆるく首を振った。

「なにをなさいます」

「――あなたはそうやって知らぬふりをして、私を苦しめたいだけなのでしょう？」

首にかかるアスコットタイをしゅるりと引き抜いて、放り出す。

「意地悪で酷い女だ」

「ヴァルフア……」

「無知のフリで私を惑わし、私が慌てふためく様を冷静に観察していたのでしょうか？」

――意地悪なことを言っているのは自分だ。

言葉を操りながら、どんどんと自分の中で膨れ上がるものに笑みがこぼれる。

「悪い子には、しおきが必要でしょう」

シーツの下にはつきりと判る胸の膨らみ。その先端をそつとなぞるようになぞりあげ、きゅつとその形と弾力とを楽しむ為に包み込む。自分の下で息を飲み込む翡翠のいとおしい娘を前に――敗北の狼煙をあげよう。

「おはようございます」

「……」

カーテンが引かれる音で目を覚まし、ヴァルフアムは上半身を起こして前髪をかきあげた。

部屋には一人きり。いや、クレオールがいるが自分の隣に愛しい義母はいない。

「ふ……ふふ、ふふふふふ」

夢オチ！

夢っ！？

——……許さんっ。

無意味な怒りに奇妙な含み笑いをする主の前に、クレオールは無表情で持ち込んだ湯桶に水差しの水を足し、温度の調整をしながら不気味な主の様子にそっと吐息を落とした。

なんだか判らないが、とりあえず気持ちが悪い。

夢オチ！！

石をなげてはいけませんよーっ。

共にいて（陽だまり・イラスト）

「おかえりなさいませ」

庭先で犬と戯れている子供のような貴女を抱き上げて腕の中に閉じ込めることはこんなにも容易いことなのに。

「今日は何をされていたのですか？」

陽だまりの中が誰より似合うあなた。

「昼にセラフィレス兄さまとリールが来てくださいましたの」

あたたかで柔らかで清らかで何よりも愛しいあなた――

「とても楽しかったですわ」

――暗闇に閉じ込めて私の名だけを呼んで欲しい。

「あなたの義息はのけものですか？」

――唇に触れて、あなたの血脈のありかをさぐり。

「のけものだなんて」

――甘い責め苦の下で、吐息のうちに身を震わせて。

「ヴァルフアム様ときたら本当に時々幼い子供のようにですわね」

呆れる程の贅沢は夢想到に留めて、どろりとたゆたう闇を深い場所に沈めて。

>i15498—1370<

唯一願うはあなたに共に居て欲しい――

【陽だまりのキミ】ファティナとヴァルフアムのイラストを頂きました。

描いて下さいましたのは、なんと「シャドウ・ガール」のぷんにゃ様でいらっしやいます。

ご自身の執筆もお忙しい中描いていただけたことに、わたくしは鼻血がでそうな程感激致しました。

小話は後付ですので、イラストのイメージと合わないかもしれませんが……

ほえほえ
純真無垢のファティナと、彼女を抱き上げる義息ヴァルフアム。
このイラストを一目見てわたくしが思いましたのは、

「ヴァル！ すかした顔で何を考えてるんだー」でした。

イラストの著作権はぷんにゃ様にございますので、転載や無断使用はご遠慮下さいませ。

そしてぷんにゃ様、ヴァルフアムとファティナのイラスト、本当にありがとうございました。

陽だまり小話集（web拍手）

品の無いくしゃみが出た。

「ぶわくしゅん」……しかも二発。

無言でクレオールがハンカチと、そして胸元のポケットからピルケースを取り出して薬包紙に包まれたクスリを二つ差し出した。

「風邪は困ります。ファティナ様には近づかないで下さい」

「……わー、クレオールさんて優しいですね」

ファティナ様にだけ。

思わず棒読みになったメアリだったが、それでもありがたくクスリは受け取っておいた。

「優しくして欲しいんですか？」

不意に、クレオールが身を低くしてメアリの耳元に囁いた。

あまりのことに硬直し、かあっと体温が上がったメアリだったが、しかしクレオールはすぐに身を引き離し、

「最近ドレスがきつそうですが、サイズ直しをしてさしあげましょうか？」

それは優しさじゃない！

赤面してしまった自分が憎いメアリだった。

「やあ、甥っ子！」

やけに陽気な男とであった場合、無言で通り過ぎるのが一番好ましい。だがしかし、相手はがしりとヴァルフアムの肩口を掴んだ。

「なんだなんだ、つれないじゃないかー」

「生憎と私は暇人に付き合っている暇は無い」

「そうかい、じゃあ仕方ない。ファティのとこいって可愛い義息の
ないことないこと吹き込んで来よーっと」

「つつ、おまえはっ」

「え、やだ？　しょうがないなー。じゃあ、有ること無いことにし
ておいてあげる。ぼくって優しいよねっ」

最近二人は仲良しです。

→一方的に。

「ヴァルフアム様の大切な方を傷つけてはいけませんっ」

——怖さを必死に押さえ込んで義息の将来の嫁（には絶対にならな
い）を守ろうとした奥様は素晴らしい。がんばりました。偉いです。
いくらでも褒めて差し上げたい。

けれどメアリは勿論内心で突っ込みを忘れていなかった。

「——ヴァルフアム様の大切な方、それはあなたです……」

ですので本当におとなしくして下さい。もし自分を庇ってファ
ティナに何かあれば、自分があの陰険馬鹿息子に八つ裂きされたり
ヘタをすると屋敷から追い出されますから……

「よくやりました」

クレオールが慇懃な調子で言う言葉に、メアリは一瞬判らなかつ

た。

それからじんわりと言葉が浸透し、ファティナを守ったことについて褒められたのだと理解し、思わず嬉しさがこみ上げてきた。

クレオールが人を褒めることが無い訳ではない。彼は執事という立場で階下を網羅していて、人の仕事をきちんと褒めることも知っている。だが、家庭教師である自分が褒められることは滅多に無い。

「まあ、当然ですが」

――浮上した途端に落とされました。

そうですね！ 当然ですね！ ええそうですよっ。

最近ガラまで悪くなってきたメアリだった。

いふくたたとえばこんな物語（陽だまり）

十八という年齢で受爵されたものは騎士——一代限りの爵位は子に受け継がれるものではない。だがそれは、一つの戒めのように、一つの区切りのように胸に深く突き刺さり沈んだ。

「次は結婚市場だな」

ニヤリと口の端に笑みを浮かべる友人に冷たい一瞥をくれて、まだ馴染みの無い爵位の印である徽章に軽く触れて緩く首を振った。

「必要がない」

「独身主義って訳にもいかないだろ」

「——相手はもう、決めてある」

「はあ……また来たんですか」

アパートの管理人であるセレ未亡人が来客を告げに来たことに、メアリは嘆息した。

以前は住み込みで家庭教師をしていたのだが、今は街の中流層の区画にある女性専用のアパートに暮らしている。

このアパートはある慰謝料として某侯爵家に用意された正真正銘メアリ自身の邸宅だ。

元々は集合住宅ではなかったが、無駄な部屋数と当然管理し続ける為には現金収入も必要ということで、女性専用のアパートとして改良し、今では大事な収入源となっているのだった。

一階をオープンフロアにしてある為、一階だけは男性が入れるようになっていて。だがしかし、そういったルールを無視する少年はセレ未亡人が待つようにと指示していたのも無視した様子で、メアリの私室の扉に腕を掛けた。

「メアリ」

「エイリク様、頼みますから下でお待ち下さいませ。ここは男性禁止区画です」

「婚約者の元に行くのに何の遠慮が必要だ」

冷たく言い切られ、メアリは暗澹たる吐息を落とした。

「そのことは幾度も話し合ったではありませんか。そもそも、私とエイリク様の年齢差ときたら十一ですよ。いったい私を幾つだと」

「二十九だ」

遠慮のえの字もなく言い切られた。

勿論その通りなのだが、女性に向かって年齢を突きつけるのはどうだろう。メアリは口元を引きつらせ、無理矢理上階にあがってきてしまった相手におろおろとしているセレ未亡人に微笑みかけ「ここはもういいですから」と引き上げさせた。

家主である自分がルールを破っているように見えるが、破っているのは無遠慮なこの子供だ。

メアリはとげとげしい口調で「出入り口に立たれると邪魔です。ここまで来て水をぶちかける気はありませんから、どうぞお入りになったら？」とソファを示した。

「言っておきますけれど、あんまり不躰なまねばかりなさるようでしたら、ファティナ様に告げ口しますからね」

釘を差すようにきつく言えば、途端にエイリクは顔を顰めた。

「義母さまに言うのは卑怯だ」

そんな表情をされると昔と変わらぬ少年の様相を見せてくれる。

――何より、この少年ときたら相変わらずファティナ様が大好きだ。それがまた実に微笑ましい。

しかし、あの頃とは確実に違うことがある。

「本当にご兄弟でそっくりですこと」

メアリが呆れた口調で言えば、エイリクは眉をびくりと反応させ、

冷たく彼女を睨んだ。

「兄さまとぼくは違う」

——そう、妄信的に兄を慕っていた少年は、今や兄と冷たく舌戦を繰り広げられるまでに成長していた。それがよいことなのか悪いことなのか、メアリにも判りかねるが。

「それで、本日はいったいどういったご用件ですか。礼服など召されて」

メアリはお茶の準備の為に席を立ち、反対にエイリクに座るようにと示そうとしたが、エイリクはつかつかと長靴の音をさせて近づく、メアリとは一歩離れた場で立ち止まった。

「陛下より騎士の爵位を受爵した」

「ああ、それでその立派な身なりですね。おめでとうございます——」

メアリは瞳を細め、自らの体勢を整えると恭しく一礼し、心からの賛辞を口にした。

小生意気だった少年が、今は正装に身を固めて立っているのだから時の流れとは恐ろしいものだ。

肩に房飾り、腕には徽章。

このように言えば失礼だが、馬子にも衣装——いや、元々彼は侯爵家の次男だ。正装すればその姿は実に惚れ惚れと世の女性を虜にするだろう。

社交界に出るようになれば注目を集めずにはいられないだろう。そう思えば、ほんの少し寂しい気がするが、それはきっと姉のような気持ちだろう。メアリは彼の成長をずっと見てきたのだから。

「メアリ、この日に決めていたんだ」

「何をでしょうか？」

まるで弟が立派になった様子を眺めるようにしていたメアリは微笑んだ。

「あなたを抱く」

冷水を浴びせるかの如くあまりにも率直すぎる台詞に、メアリは思考を飛ばしかけ、ただ幾度も瞳を瞬かせて面前の少年を見た。

そう、少年だ。

なんという悪い冗談だろうか。

「あの、エイリク様？」

「エイリクでいい。ぼくはあなたの夫になるのだから」

「——意思の疎通をご存知でいらっしゃいます？ 私にはそんなつもりは……」

「貴女がぼくに結婚を持ちかけたんだ」

びしりと突きつけられた言葉に、メアリはとりあえずというように相手がこれ以上近づかないようにと自分の前に手を突きつけた。

「幾度もいいましたけれど、アレは——冗談です」

その昔、彼の家人によって怪我を負ってしまったメアリが、償いをしたいという十一歳の少年に「将来自分が独り身だったらも嫁にして下さい」と確かに言った。言ったが、それはあくまでも冗談だ。それ以上のものではなかった。

だというのに、この少年ときたらそんな冗談を未だに本気にして
いるのか。

「悪いが冗談じゃない」

エイリクは冷たく言いながら、首にふんわりと巻かれているクラヴァットを片手で引き抜き、しゅるりと絹の音をさせた。

どきりとメアリは心臓が音をさせるのを感じる。

「責任とか義務とかで結婚なんてするものではありませんでしょう

！」

「責任とか義務のつもりは無い。あれ以来ぼくはずっと貴女を見てきた」

「――エイリク様、冷静に」

「ぼくは冷静だ」

そういいながら、上着のボタンを一つ一つはずしていく。その姿がやけに色っぽく見えて、メアリは思わず視線をそらした。

「あなたに時折り男の影があった時、どれだけぼくが苦しんだとおもう」

「男って……そんなものは」

「当然だ。いちいち排除したからな」

ぼさりと言い切るその言葉に呆氣に取られた。

「排除……」

「あの兄と血は確かにつながっているらしい」

――そう鼻を鳴らす相手を咄嗟に見返すと、エイリクは上着をばさりと椅子へと放り投げた。

「メアリ、愛している。結婚しよう」

手首を強く捕まれ、ささやかれる言葉にふっと――以前、この少年とそっくりな男にされた求婚がぶわりと自分の中によみがえった。

それは求婚とは名ばかりのもので、愛情など微塵もない惨めなもの。

メアリはぐっと腹部に鉛球がねじこまれたような気持ちになりながら、真摯な眼差しで自分を見下ろしている少年を見上げた――ああ、いつの間にこの少年は身長が伸びたのだろう。出会った当初は見下ろしていたのは自分だったというのに。

「……愛して」

る？

そんなのは嘘だ。

そう言葉を続けようとしたのに、ふわりとメアリの唇がエイリクの薄い唇に触れられた。軽く、ただなぞるような口付け。

そのままそつと顔をあげて、瞳を真摯に合わせ、エイリクは囁いた。

「十八になるまではと我慢したんだ。貴女を――愛している。それを証明する為にできることなどないけれど、ぼくの持つ全てを貴女に差出し、貴女が望むならこの心臓すら取り出そう」

掴まれた手首をぐいと引かれ、メアリの手の平がエイリクの胸に触れた。

高い体温と、早鐘を打つ心音。

冷静だと言い切った相手の心音は、冷静さなど微塵も感じさせない鼓動を打つ。

よくよく見れば確かに緊迫した空気をはらんでいたエイリクだったが、やがてふつと微笑を湛え「特別に、義母さまを義母さまと呼べるように頼んであげるよ」茶目っ気たっぷりの台詞を口にした。

途端、メアリは思わず笑い出してしまった。

「ファティナ様をお義母さまと呼ぶのは――楽しそうですね」

「きつと楽しい。義兄さまは相当怒るだろう。ぼくが義母さまと呼ぶことすら怒るから」

「私はきつと年若い貴方をたぶらかした悪い女だと言われるわ」

「貴女は十一のぼくを確かにたぶらかしたんだ。ぼくの手を無遠慮に掴んで。でも、その後は、貴女をたぶらかす為にぼくが努力したことはちゃんと判っているだろう？」

――女史とは言わない。メアリでいいな。

――今は無理だが、いつか貴女に男爵位を取り戻させる。

あれらをたぶらかすというのかどうも疑問だが。
メアリは肩に入っていた力を抜いた。

もう仕方ない、だって……こんな求婚を断れる女などいないだろう。

難点があるとすれば、あの馬鹿男とこの少年の容姿ときたら実によく似ていて――けれど、けれど。

メアリは優しい眼差しを向けてくる相手に応えた。

「喜んで、お受けいたします」

今もファティナと共にいる暗褐色の髪の方がちらりとよぎったが、それは淡い想いと共に溶けて消えうせた。

エイリクの吐息交じりの口付けが、全てを押し流す。

自分の中に甘酸っぱいような優しい気持ち満ちた途端、ふいにエイリクは身を一旦沈めてぐいっとメア리를横抱きに抱き上げた。

「え、ええっ？」

すたすたとそのまま隣室になっている寢所に行こうとする相手に慌てるメアリだったが、エイリクは口の端に笑みを浮かべて肩をすくめた。

「ぼくは求婚しにきたのではなくて、抱きに來たんだと言っただろ」

その顔が勝ち誇っているように見えて、メアリは恥ずかしさにエイリクの首に手を回して相手の丹精な横顔を見ながら、弱々しく抵抗の言葉を口にしたが、年若き求婚者はそれを微笑で封じた。

人生相談

「まずはじめに言いたい」

キリシュエータは口元を引きつらせ、冷たい瞳で面前のマイクを睨みつけた。

「どうして私が他人の人生相談など聞かなければいけない！」

「まあま、殿下。色々と考察した結果、まともな人が居なかったんです」

どうどうっと馬でも抑えるように彼の副官であるティナンは苦笑した。

「なんでしたらぼくがしてもいいんですが」

「……おまえは駄目だろ。人間的に欠陥がある」

びしりと付きつけられたティナンは壁になついた。

「人生相談を受けるならそれなりに人間として厚みがあるほうがいいのではないか？」

まだぶつぶつと言うキリシュエータ。

彼は若干往生際が悪い。

「じゃ、ぼくが！」

はいっと元気よく手をあげた明るい髪のレストランを、キリシュエータは冷たい一瞥で押さえ込んだ。

「黙れにんじん。おまえは人間としての厚みも胸の厚みも無い」

「何わけの判らないこと言うんですかっ！」

「じゃ、じゃあ私が致しましょうか？」

おそろおそろ手をあげたのは、ナシュリー・ヘイワーズ中尉だった。

咄嗟にキリシュエータは「いや、胸の厚みがあればいいという話で

は——いや、すまない。忘れてくれ」出てしまった失言に詫びを入れ、溜息をついた。

「なんでしたらうちの長男を呼んで参りましょうか？」

ティナンがふと思い立ち言えば、ルディエラも嬉しそうに瞳をきらきらと輝かせる。

「クイン兄さまなら適任！」

「呼ぶな！ 私はあいつが苦手なんだ——表面上にこやかに対応するくせに、絶対にあいつは私を敬っていない！ 内心で激しくこき下ろしているに違いないんだ」

何か激しいトラウマでもありそうです。

「いい。判った。私が聞く」

「とういうことで、キリシュエータ殿下の人生相談のコーナーです」
「ティナン、私が人生につまづいているような説明はいらない。おまえ達は出て行け」

しつしとその場の人間を追い出し、もう幾度目かの深い溜息を吐き出してキリシュエータはぼしりと机を叩いた。

「相談者、前へ」

まるで謁見のように横柄さだった。

退場！

「……それで私ですか」

某侯爵嫡男の子爵家に仕える執事、クレオールは慇懃に呟き、指定された席についた。

「クレオなら立派にお仕事をこなせますわよ」

「ありがとうございます。奥様」

「だってクレオは優しくて何でも知っていて素敵ですもの」

心からの称賛の言葉にクレオールが目元が和む。

それを冷たい目で見つめながら、彼の主であるところのヴァルファムは冷ややかな調子で言った。

「私が引き受けてもいいのですがね」

「あら、ヴァルフアム様は駄目ですわ」

あつさりと彼の義母、ファティナは言った。

「だってヴァルフアム様は他人の悩みを聞きながら怒りそうなので
すもの」

ぐうの音も出ない事実だった。

「……義母うえには何か悩みがあたりですか？」

「私の悩みは。義息がおこりんぼうで時々ちょっと困ります。ほんのちよつとのお散歩も駄目なんて酷いと思いませんか？ まるでわたくしがちいさな子供みたいに。それに最近ちよつと義息がナマイキです！ もう少しお義母さんを敬ったほうがいいとおもいますわ
っ」

ラスト辺りにあまりにも熱が入ってしまったファティナに、ヴァルフアムは口の端に笑みを浮かべて腕を組んだ。

「第一に、私を怒らせているのは義母うえの阿呆な行動や発言です。私に問題はありません。あなたを散歩に出すなどともないですね。どこの道端で野垂れるか判ったものではない。私がナマイキ？ そんなことはありませんよ。私は十分に義母うえを敬っている」
きつぱりと言い切るが、腕を組んで威圧的に義母を見下ろすその姿をみれば明らかに敬っているというのは嘘くさい。

クレオールは額にそつと手を当てたい気持ちになりながら、

「人生相談に行ってきますので、お二人は仲良くしてして下さい」
思わずそう口にしていたが、現在下らない舌戦を繰り広げている二人が聞いてくれていたかはどうも不明だった。

「どうぞ」

クレオールは穏やかな調子で来客を迎え入れた。

「はじめまして」

通された男は、クレオールと同年代かそれ以上に見えたが、実際は年下だったりするロイズ・ロック。

警備隊の隊服に、腰には拳銃を吊り下げた相手は、親しげにクレオールに手を差し出したが、クレオールはそれを受けはせずになだ席を示した。

「それで、どのような相談ですか？」

「いや、初対面の貴方に言うようなことでもないんですが」

——じゃあお帰り下さい。

内心で思ったところでそれを口にしたりはしない。クレオールの外面はいつも、いつでも爽やかです！

「うちの猫が……」

「猫が？」

「時々喋るんじゃないかとか……実は中身が魔女じゃないかとか、いや判ってるんですよ。ただの希望とか妄想だっていうのは。判ってるんだが——」

クレオールはしばらくじっとロイズ・ロックが一人でわたわたとしているのを見ていたが、やがて胸のポケットからピルケースを取り出し、中身を幾つか取り出してにっこりと相手の手に落とし込んだ。

「過労にはお気をつけ下さい」

「いや、あの……」

「では次の人！」

「うわっ」

クレオールは突然自分の面前に現れた真っ白い猫に声をあげ、ついでその猫が女性の姿に変化したことに胸元に手を当てて動揺を鎮めた。

「その猫耳は……オプシオンですか？」

「悪かったわね！ 気を抜くと出っ放しなのよっ。あたしだって好きで猫耳つけてるわけじゃないのよっ」

ばさりと自らの髪を後ろに跳ね上げ、魔女ブランマージュは足を組んで空中に座るようにして浮いた。

「あたしはブランマージュ、悪い魔女よ」

「悪い魔女？ 何か人を呪い殺したり毒薬を作ったりするんですか？」

素で問い返したクレオールだが、相手は機嫌を損ねたのか顔をしかめた。

「なんで呪い殺したりすんのよ？ 魔女は非力な人間を守るのよ？ 毒薬？ そんなもの作って何か楽しいの？」

「じゃあ何してるんですか？」

問いかけようかと思ったが、懸命なるクレオールは止めておいた。

「で、あなたはどうしてここに？」

穏やかに問いかけると、途端に猫耳が伏せた。

「あたしの中に猫がいるのよ」

「……いや、中といわず外にも出ていらっしやるようですが」

「うるさい！ この猫耳と尻尾のことはもうほっときなさいよっ」
がうっと噛み付き、けれどすぐにブランマージュは肩を落とした。

「とにかく。あたしの中に猫がいるの。それで分離しなくちゃいけない訳なんだけど！ やりかたが難しいのよっ」

失敗したら色々危なそうだし。

と切々と語られたところで、執事であるクレオールといえど、魔女の生態などわからない。

「魔女の研究者とかに助力を仰いでみては？」

「——それ、もうとつくにした」

「役に立ちませんでしたか？」

「現在進行形で研究対象になってるけど……最近怖いのは、体内で猫の体を再構築して体外に取り出す方法とやらを考え付いたみたいなんだけど、うっかりしていると実践しようとするのよ」

あの野郎っ。と拳を握り締めるブランマージュに、クレオールは「何か問題ですか？」と問いかけた。

「問題は大ありよっ！ ようはあたしが妊娠出産してみればいいっていうのよっ。」

信じられる？ 魔女なのよ、あたし？ しかも、妊娠出産って、一人でできるもんじゃないでしょっ」

「はあ……」

「あのぼけなすの子供なんて生みたいものかあっ！ 悪魔類鬼畜目なのよっ。てか、あのボケは猫の子でいいのか自分の子がっ」

なんだかやたらややこしい話になり、意味がつかめず困惑したク

レオールの前で部屋の扉が無遠慮に開き、黒髪の青年が顔を出した。
「ブラン、こんなところで油を売るな。研究時間が減る」

「今日は休みて言ったでしょーがっ」
言いながら、突然魔女は白い猫へと変化した。

途端に青年の黒灰の瞳が陰り、口元に皮肉な笑みを刻みつける。

「そうやっていつまでも猫の姿で逃げていられると思う程愚かではあるまいに」

「さすがに猫は襲えないもんねー」

「人を変態扱いするな」

猫をつまみあげてさっさと退場する相手を見送り、クレオールは無意識に自分のポケットを撫でた。

なんだろう、煙草吸いたい……――

「あの、いいですか？」

そっと【人生相談】の扉をたたいた少女の姿に、クレオールは表情を改めた。

――どうでもいいです。

と内心では思っているが、とりあえず仕事であれば完璧にこなす自信はある。金銭の発生する仕事とは思えないが、少なくとも最後には彼の女主の労いの一つの言葉くらいは受け取ることができるだろう。

クレオール、時々ちょっと安い男。

「どうぞ」

「はじめまして、リドリー・ナフサートと言います」

ぺこりと頭をさげた相手は十代の後半辺りと思われる「そのへんにいそうな庶民」的な雰囲気をかもしまぐった少女だ。

リドリーは示された椅子に座り、どう口を開こうかと思案している様子がほのぼのしい。クレオールは先ほどまでの疲れを飛ばし、「何か相談ごとがありますか？」

と、やんわりと促した。

「相談というか――あの……」

リドリーは視線をさまよわせ、けれど意を決するようにやっと口を開いた。

「好きな人が、いるんです」

思わずクレオール自身照れてしまいそうになった。

リドリーは膝の上においた手をもそもそと組み合わせたりつまんだりしながら「好きな人がいるんですけど」と続ける。

なんか可愛い――クレオールが笑いたいような気持ちに浸っていると、彼女は言った。

「変態なんです」

「……」

「相手が変態なんです。で、相談というのはですね。明らかに頭のおかしい変態を好きというのはあたしも変態なんじゃないかという大きな問題に直面してしまったのです！」

あたしは変態でしょうか？

と、半泣きの顔で訴えられてしまったクレオールは鎮痛な気持ちになり、一瞬言葉を詰まらせた。

「変態というのにも種類があると思いますし……もしかしたら、貴

女が思う程相手の方は変態ではないかもしれませんよ？ 思い込みじゃないですか？」

それを言うならクレオールのもう一人の主、ヴァルフアムも変態と言えなくも無い。

だが、ヴァルフアムを好きだから自分も変態という方程式は成り立ちそうには無い。

思いのままに告げれば、けれどリドリー・ナフサートは少しばかり納得仕切れない様子で眉根を潜めた。

「そうでしょうか？」

「そうですよ」

「……変態じゃないのかな？」

「そうですよ。きっとあなたの強い思い込みです」

リドリーは益々眉を潜めてぶつぶつと口の中で繰り返したが、やがて息をついて「そうかもしれないですね」と無理やり納得した様子で立ち上がり、ぺこりと頭をさげた。

「ありがとうございます」

「いえ。その相手の方どうぞお幸せに」

クレオールが見送ると、リドリーは更に眉間に皺を寄せまくっていたが、そのまま退出した。

がながんつと扉がたたかれ、入室を促すとひょこりと顔を出したのは黒髪の少女だった。

耳の左右で三つ編みを編み、それをぐるりと後ろに引っ張って結わえてある。

灰黒の透明感のある瞳は光の角度で透明な青灰にも見える。

恐ろしく綺麗になりそうな少女だが、生憎とまだ十二・三という年

齡だろう。未だ幼さばかりが目立つ。

「ちょっと聞いてくれる？」

と、少女は言いながら断りもえずにさっさと席についた。

「あたしはファウリー・メイ——未来の大召喚魔導師よ」

魔女だとか魔導師だとか……クレオールはそつと吐息を落としたものの、相手に先を促した。

「何か相談が？」

「相談がなければこんな場所にはいないわよ」

高飛車な物言いにクレオールはびきりと眉間に一瞬皺を刻み込んだ。

小生意気な子供は大の苦手だ。

やはり子供は素直で愛らしいのが一番。

彼の女主のように。

世界は女主を中心に巡っているクレオールは一生独身だろう、おそらく。

「隣のレイシェンをぎゃふんといわせたんだけど、いかんせん十歳も年齢が違うものだからなかなかうまくいかないの。何かいい方法はない？」

しかし相手が真剣な様子で可愛いことをいうものだから、クレオールは苦笑を浮かべた。

「そういうことは建設的ではありませんよ。もっと人生を楽しまなければ」

「あたしだってね、いつまでもレイシェンにかかずらってなんかいるられないのよ。なんといってもあたしは未来の大召喚魔導師なんだから。でもレイシェンってばあたしが嫌がってるのに何にでも首を

突っ込むんだもん。ここは一つぎゃふんって言わせてもうあたしのことに口出ししないようにさせたいの!」

ぐぐつと拳を握り締めるその様子は――微笑ましいといえなくも無い。

「少し距離をとってみては?」

「できればそうしてゐるわよ! レイシェンは隣に住んでるし、レイシェンの職場は学園の隣だし、毎日毎日あたしの髪を結い上げるし。口やかましいし、すぐばばにチクるし」

口にすればするほど憎しみがつのるのか、ぐぐつとファウリーはその拳をふるふると震わせ、声を高くした。

「あたしは忙しいの。召喚士としての勉強だってあるし……それに」
ふつとファウリーは声を潜めた。

「……人を探しているの」

「人?」

落とされた声音の響きに、クレオールが問いかけるとファウリーは戸惑うようにその瞳を揺らした。

「あたしと同じ、黒髪に黒い瞳の人。一度だけ会ったの。あたしの国にはこういった色彩が無いから、できればもう一度……会いたい」

切なそうな言い方に、クレオールはファウリーの瞳に合わせるように身を沈めた。

「願って叶えられないことなどありませんよ。貴女はまだお若い。何事もゆっくりとでいいのです。でも、他人に向けるマイナスの感情はあなたにとって良いものではありません。どうぞ、ぎゃふんとさせるなどといわずに健やかに日々をお過ごしなさい。他人を妬んだり、嫌ったりなどという心にまみれて日々を無駄に過ごすなんてもったいのないことです」

穏やかに諭す言葉に、ファウリーはその透明な眼差しでじっとクレ

オールを見つめ、やがて溜息を吐き出した。

「大人ってすぐにそういうキレイゴトを言うのよね」
「――」

子供なんて嫌いだ。

クレオールは思わず胸元でぐっと拳を握り締め、引きつった微笑を浮かべながら自らの女主を思い浮かべて自身の平穩を求めた。

「すみません、よろしいでしょうか？」

控えめなノックと共に入室したのは、色素の薄い青銀かと思わせる金髪の持ち主。長い髪の一筋を後ろに結わえた騎士姿の青年は、物事も柔らかに一礼した。

騎士団所属のどこかの誰かとは違う穏やかな空気を持ち主は、クレオールに一つうなずきかけるようにして名乗った。

「ティナンと申します。王宮騎士、第三騎士団所属の現在は騎士団長として第三王子殿下キリシュエータ様の副官として勤めております」

――国が違々と物腰も違う。

クレオールは内心でヴァルフアムに爪の垢を煎じて飲ませてしまいたい気持ちになった。後で実際に爪の垢をいただき、こっそりヴァルフアムの茶に入れてしまおうか。

時々普通にこんなことも考えているクレオールだった。

「それで、どのようなご相談でしょうか」

気をよくしたクレオールがやんわりとうながすと相手は躊躇する

ように一旦開きかけた口を閉ざし、唇を湿らせる。
その様子に、クレオールは安心させるように言葉を重ねた。

「ご安心下さい。受けた相談をよそにもらすなことはありませんから」

守秘義務とかではなくて、まったく興味ありませんから。

「そうですか」

ティナンは小さく確認するように言葉にし、こくりと喉を上下させて視線をあげた。

「イモウトが可愛すぎるんです」

——うちは奥様が可愛いですよ。

最近ちょっと大人びてしまって実に寂しい限りです。

「もお本当に可愛くて。お兄ちゃんは毎日心配なんです。世の中には悪い男が山にいるというのに、あの子ときたら男ばかりのところ
で生活しているんです。もしあの子に何かあったらと思うとお兄ちゃん
は気が気じゃありません」

「ああ、兄妹愛はとても素晴らしいですね」

「そうなんです。これは兄妹愛なんです。純粹な——だというのに、
殿下ときたらぼくの思いを邪推するんです。まったく、ご自身の心が
汚れているからといってぼくの心まで汚れているように言うのは
間違いです。そう思いませんか？」

「そうですね」

というか、その殿下とやらはこの男性の主ではあるまいか。
自分の主を悪く言うのは良くない。

——普段からヴァルフアムに対しては心の中で色々と思ってはいたりするが、クレオールは外見上、表面上いつでも完璧な執事です。

「そう、そうですね？　ぼくはいつだって純粹にルディエラのことを思っているのです。誰かに虐められてやらないか、誰かに泣かされてやいないかと」

實際問題毎日虐めているのも、泣かせているのもティナンであるが、クレオールは勿論そんなことは感知していません。

「ぼくはですね。他に誰かにあの子が虐められたり泣かされたりなんて我慢できないんです」

力説するティナンに、なんだかちよっぴり疲れを覚えるクレオール。

「でもあの子もお年頃です。そのうちに恋人ができたなんてお兄ちゃんに紹介しようとするかもしれないじゃないですか」

「ああ、そういうこともあるかもしれませんがね」

「でも、それを想像するとぼくはとても辛いんです。だって恋人って、キ……キスとか、してしまう訳でしょう？」

何故その年齢でキスで照れるのか。

言葉をどもらせた拳句に頬を染めるのはやめて頂きたい。

「キスなんてっ、そんな破廉恥なことは兄として許せない訳ですよ！」

「まあ、それは確かに兄として許せないこともあるかもしれませんがね」

「そうなんです。ぼくは兄としてそこは許してはいけないと思う訳です」

なんて面倒くさい兄。

ちよっとクレオールが呆れていると、ティナンはまるで賛同者を得たとばかりに力強くうなずいた。

「可愛いルディの唇をどっかの馬の骨に奪われるくらいであれば、

兄としてぼくが奪ってしまったほうがルディだって安心だと思うんです」

「――その兄としての使い方は間違ってます」

というか、認識とかもう諸々全てにおいて駄目だ。

とりあえず「守秘義務」云々よりこれはどこかに通報したほうが良いだろうか。クレオールはにこやかにさくっとそんなことを考えてみた。

爪の垢を煎じて飲ませる？

さらにタチが悪くなるので却下。

「ああ、今の方で最後ですね」

予定されていた相手が全て終わったことにやれやれと呟いたクレオールだが、実質人生相談として何も解決していないことは気付いていた。

どうでもいい――

という理念で彼は他人の行動など気にしない。

片付けをしてしまおうと思ったクレオールの面前に、一人の青年が立っていた。

阿呆な魔術師のような格好で。

「……」

思わず言葉を失うクレオールに、相手は頭に乗せてあるトップハットをひょいっとつまみあげて礼をした。

「こんにちは」

「……こんにちは。えっと、あなたは？」

「さつきリトル・リイ、リドリ・ナフサートが来てたでしょ？」

どんな相談だったか教えてくれる？　ぼくのこと言っていた？　ぼくが好きすぎて困ってなかった？　ぼくのことならばくに相談してくれればいいのにね？」

ではコレが彼女曰くの変態か？

クレオールは眉間にちよつとばかり皺が寄るのを感じた。
変態というか、変人？

「ついでにぼくの相談も聞く？」

あのね、ぼくってばリトル・リイの為なら三日三晩励める自信があったんだけど、一晩で三回続けてすると実際は結構体力的に色々大変だということに気付いたんだよ！　ちよつとインターバルが欲しいし、三日続けてってちよつときつい。ぼくも年かな？　それにね、自分で仕方なくすますのと愛するハニーをせつせと抱きながらするのは色々違う訳でしょ？

一回づつちゃあんとリトル・リイだって気持ちよくなって欲しいし。やっぱり鳴かせたいっていうかさ、わかるかなー」

だらだらと相談なのかよく判らない戯言を実に楽しそうに吐き出し続ける男を前に、クレオールは内心で呻いた。

「今まで気付かなかったけど、一つ一つの反応が凄く胸にクルよね。必死に我慢しているのに喉の奥からそれでも漏れちゃう声とか、眉間に寄せた皺とか！　あ、次は目隠しとかどうかなー。ぼくの友人が目隠しされると不安と期待で凄い感覚がイイって言うんだけど、お兄さんはどう思う？」

——変態というのは思い込み。

思い、込み……？

クレオールは瞳を伏せてとりあえずこの仕事は自分には向かないことを悟った。

少し前に不安そうにしていた少女を思い出し、ちらりと彼女に「すみません」という気持ちを一瞬だけ思い描いてみたものの、今はただ——

自分の女主人とまったりとお茶がしたい、自分の為に。

にーちゃんと嫁

一見して外国人だと判る容姿をしていた。

外交の父親についてやってきたというナーナ・トーラという変わった名前の娘は、小麦色の健康的な肌にくっきりと大きな瞳。長い睫毛をして国の習慣だというベールを頭からかぶっていた。

一目ぼれなどというものがあれば、きっとその時の現象がそうなのだろう。

クインザムは異国のその娘の姿に息を飲み込み、軽く瞳を見開いた。

しゃらんと揺れる幾つもの飾りのついたベールは、まるで猫に鈴のように彼女の場所を示す。

それは一種の枷なのだと、確かクインザムは何かの書物で読んだことがある。

女は金銭でやり取りされる商品でしかないのだと。

だからその身はじゃらじゃらとした飾りで飾られ、音をさせることによって逃げることを難しくさせるのだ。

簡単な挨拶もたどたどしい娘、ナーナは控えめに存在し、そしてその父親は俗物だった。

「伯爵、異国の娘は珍しいですか？」
クインザムは微笑んだ。

「異国の娘が珍しいのではありませんよ。私の妹に似ているだけです」

港に行けばナーナのような娘は珍しくない。

先に言ったように、彼女の国の女は商品でしかなく、奴隷制度が無

いとされるこの国にも奴隷まがい買い取られる娘が多く居る。
当然、あまり褒められたことではないが。

「妹さんに？ 伯爵の妹さんであればさぞお美しいでしょうに」
見え透いた世辞だ。

クインザムは微笑を湛えて「生憎と私とはまったく似ておりません」
と相手が戸惑うような言葉を返す。

じっと見つめていると、男は居心地が悪そうにごほんっと咳をした。

「うちの末の娘が気に入ったのであれば、どうです？ 金二袋程度で構いませんか？ いや、よければ伯爵の持つ一番小さな所領を譲ってくださいばいい」

勿論それは決して安い値段ではない。

こそりと潜められた言葉に、クインザムは唇の端を持ち上げた。

「彼女と少し話しがしたいな」

その言葉に気をよくしたように、父親はこくこくと大きくうなずいた。

それに合わせてクインザムは軽く手を払うと、近くに行く給仕を招き二・三耳打ちして、まるで置物のように作り物めいた笑みを浮かべているナーナに手を差し出した。

「こちらへ」

クインザムの言葉を理解していないらしい娘は、困ったように父親へと視線を向ける。

父親はにこやかに母国の言葉で話しかけ、そしてナーナは目に見えて強張り、戸惑いを見せたが父親の叱責にクインザムの手を取った。

習慣の違いがその手にもみられ、その手には手袋ははめられずに直接染料のようなもので綺麗な模様が記されていた。

クインザムは彼女を庭へと連れ出した。

おそらく、その間にあの男の処理は済む——人間の売買は公に禁じられた大罪だ。何より、他国の所領を望むなどあってはならぬ。

クインザムがナーナを連れ出し、広く作られた庭園の松明近くへといざなう頃あいには、ホールのほうではあわただしい足音が聞こえていたが、クインザムは無視した。

不安そうに見上げてくる大きな瞳は、漆黒のようにも濃緑にも見える。不安そうな小さな唇は、異国の言葉をつむいだ。

『あの、私は……イヤです』

——きちんと気に入られるように振舞うんだ。

先ほど父親から叱責を受けていた娘は、ぎゅっと手を握り哀願するようにクインザムをみあげ首を僅かに振った。

『私は……』

自分が父親に売られようとしていたことは理解しているのだ。そして、男が自分に何をさせようとしているのかを考え、恐怖に身を震わせている。

クインザムは外交の一つとして当然異国の言葉も学んでいたが、彼女はクインザムの言葉を理解してはいない。

『あのっ』

「国に帰ったところで、ろくなことにはならないだろう」

クインザムはあえてその言葉を口にしたしなかった。

ナーナがびくりと身をすくめ、言葉がわからないと訴える。

「うちにおいで」

『何を、言っているの?』

「可愛い異国の小鳥。私の屋敷で囀ソノナるといい」

優しく微笑みかけ、けれど相手の訴えは完全に無視してクインザムはもう一度、その左手を差し出した。

『どこに行くの?』

「君の新しい家に」

『ねえっ、何を言っているのか判らないっ』

「私は判っているから」

『ねえ、ねえっ、あなたが私を買ったというの? あたしをつ、あ

……アイジンに、するのっ?』

強く突っぱねて逃れようとする娘に、クインザムはクッと喉を鳴らして笑った。

「クインザムだ」

とんとんと自分を示して言う。

「ク・イ・ン・ザ・ム」

ゆっくりと区切って告げ、今度はナーナの手を軽くつつくようにして「ナーナ」と言う。

すると彼女は少しほっとした様子で『あなた、クインザム?』と問いかける。

その言葉にクインザムはうなずいて見せた。

『でも! 私、イヤですからっ』

「さあ帰ろうか」

『ちよっ、ねえっ、どこに行くのっ』

クインザムはナーナの手を取り、嬉しそうに自宅に帰還した――

クイン兄ちゃんは愛妻家です……

にーちゃんと嫁2

『ここどこ？ 私帰りますっ』

ナーナは突然連れてこられた屋敷に戸惑っていた。

父親は顔を出さないということは、自分は売られてしまったに違いない。長女でもないナーナの扱いなどそんなものだと理解してはいたが、だからといって言葉も判らない異国の人間のアイジンになど突然なりたくなかった。

たとえ相手が綺麗な男でも。

『ひどいわっ』

悲観して言う言葉に、クインザムは家人にナーナの部屋を用意するようにと告げて、上着を脱ぐと置かれている書棚から一冊の辞書を引き出した。

『ねえ、私をどうする気？』

ぱらぱらと辞書をめくりながら、クインザムは微笑を浮かべ、

「さて、どうしよう」

『女をお金でやりとりするなんて最低なことだと思わないの？』

「金銭授受は無かったよ。安心するといい。君は売り買いされてない」

『なに、何を言ってるの？』

「さて、何かいい単語は……ああ、あった」

クインザムは指先で辞書の文字を追い、ある単語でとめると、ちよいちよいと指先でナーナを招いた。

ナーナが眉を潜めてその手元を覗き込む。

『自由』

ナーナはその単語をぎこちなく拾い上げ、不信な様子でそっとク

インザムの顔を見た。

『自由、私——自由』

「そうだ」

『……つまり、じゃあっ、あなたが買い取ってあたしを自由にしたの？ あたしを自由にしようって魂胆ねっ』

「いや、なんか微妙に違うんだが、いや、ちがく無いような……」

ナーナはふと思い立ち、クインザムの手にある辞書を奪い、同じようにばらばらとめくってみた。

言葉が通じないというのはもう本当に厄介だ。

そして何より、ナーナの国では識字率も低い。

自国の言葉だろうと、単語一つ抜き出すのはたいへんな作業だ。

かろうじて判る単語から『イヤ』を抜き出すと、ずいっとクインザムに示して見せた。

トントントンと示す。

クインザムはその単語をじっと見つめ、ついでナーナの顔を見た。

トントントンともう一度文字を示す。

「愛してる」

「アイ、シテ、ル？」

異国の言葉は言いづらい。

うんうんとうなずき、ナーナはぱたりと辞書を閉ざした。

「クイン、アイ、シテ、ル！」

よし、はっきり言ってやったわ！

『判った？』

誇らしげに言うと、クインは「うっ」と小さく呻いて横を向き、小刻みに肩を震わせたかと思うとがばりとナーナの両肩を引っつかみ、するりとそのベールを落とした。

「ああ、もう、なんていうか可愛い」

そのまま首筋に顔をうずめてくる男にわたわたと慌てながら逃れようとしたが、クインザムは一向に気にするそぶりを見せずにナーナの腰を引き寄せた。

『な、何するのっ』

「何しようかな」

『私の国では、男に肌を見せたら駄目なのよっ』

「うちの国でもだいたいそんな感じだよ」

『結婚できなくなるっ』

「私の妻になればいい」

『アイジンはイヤっ』

さすがに愛人では無いと言ってあげようかと思ったものだが、勘違いさせておくのも面白い。

クインザムは一旦突き進む手を止めたがすぐに再開した。

異国の衣装は一枚布を巻きつける形で、それをとくのはもどかしい。

差し込んだ手が地肌に到達すると、しっとりとしたその肌触りと共にナーナが涙声でやめて欲しいと訴えてくる。

「ナーナ、欲しいと言って」

『なに？ 何なのっ？』

「欲しい」

「……ホシ、イ？」

大きな瞳に涙粒を浮かべてたどたどしく呟かれた言葉に、クイン

ザムは笑みを浮かべた。

「欲しい？」

「ホシイ」

ナーナは自分の上にのしかかる男が繰り返す言葉を『止めて欲しい?』という確認なのだと捉えた。

暴れる娘を前に、さすがに理解を示してくれたのだろうと。だから相手の言葉を、嬉しそうに繰り返して見せた。

「クイン、欲しい、アイ、シテル」

——クインザム、ヤメテ、イヤ！

「ナーナ、クイン、アイ、シ、テル」

必死に訴えるナーナに、ルディエラは、

「もお、判ったってば。ナーナは本当にクイン好きだよね」と、あてられたようにはたはたと指先で顔をあおいだ。

『人の体を好き勝手するあんな人嫌いなものっ』

一生懸命訴えています、なかなか理解は得られません。

ウィル・ヒギンズの観察記録

七月二日、火曜日――

そう書き出し、ナシュリー・ヘイワーズは肺を一杯に膨らませ、ついで一息に押し出した。

日記というかこれはある一人の男の観察記録に他ならない。

相手の名はウィル・ヒギンズ――そのへんによくありそうな名前の現状二十六歳の青年将校だ。階級で言えば少佐、そしてナシュはそのヒギンズの補佐官という立場だった。

さて、問題はウィル・ヒギンズのことだ。

ウィル・ヒギンズは黒髪に湖畔の色の瞳を持っている。あまり見ない組み合わせだ。特徴的といってもいい。そして、彼の特徴の一つに、物忘れがある。この男は昨日起こったことも忘れる――かと思えば、一年前のことを突然的確に指摘したりするのだ。

「年寄りというものは近くのものは見えなくとも、遠くのものが見えたりするものだ」

などと言葉にした挙句、口の端に笑みを浮かべてみせる。

普段はまったく不機嫌が服を着て歩いているような男だというのに、時々そんな冗談まがいのことを口にするものだから、どうにもそのひととなりがつかめない。

はじめて補佐官という職種についたおり、ナシュも相手のことを細部まで知り尽くし、その動き一つで相手の全てを理解できる有能な補佐官になろうと誓った。

その観察記録もすでに半年以上続いている。その文面を読み返せば、ウィル・ヒギンズという男が真面目な男であり、また上層部に覚えもめめたいということもよく判る。

ただし、半年以上彼の下で働いていてもはっきりとその生態が理解できない。生真面目な顔をしていたかと思えば、その表情のままおかしいことを言う。自らの副官を笑わせようと思ったのかもしれないが、もしかしたらただの独り言かもしれない。

さて、昨日のウィル・ヒギンズは黙々と仕事をこなす勤勉さを見せた。新しく西側に作られる砦の警護系統を構築する為に、他砦の現状報告書に目を通し幾つかの要点を纏め上げて他砦への訪問日時を決めていく。

ナシユは補佐官として資料を集める為に奔走し、紅茶を入れ、意見を求められれば口を開いた。

「一度北東砦に出向かねばならない」

「日程を組むのでしたら、今週末が良いと思います。再来週に入れば合同訓練の準備が入りますから」

言わずとも良いことだが、一応そのようにナシユが告げたのだが、ウィルは机の上に両肘をつけて指を組み、中指と人差し指をわずかに動かしながら眉間に皺を刻みこんだ。

「日が悪い」

この上官は女のように占いでもするのだろうか。

新聞のコラムにでも「今週末は旅行は厳禁。駄目、駄目、だーめ」とか？

生憎とナシユは占いなど見ないようにしている。信じていないからではなく、そんなもので容易く自らの心が浮き立つことがイヤなのだ。もし「今日は最高。この日に告白すればどんな異性もあなたにメーロメロ」などと書かれていたら、一日阿呆な考えに囚われてしまいかもしれない。

ただし、生憎と恋煩う相手は今のところいない。いないので「損した」と思っただけ沈むことだろう。

なんの根拠もない「損」の為に。

さて、ウィル・ヒギンズは鎮痛な様子でカレンダーを見ていた。まるで睨みつけていれば日が良くなるとでもいうかのようだ。その根暗とも言うべき性格に合わず明るい湖畔の色合いの瞳はたつぷり二分ほどはその数字を睨みつけ、ついで観念したように、

「中尉」

と、ナシユを呼んだ。

「君は、どうするつもりだ」

その問いかけの意味がつかめなかった。

何故ならナシユはこの男の補佐官なのだ。どうするも何もない。

ウィル・ヒギンズの日が悪かろうが何だろうが関係がない。

「当然お供させて頂きますが」

「――判った。努力しよう」

どんな努力が必要であるのかナシユは突っ込みたい心境だったが、その時にできる筈がない。

だからこそ、この記録でナシユは刺々しく言葉を連ねた。

努力って何？

努力すれば日が良くなるのか？　どんなだよ。

とりあえず文字の中とは言え、さすがにナシユは士官学校で覚えた低俗なスラングは入れずにおいた。この記録はそういったことを記録するものではない。まったく理解できない上官を理解しようという純粋な職業的観察だ。

ナシユは翌日、ウィル・ヒギンズの記録を書き込む為にノートを開き、昨日より深い溜息を吐き出した。

今日のウィル・ヒギンズは不機嫌だった。

半眼に伏せた瞳で、仕事をこなしながら時々「死ね」「くたばれ」「ふざけるな」とぼそりと言うのだ。

基本的にウィル・ヒギンズという男は寡黙で実直。生真面目な男だ。

ナシユはそんな相手の補佐官に任命された時は喜びと共に「うわ、なんか面倒くさい」と正直思った。私生活に関わるような付き合いをしなければならぬ上官も面倒臭いが、四角四面に仕事に向かう人間も付き合っていくうえで気苦労があるものだ。勿論、やたら女性部下をからかうような上官などもつてのほかだが。

「少佐？」

おそらく言葉を落としていることに気付いていないのではないかとナシユはおそるおそる声を掛けた。すると、ウィル・ヒギンズは手をとめ、一旦息を吸い込むと普段の彼に戻った様子で顔をあげ、しばらくナシユをひたりと見つめてゆっくりと息をついた。

「何だ、中尉」

「いえ——珈琲をお入れしましょうか？」

「そうしてくれ」

即答で言いながら、ふっとウィル・ヒギンズは眉間に皺を刻みつけた。しばらくの間そうしていたかと思えば、考えをはじくように軽く首をふる。

いったい何が気に触ったのか判らなかったが、何よりも相手の気持ち理解しがたいのだからすでにナシユは色々諦めていた。

相手と自分の間には性別の違いしかないような気がするが、相手はおそらく妖精の取替え子であろう。意思の疎通を図るのも困難なのだから、諦めはむしろ必定だ。

「中尉」

「なんでしょう」

ウィル・ヒギンズは珈琲の香りを楽しんだのち、角砂糖を四つと

ばどぼと落とし込んで銀色のティ・スプーンでかき回した。

「明後日、私に言って欲しい言葉があるんだが」

「明後日、ですか？」

「私は知っての通り、物忘れが激しい。明日ならともかく明後日には忘れてしまいそうだ」

そう口にするウィル・ヒギンズはどこか冷ややかで自嘲的だった。確かに、自らの欠点を口にするのはとても矜持が許せないことだろう。そう思い、ナシユは神妙な表情を作り、決して相手の心を傷つけたりしないように柔らかさを重視して微笑んだ。

「判りました。明後日の朝で宜しいですね」

「ああ。ありがたい」

そう口にしたウィル・ヒギンズは口の端に笑みを浮かべて力強くうなずいた。

ナシユはその時のことを思い出しながら、日記にもきちんと相手の言葉を書き記した。

翌日のウィル・ヒギンズは機嫌が良かった。

いつもと変わらず仕事に励み、そつなく一日を過ごす。そして帰宅する時に上着に手をかけ、ふいにその眼差しをナシユへと向けた。

「中尉」

「はい、なんででしょうか」

「明日から出張になる。迷惑もかけるだろうが、よろしく頼むよ。先に謝っておく」

口の端に笑みを浮かべ、ヒギンズは軍帽に軽く触れて角度を直した。

その眼差しが、どこか面白がるような色を見せた気がしたがナシユはいつも通りにさらりと流した。

さて、翌日――数日分の下着と替えの軍装を鞆に詰めてウィル・ヒギンズの執務室へと赴けば、すでにウィル・ヒギンズは必要な書類を点検している段階であった。

上官より遅れたことを恥じたナシユは、顔をしかめてしまわないように気をつけながら敬礼し、自らの遅れを詫びた。

「いや、君に落ち度は無い。そんなことを気に掛けるな」

言いながら書類に視線を落としている相手に、ナシユはほっとしながら思い出した。

数日前に頼まれていた伝言だ。

「少佐」

「なんだ」

「三番目の引き出しの封書をお忘れになりませんように」

その言葉に、言われたウィル・ヒギンズは怪訝そうに眉を潜めた。

忘れてるよ、本当に。

半ば呆れながら、だがナシユは勿論そんなことをおくびにも出さなかった。

ウィル・ヒギンズは「わかった」と小さく答えると、書類をばさりと机におき、引き出しの三つ目に入れられている封書を引き出し、ついで中身を確認するようにするりと取り出した。

ざっと視線が紙面を走る。

その次の瞬間、ウィル・ヒギンズは一瞬硬直し息を止め、ついでぐしゃりとその紙を丸めた。

「少佐っ」

持って行く書類ではないのかと慌てたナシユが声を荒げると、ウィル・ヒギンズは誰かを絞め殺しそうな表情で「くたばれっ」という意味合いの酷いスラングを吐き捨てた。それはよく酔っ払った海

軍の人間が陸軍の人間をのしる時に使われるような到底文字にするのはばかられるような単語だ。

そしてその次の瞬間には、ひどく真面目な様子で頭を下げたのだ。

「すまない」

「あ、いや……え？」

確かにあまりにも程度の低い言葉を耳にすることとなったが、だからといって上官に真摯に謝意を向けられる程のことでもない。

「君には本当にすまないことをした。謝ってすむことではないが、だが」

「あの、少佐？」

「ああ、本当にどうすれば……そうだ。それがいい。結婚してくれ」

——何ですか、とつぜん。

あんたとうとう頭煮えたか？

ぎょっとしたナシュはあまりのことにぎっと身を引いた。

程度の低い単語を聞かせた程度で結婚を申し込まないといけない事態に陥るとはどういうことだろうか。

それとも真面目すぎる男というのは、思考が斜めどころかアクロバティックに動くのか。

どちらにしろ、ナシュは上官にするのもイマイチな男を夫にするつもりなどあるわけがない。

「この程度のことと結婚など考えられません。辞退致します」

「君にとってはどうということはないことだというのか」

「当たり前です」

吐き捨てるように言えば、目を見張りウィル・ヒギンズは奥歯をかみ締めた。まるでナシュが平手打ちでもしたかのようなのだ。

しばらく首でも絞めそうな視線を向けられたナシュは慄いて一步步引き下がり、ウィル・ヒギンズは無理やり体を引き剥がすように向

きを変えた。

「荷物の準備を」

「はいっ」

やっと結婚云々などという戯言を忘れてくれたかと安堵し、ナシユは敬礼したがウィル・ヒギンズの瞳はどこか暗いものだった。

その日のウィル・ヒギンズは最悪だった。

昼近くまで馬を進め、中継地点で馬を交換し、更に先に進む。ナシユのことを気遣うそぶりを見せるのだが、それを自ら振り払うように更に馬の速度をあげようとする。補佐官という立場であるナシユは唯々諾々と相手の行動に従うが、さすがに夕刻間近にぶちりと切れた。

「馬を潰すおつもりですか」

本来であれば目的の場所までは馬を幾度も交換し、三日掛かる。それを二日で行く勢いだ。

すでに本来であれば今夜の寢床として予定していた中継地点を越えている。

どこで泊まるつもりだ。

朝まで馬を走らせるつもりか、この男は。

「すまない」

言われた意味が理解できたのか、ばつの悪い顔をする。

下弦の細い月があがるなか、舗装らしき舗装もされていない道を行くのは困難だ。

ナシユは胡散臭いものを見る視線で上官を見ると、首を振って馬の首を叩いた。

「川が近い筈です。今日はそこで野宿としましょう」

「それは駄目だ」

「これ以上移動したところで馬も人間も疲労するだけです。ご理解

下さるかと思いますが」

刺々しさを含めて言えば、ウィル・ヒギンズは忌々しそうに顔をしかめたがうなずいた。

ナシユはウィル・ヒギンズについてある疑惑を持っている。

それはつまり――多重人格と呼ばれるものではないのだろうか、というものだ。あからさまに違う気はしないのだが、ウィル・ヒギンズはわずかながら嗜好の違いをみせることがある。珈琲と紅茶、食堂で出される食事にしても、よくよく観察すればグリーンピースを残す時と残さないことがある。口の端に笑みを浮かべる時と、ただ黙々と仕事を続けるとき。

その二面性を突き止めようと記録をつけはじめたのだが、半年たった今も謎は謎のままだった。

森の入り口に手早く火をたき、持っていた携帯食料で味気の無い食事を済ませる。水で腹を下さぬようにと持参した紅茶を飲んで一心地をつけ、馬の背に乗せていた薄い毛布を体に巻くようにして火から遠くない場で就寝の準備を進める。

ウィル・ヒギンズは不機嫌そうにむつつりと押し黙っていたが、手渡された砂糖なしの紅茶を無言で飲み干した。

「まずは私起きています」

夜盗や獣が出ないとは言えず、ナシユは提案したがウィル・ヒギンズはかぶりを振った。

「いいから君は寝なさい」

「いいえ。私の方が先に」

ナシユは譲ろうとしなかった。相手のほうがやけに気を張っていて疲れているのは目に見えていたが、しかしウィル・ヒギンズは厳しい眼差しでそれを押さえ込んだ。

仕方なく、ナシユは足を抱くようにして座ったまま額を膝に押し当てた。

ぱちぱちと乾いた薪がはぜる音と、火の温かさが適度に疲れた体を

包み込んで眠りの淵へと落としていく。記憶の片隅に以前行われた野外訓練のことがよみがえった。下士官であった頃は野外訓練のほ
うが多かったくらいで、野宿は当然。そしてまた見張りで起きてい
るのも当然だった。

ウィル・ヒギンズの観察記録2

——そしてこれは、呪いだろうか。

ナシユは気付けば温かく大きな手が自分の頭を撫でている現状で目を覚ます羽目に陥った。

生来の冷静さを総動員し、叫ぶことも体を跳ね上げることもしなくてすんだことはまさに僥倖。だが、ぶつぶつと落とされる言葉は激しく恐ろしい呪いの呪文だった。

「すまない、すまなかった。私が悪い——もっと気をかけてやれば、いいや、きちんとこんなことは断れば良かった」

……ぼそぼそと落とされる音は、恐怖いがいのなにものでもない。きちんと覚醒していることを示すべきか。いいや、起きていると知ればもっと恐ろしいことになるやもしれぬ。

ナシユは自らの気配を気取られぬように膝頭に額を押し付けてだらだらと流れる汗と、口の中に無意味に溜まる唾液をどう処理すべきかと苦悩した。

「それとも——君にとって私はどうでもいい男なのか」

え、なにこれ怖い。

貞操の危機とかいうのか、もしかして。

まで、ちよつとまで。何がどうしてそうなる？ ナシユは昼間の突発的な求婚を思い出し、まさかあれは本気だったのかと腹部が冷える思いがした。

「もっと早い段階で突っぱねていれば、君が傷つくこともなかったろうに」

いやいやいや、今、今ならまだ間に合います。

傷ついてないです。あんなスラングどうってことは無い。ケXから

X突っ込んで、内臓XXXP——とか、そんな品性下劣な暴言ならこの耳はたこ踊りができそうなくらい聞いてます。鼻先で笑いながら下品な応酬してあげればよかったですか？ 頼みますからおかしな責任とか感じないで下さい。

なんならもつと下らない酒場歌をハイ・ソプラノでご披露してもいい。酔っ払った兵士達が品性下劣に披露する歌の一つや二つ、歌って進ぜましょうとも。

ナシユは卒倒寸前に陥った。

「責任はとろう」

どんな責任だ、このドアホウ。

さすがに耐え切れなくなったナシユはぼしりと相手の手を払い落とし、引きつった表情をがばりと向けて、もつれる舌で声を張り上げた。

「こ、交代の時間ですか!」

「——中尉、いや……ナシユリー、ナシユ。我々はきちんと話し合ったほうがいいと思う」

何故突然名前で呼ぶ。

全身に広がる鳥肌、ナシユは近くにある自らの細剣をがしりとつかみ、ぐっと立ち上がった。

「少し見回って参ります」

「ナシユ、私の誠意が足りないことは理解している。だが、だからといって逃げていては何も解決はしない」

「私と貴方の間で解決すべき問題など何一つありません」

今日もにこにこ明朗会計!

「君が私に対して憤りを覚えることはもつともだ。だが、私はこういう問題を見殺ししてはいけないと思う」

「あんなことでいちいち責任を感じていたら、軍人などやっていられせんよ！ 私の職場は男ばかりが多い軍隊なのですよ」

どれだけ下らぬ言葉をこの耳にいれて生きてきたと思う。

おそらく、上級仕官であるウィル・ヒギンズよりもずっと数多くの猥談を耳に入れてきたし、下らぬ喧嘩で吐き出されるスラングをにやにやしながら聞いてきたのだ。

「いちいち結婚などと言っていたら、今頃私は二十人以上の男と結婚する羽目になる」

だから気にしてくれるなと思いを入れて怒鳴り、怒鳴ったことに對して冷静さを取り戻した。

上官相手だと思ひだし、決まり悪く咳払いをし、

「いいですか？」

「――」

理解してくれましたね？

そう確認するように声を潜めたが、面前の上官は蒼白になっていた。

「なんということだ」

……信じがたいと首を振り、

「軍務は君には向かない。もう止めるんだ」

ナシユは氣を失いそうになった。

どう考えても、この上官と自分を比べてどちらが軍隊向きかと問われれば自分のほうが軍務には向いている。人間関係しかり、根回ししかり。こんな場所は真面目ばかりで生きていく場ではない。

「いや、だが……おかしい。君はし――」

ふっとウィル・ヒギンズは言葉を濁し視線を伏せた。

「処女だったではないか」

……セクハラで訴えるぞ、この糞馬鹿野郎。

しかも何故過去形。

「ふざけるのめたいがいにして下さいよ！ 私は正真正銘現在進行形で処女ですよっ」

「——いや、話が見えない」

ウィル・ヒギンズは呆然と呟き、ナシユは指を突きつけた。

「私の処女性の問題でしょうか！」
張り倒していいですか。

ナシユは震える声で問いかけた。

「問題だ。つまり、私は——いや、私と思い込み、君はワイトに手……」

苦痛に呻くように、ウィル・ヒギンズは言った。

「手籠めにされたのだろうか？」

テゴメ……手捏ねハンバーグは美味しいですよ。私も大好きです。
粗挽き肉にたっぷり胡椒を利かせて——

「てごめ……」

いや、ハンバーグじゃないだろう。

「君にとっては寝耳に水だろう。こんなことを言えば頭がおかしいといわれるかもしれない。責任逃れの嘘と思えるかもしれない。だが、君に無体を働いたのは私ではない。私の双子の兄のワイトだ。恥ずかしい話だが、本来であればあれが一人で領地の管理をしなればいけないのだというのに、あれには苦手分野があり時折り入れ替わって私が処理をしていたんだ。上官は知っているが、君にもきちんと言っておくべきだった。まさかあれが君に無体なまねをするとは思っていなかった」

「……」

「確かにワイトは突然週末の約束の日付をずらされて不機嫌だった。

だが、だからといって君に手を出すなんて。くそつ。帰ったらやつをぼこぼこにすると約束しよう」

ナシユは体中の力がへたりと抜けるのを感じた。

あっさりと告げられた言葉の軽さ——いや、重いのだが、そのあっけなさになきそうになったのだ。

この半年の間、この上官は病なのかと思っていたが、フタを開いてみれば——双子。別人であればそれは確かに嗜好も違かろう。というかなんたる適当な。それでいいのか、軍務。

「本来であればワイトが責任をとるべきだろう。だが——ナシユ。君は私だと思って抱かれたはずだ。事實はどうあれ、君にとって処女を捧げた男は私だ。ワイトとのことは全て忘れさせると約束しよう。酷い悪夢など忘れて私に身をゆだねて欲しい」

口の端に笑みを浮かべていた男が面前の男でないということを鈍い思考回路で整理していたナシユは、舌がしびれるような気持ちでゆっくりと問いかけた。

「封書の中身は何と」

「……君にとって気分の良い文言ではない」

「言って下さい。一言一句違えずに」

短時間でざっと目を通していたことを考えれば、長い文面では無かった筈だ。

真実いいにくそうに、ウィル・ヒギンズは視線を伏せてゆっくりと口を開いた。

「ナシユちゃんの処女はいただいた。むっちりおっぱいご馳走様」

力いっぱい面前の男の頬を張り飛ばし、ナシユは引きつった笑いを浮かべた。

「遊ばれてるだけですよ、馬鹿ですかっ」

「女性との関係を遊びだなどと、そんなことは許されない。ナシユ」

「違う！ あんたが遊ばれてるんだっ」

このボケナス。

話が通じないっ。

誰が誰に処女を捧げたって？

もう上官もへったくれもなく、ナシユは奥歯をぎしりときしませて怒りの眼差しを突きつけた。

「その手紙が嘘なんです。私は誰ともそんな関係になったことは無い。判りましたか！」

「……そうなのか？」

「そうですっ」

ゼーゼーと肩を上下させて言うのと、やっと自分の気持ちも多少は静まった。

ナシユは乱れた前髪をかきあげ、ぶるりと首を振った。

面前の上官はナシユの頭からゆっくりと視線を下げ、足元までを確認し、またゆっくりと視線をあげて胸元で視線を留めると小さく息をついた。

「良かった——いや、すまない。おかしい話をしてしまった」

「もういいです」

「そうか。君は処女なんだな。良かった」

安堵しているのかどうか知らないが、何故胸元を見ながら無表情で言うのか。

そんなところに顔はない。

しかも処女処女うるさい。悪かったな。

「そうか、良かった」

ナシユは引きつりつつ、自然と一歩下がった。

「見張りを交代します。どうぞお休み下さい」

「すまない。頼もう。今日は何故か疲れた気がする」

ナシユは口元が無駄に引きつるのを感じながら、こっちの台詞だ馬鹿と脳内で幾度も書き上げた。

ウィル・ヒギンズは先ほどのナシユと同じように焚き火の近くで片膝をたてるようにしてすわり、毛布を肩に掛けて寝入ろうと動き、ふと思い出すように視線をあげた。

「ナ——中尉」

「なんですか」

「……今回の件は忘れてくれるだろうか」

「明け方までには」

「それと、兄のことも」

「他言はしません」

半年悩んだ自分が可哀想だ。なんと下らない結末か。

「すまない。これから時折り入れ替わるだろうが——その時は君には言うようにする。君には迷惑を掛ける」

掛けた、ではなく掛けるときた。

ナシユは深く嘆息し、軽く手を払った。

「結構です。言われずともおそらく見分けがつかますから」

ウィル・ヒギンズは目を見張ったがやがてゆっくりと規則正しい寝息をたてはじめた。

「おはよう、中尉」

ナシユはその日の日記の書き出しに、WBと記載することを心に留めた。つまりそれはワイト・ヒギンズのことを示す。好みの飲み

物は珈琲、角砂糖は四つ。

正体の知られたワイト・ヒギンズは弟の仮面を半分だけ引っ掛けた状態で、肩をすくめた。

「君だけだよ、私達が見分けられるのは」

「言われたから判るだけです」

「いや、君はわかっていた。私の時には的確に珈琲と砂糖を四つ用意していた。ウィルは甘いものは苦手だからね。砂糖四つなんて睨まれる。だから、少し遊んでみたんだ」

死ねぼんくら。

ナシユは自分の仕事をこなしながら、本日の記録の内容を脳内でこねくりまわした。

弟に頼らずばならない脳タリンのワイトは今日も子供も逃げ出す極甘珈琲を口の端だけを笑みの形にして飲んでいる。

——没落しろ、ヒギンズ家。

ウィル・ヒギンズの観察記録2（後書き）

双子の入れ替わりに苦悩する補佐官、というシュチュが浮かんだ為の突発短編です。

本来はもうちょっと色っぽい感じに仕上げたかったのですが……ねえ？

ウィル・ヒギンズの観察記録3

8月――

残念なことに気付いてしまった。

ナシユは毎日つけているウィル・ヒギンズ及びその双子の片割れであるワイト・ヒギンズの観察記録をつけながらつきつきと痛む額を押さえた。

脳タリンはワイトではなく、ウィルかもしれない。

今までちらとも気付かなかったくらい、ワイト・ヒギンズはほぼ完璧にウィル・ヒギンズになりすましていた。話によると、子供の頃から入れ替わったりして遊んでいたということで、自信もあるのだという――下らぬ自信だ。

ワイトがウィルと入れ替わるのは、ワイトには不向きな仕事をウィルが補う為だと言っていたのだが、ワイトが脳タリンというのはおそらく違う。ワイトは手元にある資料とウィルの進言に基づきその日の仕事を真面目にこなしていくし、必要があれば全て記録をとってウィルに残すというそのつけない様子を見せる。

ではいったいウィルは何をしているのだろうか。

ナシユは好奇心に負け、珈琲を用意しながら尋ねてみた。

「少佐」

便宜上ワイトを相手にしている時もナシユは階級で呼ぶようにしている。

「少佐、今日はどういう仕事でこちらにいらしているのです？」

――何から逃げ出した？

声を潜めてナシユが尋ねると、ほぼ無表情で黙々と仕事をしているワイトは面白そうに視線をあげ、口の端に笑みを浮かべてナシユ

の手から珈琲を受け取った。

「私は対人関係が苦手だね」

「対人関係？」

「ああ。ご婦人とか、年頃の娘を持っている男とかね——まったく懲りることもなく娘を連れて訪れるものもいる」

「……」

「そんな時はアレは便利だ。鉄壁の守りという訳だな」

じっと珈琲の香りを吸い込み、ソーサーの横に置かれている砂糖を一つ一つ珈琲の中に落とし込んでいく。

昆虫並みの甘党ワイトは、きっちり四つの角砂糖を落とし、どろりとした砂糖をティースプーンをつかんでかき混ぜた。

「……つまり、見合いがイヤで弟に押し付けている訳ですか」

「アレは見合いなどと思ってやいないよ。仕事だと思ってやっている」

——ひどい。

ナシユは内心で引きつり、ついではばかりに思っていたことを口にした。

「弟を騙している訳ですね」

「そんなことはしない。苦手分野を補うのは昔からの私達の決め事だ」

「決め事？」

甘い珈琲をゆっくりと飲み、ワイトは一旦伏せた臉をゆっくりと押し上げた。

「私はね、子供の頃から賢い弟に比べて——と大人に言われてきた訳だ」

同じ顔なものだから、その比較は普通のそれよりしやすく、そしてきついものだった。とほんの少し落ちたトーンは物悲しさを滲ませるようだった。

ナシユはその言葉を静かに耳にいった。

ナシユにも姉という存在がいる。彼女がいるからこそ軍属の道を進

めたのだが、もとをただせば彼女と同じ道をすすみたくないというひねくれた思いもある。ナシュ自身、姉とは比べられて育ったのだ。小さな痛みのようなものが、胸に突き刺さり面前の男の悲哀が――

「だからアレには常々言い聞かせたものだ」

ふっと、ワイトは口の端に笑みを浮かべた。

「私が母の腹に落としてきた『賢さ』をおまえは拾い上げて産まれたのだから、おまえの『賢さ』は私の為に使われるべきだと」

自信たっぷりと言われた言葉をこねくりまわす間もなく、ナシュはおそろおそろ問いかけた。

「少佐は――ウィル様は……」

「人間というものは長く言われ続けると、どんな事柄も納得するものだよ、中尉」

馬鹿だ。

ウィル・ヒギンズの愚か者。

ナシュは自分の上官のよく言えば素直な、悪く言えば単純な性格に涙がこぼれそうになった。

その日の記録の最後、ナシュは溜息をつきつきペンを走らせた。

――馬鹿ばっか。

ああ、今日はWA――ウィル・ヒギンズだ。

ナシュはウィルをA、ワイトをBと表記するようになった。そして

最近気付いたことは、Bのほうが人間味があり、会話はしやすい。何より、Bのほうが人間として好ましい。

少なくとも、Bは人と話をする時に視線を合わせて会話をする。

「昨日はすまなかった」

無表情のウィル・ヒギンズは半眼を伏せて言葉にした。

「あの人は君に迷惑を掛けなかっただろうか」

――あの人が迷惑を掛けているのは誰でないあんたにだけだ。

ナシユは穏やかな微笑を湛えて「問題はありません」と応えた。応えつつも激しく気になって仕方ないのだが、何故ウィル・ヒギンズは心持ち視線を下げて会話をするのだろうかということだ。そこはどう考えても胸ではなからうか。女性の胸を凝視しながら言葉を発するのは激しくぶしつけではあるまいか。それとも、おまえには何も見えていないのか。

いや、見えていないのではなく何も考えていないのか。

「ワイトさんは」

何か話題を探そうと思わずそう口にしたのだが、ウィル・ヒギンズは息を詰めた。眼光が鋭くなった感じもする。

それに気付いたナシユは何か地雷を踏んだかと慌てた。ここで彼の兄の話題は厳禁であったか。

「兄が何かしたのか？」

「いえ――あの方はいつも通り仕事を処理しておいででした」

問題はまったくないと報告したつもりだが、しかしウィル・ヒギンズはその後普段にもまして不機嫌そうに黙々と寡黙に仕事をすすめた。

それに合わせてナシユも仕事を処理していったのだが、どう考えても本日のウィル・ヒギンズの機嫌は最悪だ。何より雄弁に語るのが四六時中はりついている眉間の皺だった。

あんなに眉間に力を込めていて頭が痛くならないのだろうか。ナシユがあきれ果てていると、普段はあまり無駄口を叩かない上官はふいに口を開いた。

「中尉」

「はい、何か」

喉でも渴きましたか？

必要書類にサインをしていたナシユは視線をあげて背筋を伸ばした。

「君は兄を名で呼ぶのか」

そこかよ。

ナシユは激しく脱力した。ナシユも軍属という身で長く生きている。十二歳の頃に士官学校に入隊し、女性隊士よりも断然多い男達の中で生きていたのだ。男が自分に向ける視線の意味に気付けない程馬鹿でいられる訳がない。そんなことに無頓着でいれば、今頃もっと出世している――悪い意味で。

だからこそ、最近この上官がもしかして自分に好意を抱いているのではないかと危惧しているのだが……いや、ただの無礼者か。

「ワイトさんは軍人ではありませんので、階級で呼ぶことはできません」

「――そうだな」

「勿論、仕事であれば少佐と呼ばせていただいています」

今は面前に少佐もいますし、この場合「ワイトさん」と呼ぶことは不自然なことではないはずだ。

丁寧に説明すれば、ウィル・ヒギンズは押し黙った。

「では、私がない時に君は私のことをどう呼ぶのだ」

まだ続けるのかこの不毛な会話。

うんざりとしながらナシユは眉を潜めて自分がワイトにウィルのことをどう呼んだかと思い返した。

ワイトはウィルのことをアレと言う。では自分はそういった会話

の中でこの面前の上官のことをどう現したかといえ——

「ウィル様、と申し上げましたが問題でしたでしょうか」

記憶を手繰り寄せて言えば、無表情の上官はやっぱり無表情でナシユの胸元を見つめてしばらく無言だったが、やがてゆっくりとした口調で「問題はない」と告げた。

その後やたらと機嫌が良かった気がするが——ウィル・ヒギンズは無表情なので気のせいかもしれない。

ウィル・ヒギンズの観察記録4

「やあ、中尉」

道端でぼったりと知人に会った場合——相手も私服、自分も私服であった場合はぺこりと頭を一つ下げて何事もなく通過するのが礼儀だろう。

しかもその相手が見知らぬ女性達といった場合は確実に「触らぬ神に祟りなし」といくべきだ。

ナシュリー・ヘイワーズはその鉄則を理解しているし、ことなかれ主義の平和主義。わざわざ他人の揉め事になど首を突っ込みたくは無い。

だからその時も当然のように一礼してそのまま過ぎ去ろうとしたというのに、相手はふいに手を伸ばしてぐいっと引き寄せた。

「彼女達に言ってももらえないだろうか」

「何をでしょう？」

何するんだべらんめえっ。という内心は鉄壁の自尊心が隠してくれる。ナシュは自他ともに認める外面大王だった。いや——もしかしたら、自認はしているが他人はそこを理解していないかもしれない。

「私はウィル・ヒギンズであってワイト・ヒギンズではないと。どうも理解してくれなくてね」

淡々と言われる言葉と、そして不快そうに眉を潜めているご婦人方を一瞥してナシュは微笑んだ。

——嘘です。この男はワイト・ヒギンズで正解です。

と言っただけじゃない理由は思い当たらなかった。

そもそもナシュとしては相手に対して貸しはあれども借りは無い。正解者に拍手！ と手を打ち鳴らして称賛してやってもいい程だろ

う。

「いやですね、ワイトさん。そうやって何でもかんでも少佐に押し付けて生きるのは好ましくありませんよ」

当然の如くナシユは極上の微笑みを浮かべ、ついでその場にいるご婦人方に人当たりの良い微笑を向けた。

「ワイトさんは時々ふざけるだけですからお気になさらず。では、私は失礼——」

「ナシユ。なんて君は意地悪なんだ」

ワイトはぎゅっとナシユの二の腕を掴むと、彼女の体を囲い込むように引き寄せ自らの前に引き出すと耳の後ろを唇で軽く吸い上げた。

「私が他の女性といることに妬いているんだね。私が愛しているのは君だけだよ、可愛いナシユリー」

その後ナシユは笑顔を張り付かせたまま左手肘を後ろにぐっと埋め込み、相手の腹を一撃した後浮いた腕を強く引いて背後から捻り上げ、ついでに足を払おうかと思ったのだが、さすがに過剰防衛かもしれないとそこは許した。以前投げ上げた拳句に腹部に爪先をめり込ませた相手がいたが、あれは酔っ払いの上、ナシユの胸を無遠慮に驚づかみにした為に遠慮も憐憫も一切かけなかった。今回はさすがにそこまでしたら非道が過ぎよう。

「忙しくしておりますので失礼致します」

ナシユは笑顔のままその場にいた女性——完全に言葉を失って卒倒しそうになっていた女性達に一礼し、呻いている上官の兄をその場に放置して足音も高く退散した。どうやらワイト・ヒギンズは弟と違い鍛えられていないらしい。

ウィル・ヒギンズであればあの程度で怯むことはないだろう。少なくとも自らの上官として応戦できるだけの基礎は備えていて欲しいものだ。

ナシユはすたすたと歩きながら持っていた荷物を抱えなおした。
この時は自らがしたことが面倒を引き起こすなど少しも考えてなど
いなかったのだ。

「中尉」

人事部から戻ったウィル・ヒギンズが静かにナシユへと視線を向け、視線がかち合うとすすすつとその視線を心持ち下げた。

「人事移動届けが出ているというが」

ナシユは普段と変わらぬ笑みを浮かべていたが、危うく舌打ちしてしまいそうになった。

顔見知りの人事部長を内心でののしりつつ「自分の可能性を試してみたいと思ひまして。不都合がありましたでしょうか」とあたりさわりのない模範解答を口にした。

決して、面倒くさい上官はイヤだなどと言ってはいけない。

「……兄が迷惑を掛けているのではないだろうか」

「ええまったく」

——その通り。

だが当然そんなことを口にするナシユではないのだった。

「勿論、君がどの部署を望むかは自由だ。私がとやかくいうべき事柄でないことは承知している」

ではとやかく言うな。

「君は優秀な補佐官だ。できればこのまま私付きのままでいて欲しい。それとも、私に何か落ち度があるだろうか——いや、厄介であることは承知しているが」

淡々と言われる言葉に、ナシユはだんだん自分が何か悪いことをしているような罪悪感に囚われ始めた。

面前にいるのは体躯のいいオッサンだというのに、何故そんなにも見事に捨てられた子犬臭を撒き散らすことができるのか。

しかも、人の胸を見つめながら。

ナシユは一旦天井を仰ぎ見て「できれば視線を合わせていただけるとよいのですが」と嘆息交じりに口にした。いい加減そこに顔は無いと怒鳴りちらしてしまいたいが、面前のウィル・ヒギンズはぴくんと反応し、ついでおそろおそろというように視線を上げた。

視線がかちんと重なり合うと、よしよしという満足感がたちのぼりナシユはにつこりと微笑んで「では――」と話の続きをしようとしたのだが、次の瞬間に言葉は凍りついた。

ウィル・ヒギンズは基本的に無表情な生き物で、隊内でもその生真面目さゆえに誰もが彼を前に口を噤む。

現在のウィル・ヒギンズは確かに無表情だった。

ただし、顔が赤い。

赤らんだ顔を必死にどうにかしようとしているのかその手は無意味に緩く握ったり解いたりを繰り返している。

視線を逸らしたい様子だが、先ほどナシユが言ってしまった言葉を必死に実践する為にウィル・ヒギンズは息をつめて食い入るようにナシユを見ているのだ。

「……」

ナシユは思わず犬に命じるように「休め」と言ってしまうたくな

った。

だがしかし現状は何故か上官と視線を合わせたまま、まるきりハブとマンダース——蛇に睨まれた蛙状態。

食うか食われるかの凶悪な緊張で、視線をはずせば殺されると本気で恐ろしいものが腹部に蓄積されていく。

「ナシュ」

どれほどそうしていたものか、相手からやっとなぐり出された言葉に、ほんの少しの緊張が解けて背筋に汗が伝い落ちた。

「君には私専任でいて欲しい」

おそらく、この時に何を頼まれたところでナシュは「はい」と応えていただろう。謎の恐慌状態を脱することができるのであれば、はいつくばってその靴先に口付けをしろという屈辱にも耐えた。

ナシュは上官の言葉にぶんぶん顔と顔を上下に振って「了承いたしました」と口にし、軍属らしく長靴の踵を打ち鳴らしてぶるんっと身を反転させた。

「ナシュっ」

やっと後ろを向けたと思ったら、今度は乱暴に二の腕を掴まれてしまった。

完全に混乱していたナシュは、泣きそうな自分を叱責しながら「なにか？」とたたたらをふんで足を止めた。

捕まれていなければ無様にもすっころんでいたかもしれない。

「……昨日の休暇は楽しめただろうか」

「昨日——」

子供のように相手の言葉を反芻し、ナシュは途端にワイト・ヒギンズのことを思い出した。

腹立たしさと共に本来の自分を取り戻す。

「言っておきますが、ワイトさんが怪我をしたのは自業自得だと思

いますので私が苦情を受けるのは間違っていると思います」

弟に頼りきって生きているあの男のことだ、まさか「おまえの部下に酷い目にあった」と苦情を向けたのではあるまいか。そう思えば更に腹立たしさも増してくる。

――ワイト・ヒギンズ。今度ばったりあったらもつと虐める。ネチネチと。

ナシユの言葉に顔色を取り戻したウィル・ヒギンズはすつとナシユの首筋を一度なぞり、しばらく無言でナシユの腕を引き寄せた。

「兄は気に入ったものに時折意地の悪いことをする。君に悪さをしないといいが」

唇が首筋を吸いあげ、その意味するところに気付いたナシユは啞然とした。

そこに、跡があつたのだ。鬱血した跡が。

キスマークをつけて歩いていった！

そのほかばかしさに血の気が引いたナシユは、同じことをした上官に対してワイトと同じように攻撃を仕掛けることもできない程動揺し、あわてて身を引き離れた。

「失礼致しましたっ」

くそおつ、指摘するならどうしてもっと穏便な方法を使わない！

ナシユは大慌てで医務室に駆け込み、わざわざ湿布薬を塗布して包帯で巻き、挙句いつもは結い上げている髪を解いて軍帽をのせた。

「あー肩こりかぁ。巨乳はつらいなー」

「生憎と付き合いが長い為、肩がこるかどうかという意味さえ判り

ませんよ」

ニヤニヤ笑う軍医を睨みつけ、ナシユはこの日の日記に――死ね、ワイト！ と幾度も書き連ねることを誓った。

いいや、それを指摘する為だけに同じ場所に触れるウィル・ヒギンズも大概だ！

しっかり記録していつかセクハラで訴えてやる。

ウィル・ヒギンズの観察記録5（前書き）

でも今日は別の人。

ウィル・ヒギンズの観察記録5

ナシュリー・ヘイワーズが軍属という道を選んだのは、姉であるシェリー・ヘイワーズの影響が多にある。

「まあっ、お口がお上手ですこと」

豊かな淡い金髪に灰青の瞳。薄桃色のふわふわとした羽毛飾りをつけた扇で口元を覆い、ころころと愛らしく微笑むシェリーは誰もが認める美貌の持ち主だが、それと比べられ続けたナシュリーは自然と自分は決してああはなれまいと自分の将来を学問に定めたのだ。

美人は近くにおいておいてはいけません。

だが、学問を究めて研究機関である『賢者の塔』という別称のある場に入るとは適わなかった。そして唯一残されたのが軍属という道だったのだ。

——幸い、外勤に女性職務は無かったが、事務官であれば募集があった。試験までの一月鬼のように勉強にはげんでやっと軍属となり、こつこつと昇進試験に対してやっと手にいれたのが、

ウィル・ヒギンズの補佐官という職だった。

自分が求めたものと何かが違うのではないかと、ナシュは最近では思っている。

「ナシュ？ その手のものは嫌いじゃなかった？」

朝の時間、予定はあれども未だ時間が早い為に時間つぶしで官舎の1階フロアで雑誌を眺めていると、友人のダーシーがからかうように言う。

「最近目は通すようにしてるの」

「今日の運勢はどう？ いいことありそう？」

「……新しい出会いがあるかも！　心臓がドキドキバクバクしちゃうかも要注意っ」

「まあ、素敵ね」

楽しそうに言うダーシーだったが、新しい出会いはあるだろうと判る。何故なら、もう少ししたら馬を走らせて出かけるのだ。そしてそこにいる人間はほぼ知らぬ人間だ。

「……本当に素敵な出会いならいいけどね」

新しい出会いなんて、道を歩いていたってあるんだよ。

「……」

面前に立つ『賢者の塔』は資料室に無い資料すらも提供してくれるありがたい場ではあるが、それはすなわち自分が目指して挫折した場でもあるのだ。

「提出書類の記載をお願いします」

一階の受付で事務処理を淡々とすませていたが、ナシユは少しだけほろ苦いような気持ちを味わった。本来であれば自分はここでのんびりと好き勝手に学問や本に触れて生きていた筈だったというのに、結局は道は違ってしまっていた。

新しい出会いとやらはいったいどこに落ちているのか。面前の受付係をじっくりと見てみたが、生憎と心臓がドキドキしたりはしない。

「必要な資料は――ああ、これは三階ですね」

受付係は淡々と言い、ふと視線をあげて声の調子をかえた。

「ルーク、ヘイワーズ中尉を三階の東資料館に。古地図と水脈図を

幾つか探すのを手伝って差し上げて下さい」

「――」

その名前にギクリとナシユは身を強張らせ、おそろるおそろる振り返ってしまった。

賢者の塔の住人らしく軍装のナシユとは違いいかにもゆったりとしたローブのような衣装を身に纏った癖毛の青年は、手にしていた荷物をカウンターに預け、静かに顎先でついてくるようにと示した。

ナシユはおそろるおそろるその後について行きながら、相手は自分を覚えていないのだろうとホッと息をついた。

確か自分よりも四つ程年下のこの青年は、飛び級で学舎で学び歴代三位の若さで『賢者の塔』に入ることが許された秀才だ。

つまり、ナシユが学んでいる間も彼は時には下級生として、同級生として、そして上級生としていたのだ。年下だというのに。

数歩先を行くルークは階段をゆっくりと歩き、右回廊を進み、階段をのぼり、左回廊を歩き、階段をおりて、渡り廊下を歩き――

「どこに行くんだったかな……」

迷子かよっ！

いったり来たり、何故か階段を上ったり下がったりするのでおかしいと思っていた矢先、ぼそりと相手の口から落ちた言葉にナシユは殺意を覚えた。

基礎体力はあるつもりだが、すでに息が上がってしまっている。階段ののぼりおりなどの上下動は思いのほか体力を削る。

「ナシユリー・ヘイワーズ、どこに行くのだったかな」

かつりと足を止めて振り返られ、ナシユはぐっと喉の奥で言葉を詰まらせた。

「……覚えてたんですか」

「いや？　今、見たことがあると考えをめぐらせていたら、自分が何をしていたのか忘れたただけだよ」

「……」

「だから覚えていたというのは正しくないよ。正しくは思い出したのであって、それについてもつい今しがた……」

延々と訳のわからないことを言い始めた相手をさえぎった。

「判りました。とりあえず三階の水脈図と古地図のある資料室に案内して下さい。他のことは一切考えずに」

「判ったよ」

ナシユの言葉に短く返答すると、ルークはまたしても階段をのぼったり下がったりしながらナシユをつれまわし、だが結果としてはきちんと資料室への案内を果たしてはくれた。

半刻あまりもの間うろうろとさせられた気持ちになり、ナシユは礼を口にしつつも「やけにぐるぐるとさせられたような気持ちなのですが」ととげとげしく言葉にすると、相手は眇めたような視線をひたりと向けてくる。

「大事な資料が多いからね。ここは迷路のような作りをしているんだよ」

そうか。それもそうかもしれない。

と、ナシユが納得しかけたところで、ルークはくるりと身を翻して「きっと」と言葉を付け加えた。

「……方向音痴なんじゃないですか？」

「右手を壁につけて歩けばやがて出口にたどり着くよ」

「――」

「というのは冗談だけだね。ここは本当に人を惑わす迷路のような

作りをしているんだ。一般の人間は確実に半日は迷わされるよ。ついて来て」

まだ子供のような口調で吐き出される言葉に、からかわれているのか本気なのか思案しつつ、ナシユは大人しくその後続いた。

「資料は？」

「各砦の古地図と水脈源の地図を。軍にもあるのですが、どうも足りない」

「なんだ。君は軍属になったのかい？」

「……軍服ですからね」

今まで気付かなかったのか？

脱力しつつ応えると、ルークはしばらく無言で資料の棚を指先でなぞりながら「ぼくの妹は、軍属ではないけれど軍服を着ているよ」とぼそりといった。

「はい？」

「騎士になりたいと昔から言う子で、父が彼女の為に軍服を作る仕立て屋に頼んで彼女用に似たデザインで違う色彩の軍服を作り続けた。今は十五だが……普段からそれを着ている」

騎士。

ナシユはそれは考えたことが無い。軍属ということで基礎体力はつけられたが、あくまでもナシユは内勤だ。

体術はそこそこ自身があるが、剣などは体裁の為だけに持っているだけといってもいい。

「騎士は……女性には無理な夢ですね」

この国には女性騎士は存在しない。軍属で女性を認めているのはあくまでも内勤だけなのだから。だからそもそもナシユはそんな夢を抱いたこともないのだ。

「うん。でも一生懸命にがんばってるよ」

——何を考えているのかいまいち判らない青年だが、ふっと口元を緩めて微笑むから、ナシユはなんとなく好ましい温かな気持ちになった。

新しい出会いではないが、もしかしてこれはいわゆる——良い相手なのかもしれない。

年下だが、そんなに……

「ぼくが議員になればすぐにでも女騎士を承認したいところだけれど、生憎とまだ年齢的に達していないのが残念だよ。それに、この案件が通ったとしても、その時妹の年令は適していないだろう。何故父はぼくとあの子の年齢を近くしてしまったのか、はなはだ納得がいかない。ぼくがあの子にしてやれることは、時々勉強をみてることくらいだけれど、生憎とあの子は勉強はあまり好きじゃない。幾度も窓から逃げられてしまつてそのつどとても悲しい思いをさせられたよ。一番年齢が近いのだから最も一緒にいられるように思うのだけれど、長男がすぐにあの子を抱っこしてもっていつてしまふし、三男は馬鹿みたいに甘やかすし——」

まさかそれから延々妹の話がずらずらと続き、挙句の果てに「ルーク、その話はいったいどこに落ち着くのでしょうか」と嫌味っぽく口にする、ルークはやっと気付いた様子で口を閉ざし、ついで眉間に皺を刻みこんだ。

「ところで何を探せばよかったかな？」

「……」

——新しい出会いがあるかも！ 要注意。

いや、そもそも新しい出会いではない。
やはり占いなどちつとも当てにならない。これは違う。まったく違う。

滅びろ、妹フェチ。シスコンめ。

激しい脱力感を抱きつつ資料を探し出し、またしてもぐるぐると塔内を歩かされた挙句に官舎にたどり着いたナシユは、ウィル・ヒギンズが静かな――威圧的な空気の中で黙々と仕事をこなしているのを見て、なんだか少しほっとした。

ルーク……あれは絶対に軍属にはなれないし、また上官などにも向かない。

それに比べればウィル・ヒギンズは真面目に仕事をこなしているし優秀だ。よし、まだいい。まだマシだ。

ささやかなよいこと探しをしなければ人生に挫折してしまいそうなナシユだった。

「確か君は資料を探しに出ていたのではないだろうか？　もう夕刻に近い時刻だということは理解しているか」

戻ったナシユに冷淡な言葉が飛ぶ。

ナシユは持ってきた資料を机の上に一旦おき、上官の前で帰還の口上をつらつらと並べ、最後に言葉を付け足した。

「時間が掛かりましたことはお詫び申し上げますが、私が居ない間に何か不都合がありましたでしょうか？」

必要なものは全てそろえてから出かけた筈だ。何か足りませんでしたか？　とナシユが言葉を続けると、ウィル・ヒギンズはふっと瞳を眇めてどこか遠くを見るような眼差しでしばらく無言でいたが、

「君が足りなかった」

とぼそりと口にした。

――その意味をじっくり考えたくない気持ちになり、ナシユはいつもと同じように微笑一つで無視することにした。

触らぬ神にたたりナシ。

「紅茶、お入れしますね」
「そうしてくれ」

その日の記録を締めようとしつつ、ふと――本日の占いの内容
を思い出した。

新しい出会いがあるかも！
心臓がドキドキバクバクしちゃうかもっ。

……心臓は確かにドキドキばくばくしたかもしれない。
ただし、激しい上下動で。

眉間にできてしまった皺をなんとも揉み解しつつ、明日はもっと
当たりそうな恋愛占いを見るかとペンをペン立てに放り込んだ。

男性にちやほやされ、それを楽しむ姉のシェリーをどこか馬鹿に
するように眺めていたナシュだったが、最近の夢は円満寿退社にな
りつつある。

ウィル・ヒギンズの観察記録6

ほんの意趣返し――

ナシュリー・ヘイワーズは上官であるウィル・ヒギンズに扮したワイト・ヒギンズの前ににつきりと微笑んで紅茶のカップを置いた。勿論、ウィル・ヒギンズはミルクも砂糖も使わないのだから、ソーサーの上には味気ないという理由だけでティ・スプーンのみ。なんといってもウィル・ヒギンズはどっかの誰かのように甘党ではないのだから砂糖など必要はない。

「どうぞ」

「――」

さあ飲みやがれ。

ぴくりと眉毛の辺りを一旦痙攣させ、けれどワイト・ヒギンズは慇懃な調子で「ありがとう」と返事をする。ソーサーごとカップを引き取り、その香りを楽しむように胸元に運んだ。

ナシュは内心でこれが逆ならば面白いのにと多少残念であった。紅茶はそのまま飲もうと思えば飲めるだろう。だが珈琲であれば違う。もしワイトが紅茶に角砂糖四ついれて飲む人間であれば、珈琲を砂糖、ミルクなしで飲むことはさぞ困難なことだっただろうに。

だが知るものか。

ワイト・ヒギンズ？ そんなヤツは知らん。

「中尉」

一礼してそのまま自分の席に戻ろうとしたところでワイトがゆっ

くりと声をかけた。

「なんでしょうか」

「……いや、いいんだ。すまない」

砂糖が欲しいですか？

せめてあまったるくしたいですか？

むずむずと問いかけたいと口元が歪んだが、ナシユは平然と相手を見つめ返した。

相手はしばらくじっとナシユを眺めていたが、やがていつもの——ウィル・ヒギンズのように平坦な表情で紅茶を口元に運び、そしてもくもくと合同演習の為の資料に視線を戻してしまった。

ほんの意地悪のつもりだったが存外楽しいものではなかった。

だが、その後二日の間ナシユは同じことを繰り返し替えた。すなわち、ワイトだと気付いていないフリを遣り通した訳だが、相手はそれを純粹に信じた訳では無かったようだ。

「中尉」

かたりと紅茶のカップをワイト・ヒギンズの前に置くとワイトはじっとその紅茶のカップを見つめ、やがてゆっくりとした口調でナシユを呼んだ。

「なんででしょう」

「内密の話がある」

ちよいちよいっと指先で招かれ、ナシユは眉を潜めたものの大仰なテーブルをまわり、ワイトの横に立つと相手の囁きを拾う為に身を屈めて指示を待った。

「何か？」

「——そんなに私に構って欲しいとは、気付かなくてすまなかった」言葉にした途端、ワイトはぐっとナシユの襟首を掴んでその耳たぶに歯をたてた。

「つつ」

小さな痛みに怯んだところで慌てて身を起こし「ワイトさんつ」と怒鳴りあげてナシュは自分の失態に気付いて呻いたが、あとのまつり。

ワイトは一瞬つめたい眼差しでナシュを睨み上げ、ふっと口元に笑みをはいた。

「意地悪だな、ナシュ。私だと判っていてせっせと嫌がらせかい？」

「……」

「そんなところも可愛いね」

ぶわっと鳥肌が全身を駆け巡り、ナシュは勢いをつけて飛び退ったが相手はどこ吹く風の様相で足を組みなおして命じた。

「珈琲」

ゾーキン絞るぞこの野郎っ。

わなわなと小刻みに震えてぐるりと身を翻したナシュの背に、ワイト・ヒギンズは軽やかな口調で言葉を続けた。

「悪いがこれからは君が運んできたもの全て毒見はしてもらうつもりだ——おかしな小細工はしないように」

角砂糖二つ先に入れてやる！

甘さの前に敗北しろ。

結論だけ言えば、ワイト・ヒギンズの舌は馬鹿に違いない。

角砂糖6つも溶けた——というか底のほうなどどろりと微妙に溶け残っている——珈琲をまったく気にせず飲んでいた。

あの男の血はきつと砂糖成分でできている。

蟻にたかられてしまうがいい。

「どうかしたかね、中尉」

しばらくぶりでウィル・ヒギンズを目にしたナシュは自分の目頭が熱くなる程嬉しかった。

朝、ウィル・ヒギンズの執務室で一礼し、上着を受け取りながら大きく安堵の息をつく。その吐息が気に掛かった様子で、ウィル・ヒギンズは眉間に皺を刻みこんだ。

「いいえ。このところお忙しそうでしたが、お元氣そうで良かったです」

詳しく尋ねてはいないが、今回数日にもわたって入れ替わっていたのは軍内部の内部調査の為だとワイト・ヒギンズが口を滑らせていた。そんな極秘裏の仕事をこなしているからこそ、この双子が入れ替わっていることを上層部は黙認しているのだ。

ウィル・ヒギンズはじつとナシュの胸元を見つめているが、そんなこともまったく気にならない。この数日のワイトとの微妙な空気を思えば何のそのだ。

ワイトはまるで擬態したイキモノのようだ。

静かにもくもくとウィル・ヒギンズを完璧にこなしているというのに、時折思い出すように自分はワイト・ヒギンズだという存在を知らしめる。

うっかり気を抜いてウィル・ヒギンズに対するようにすれば、途端に足元をすくおうと動くのだ。

何がしたいのか判らない――

どんな時も気が抜けないというのが数日続けば、この慇懃な上官が戻ってくれた事実は実にありがたい。

ナシュは満面の笑みを浮かべて、

「紅茶をいれましょうか」

と、上着をハンガーに掛けてくるりと振り返ると、思いのほか近い

場所に未だウィル・ヒギンズが立っていてナシユは思わず「うつ」と呻きそうになってしまった。

ウィル・ヒギンズの手がするりと腰に回り引き寄せる。

とんとんと肩甲骨の辺りを軽くたたき、ウィル・ヒギンズは低く耳元で囁いた。

「君には本当に苦勞をかける。すまない」

礼を言うのはいい。

その気持ちを表すのは結構なことだ。

だがそこまで大げさにする必要は絶対に無い。

自分とウィル・ヒギンズは上官と部下に過ぎない。そうだ、そうだろう。それ以外の何ものでもない。

硬直するナシユを手放し、ウィル・ヒギンズはさっさと自分の席に戻っていった。

まるで何事も無かったかのように。

いや……そうだ。何事も無かったに違いない。

今のは上官が下士官を労う極一般的な抱擁——ハグだ。ウィル・ヒギンズとハグ！ なんとも滑稽な気がするが、これは一般的なことだ。

ただの^{ねがひ}労い。それ以上でも以下でもない。

「中尉？ どうかしたかね」

「……いえ。いいえ、何もございません」

そう、何もない。

ナシユはいつも通りの微笑を浮かべ、一礼してその場を離れた。

まったく問題ナシ。

そう、まったく問題はない。

ウイル・ヒギンズが観察中

ウイル・ヒギンズがナシュリー・ヘイワーズという存在をはじめてその視界にいれたのは、彼女が軍務試験にパスして三ヶ月の研修期間に入った頃のことだろう。

女性登用は少なく目立つ、それに何より彼女は男達の間である種の話題をさらっていた。

——でかい胸が。

ウイル・ヒギンズは別段性的嗜好は一般の部類だと思っている。胸がでかろうが尻がでかろうが、何がどうというものではない。それに女性という生き物に対してはあまり良い印象はもっていない。それは彼の兄が女性に関係するトラブルを力いっぱい弟であるウイルに丸投げした結果、知らぬ間に汚名を流布されているだけだったが、日々の積み重ねにより彼は「女性とは近づきたくないものである」と自らの中に沈殿していく思いを放置した。

その近づきたくない存在である女性が自らの補佐官として任官したのは、まさに晴天の霹靂というものだった。

かなり「うらやましい」とやっかまれたものだ。

むしろ変わっていただいていいのだが、人事部の知人は「ああいうのは台風の目になっても困る。女癖の悪い男に預ける訳にもいかないのだから、おまえが一番無難だろう」と苦笑していた。

工作上といったところで女性との付き合いなど不安と不満しかなかった。

といったところで何がどう変わるものでもなかったが。

ナシュリーとは仕事上でしか接点もなく、ウイルは会話を楽しむ

性質ではないしナシュリーもぺらぺらと喋る人間ではない。

一月も共に過ごせば、まるで空気のようにナシュリーという存在がそこにあるのは当然のようになった。

彼女は黙々と仕事をこなしていくウィル同様、仕事はただ淡々と処理していく傾向があり、女性という細やかさなのかウィルが次に何をしようとしているのかを察知して先手を打って必要なものを用意してくれる。

便利なアイテムのように普通にそれを受け入れられるようになるのに、さほど時間が必要とはしなかった。

ナシュリーと仕事を共にすれば、自らの仕事も以前よりスムーズに進むことに慣れてくる。その余裕から、ふっとウィルはナシュリーを改めて見る時間ができた。

身長は一般的な女性にしては高いほうだろう。だが、身長百八十のウィルとはそれでも相手の旋毛を見つけられるくらいの身長差がある。

体にぴったりとした軍服は胸元がやけに目立つ。

そのことにはじめて思い当たり、そういえばそんな噂があったと思ひ出す。そう、その程度だった。

直接じろじろと見るのではなく、半眼を伏せて観察しているとナシュリーが微笑むのがわかった。

「新しい資料が必要でしょうか」

ナシュリーはそつのない女性だった。

どんな時も丁寧に接し、微笑み、動く。道端で卑猥な言葉を向けられた時に遭遇したことがあるが、ナシュリーはそれをやんわりとかわしていた。

相手の男に対して不快な思いを抱いたが、受けるでなく悲しむでなくさりとそつなくかわすのを見て安堵するような気と共に、その笑顔を惜しんで欲しいという奇妙な気持ちを抱いた。

ナシユリーの微笑みは媚へつらうものではなく、あくまでもふわりとさりりとしたもので人の心を穏やかにしてくれる。だからこそ、世の男共は気安く彼女に声をかけるのだ。だがそれは良くない。相手の男が勘違いしてしまえばそれは彼女の害にしかないだろう。上官としてそれは許容できることではない。

一度彼女にはもう少し自衛について話しあうのが良いように思うが、仕事の話しかしたことがない自分達だからどう話をふって良いものか。

それにもう一つ、気にかかるのは上官から命じられた特別任務のおりに入れ替わった兄のこと。

ウィルとワイトは双子であるという特性を生かし、時折上官に別任務を任せられることがある。それを逆手にとり、ワイトは上官にねじこんでウィルと入れ替わり自分の仕事をウィルに任せることもある。

——つまり、彼等は時折自分達の場所を入れ替わることがあるのだ。今まで細心の注意をもって幾度か行われていたそれが災いすることはないだろうと思っていたが、にわかに不安を覚えるようになった。

「ナシユはかわいいなあ」とクッと喉の奥でワイトが笑った為だ。

ナシユが誰を示すことだか判らなかった。

何故なら、ナシユリー・ヘイワーズはウィルにとって「中尉」であるのだから。今まで名前をはっきりと認識することもなかった。

「なんだい、おまえはナシユの名前も判らないのかい？」

ワイトは呆れた様子で肩をすくめてゆっくりといいなおした「中尉だよ。ナシユリーというんだ。親しい友人はナシユ、もしくはナ

ッシュと呼んでいる。ああ、勿論私はそんな風には呼んでいないよ？ 私には上官、ウィル・ヒギンズだからね」思い出し笑いをする兄は緩く腕を組んで壁に背をあずけ、首をかしげた。

「あの子ときたらとびつきり性格が悪いに違いないよ」

その意見はまったく意味不明だった。

何故なら、ナシュリーはいつだって柔らかく穏やかな笑みを浮かべている。命じれば何でも端的に返事を返し、きびきびと良く動く。

そのナシュリーの性格が悪い？

ワイトは時折とても不可解だ。

しかし、ワイトは人の本質を見極めるのが得意だ。

その為に一本の針が刺さるようにその言葉はウィルの胸に残った。

その後も幾度かワイトと入れ替わりをしてみたが、そのつどワイトは機嫌が良くなった。

一度などはまさか自分と入れ替わることでおかしな真似をしているのではなからうかと危ぶみ、こっそりと仕事中の彼等を覗きにいったこともある。

だが、その風景はいつもの自分とナシュリーのそれと変わらなかった。ただ黙々と書類を処理し、そして部下に指示を与える自分――に扮したワイトと、その補佐をするナシュリー。

だがわずかに浮かんだ苛立ち。

ナシュリーがやんわりと微笑みを向けているのはウィル・ヒギンズに対してのものだ。

何故か胸のうちでそんなことを呟いた気がする。

あそこに座っているのはウィル・ヒギンズ。いつもと変わらない自分。

ワイトは以前と同じように完璧にウィル・ヒギンズを演じている。

何の問題はなかった。

「うちに連れてきなよ」

あまつたるい珈琲の入ったカップを手し、ワイトは悪戯をたくらむ顔で言った。

「何の話だ」

「中尉だよ。ワイト・ヒギンズに紹介してくれよ」

馬鹿げた話だ。

自分達が双子だと知られるのはどう考えても良くない。これからの仕事に支障がでるだろう。秘密裏に命じられている内部調査などもあるのだ。ナシュリーにばれるようなことなどできよう筈がない。ワイトだとして理解しているだろうに。

眇めた視線で無視をした。

ワイトが時折りふざけることは理解している。なんといっても母親の腹の中からの付き合いだ。きっと自分達を見極めることのできないナシュリーを前に新しい遊びでも思いついたのだろう。

そんな兄をウィル・ヒギンズは無視することにした。

そんな折りに数日の間二人で行かねばならぬ出張話が浮上した。

別段それは構わない――問題は、その日はワイトに以前から入れ替わろうといわれていた日だということだ。

ワイトは確実にナシュリーで遊ぼうと思っている。それはひしひしと感じているのだから、そんなワイトと女性副官を二人で出張などさせて良いものか――無理だ。それでなくとも元々のワイトといえば女性に対して無礼な振る舞いをするところがあるのだから。

「この週末は入れ替わる約束だったろうに」

突然予定をかえられたことにワイトは憤りを見せたが、なんとか説き伏せた。

翌日から入れ替わり、ワイトの仕事をこなし――そして出張の当日、朝っぱらからウィル・ヒギンズが知らされた「事実」はウィルの脳裏を真っ白に塗り替えるものだった。

――ナシュちゃんの処女はいただいた。むっちりおっぱいご馳走様。

咄嗟に信じられないような悪態が口をついた。到底女性の前で吐き出していいような言葉ではないが、そんなこと頓着されるものではない。

ぶわりと血が逆流するような気持ちと共に、その時にやっと……そうやっど。

――ナシュリー・ヘイワーズは自分にとって不可欠な存在だ。

そのことに気付いた。

それまで意識していなかったのではなく、意識しないように勤めていただけだ。

部下なのだから。自らが庇護するべき相手であるのだから。極力見ないように勤めていただけに過ぎない。

正面からはじめて見た途端、血が一点に集中してしまった。

意識した途端、もう視線を合わせることすら脅威となった。

ワイトがその場にいれば絞め殺してやっだろう。

だから咄嗟に言ったのだ。

「結婚しよう」と。

だが彼女はそれを受け入れはしなかった。「そんなことは何でもないことだ」と。

憤りと吐き気が自分の体内を巡り、その日一日最悪な気分でどうにも処理できず、相手にも優しい気持ちを抱くことはできなくな

っていた。

無理に馬を飛ばし、温和なナシュリーに諫められるまで彼女の身を氣遣う気持ちさえどこか遠くに飛ばしていた。

——いいや違う。彼女を抱いたのはワイトではなく、ウィル・ヒギンズだ。

そう結論づければ自分の内部が少しだけ落ち着いた。彼女が抱かれたのはワイトではなく、ウィルであった筈だ。ならば自らが責任という名のもとに彼女を引き受けるのは当然だろう。

——だが、結局それはただのワイトの悪戯であることが知れた。はじめてナシュリーに怒られたが、それはそれで可愛かった。

意識してしまうと困ったもので、それまで胸に興味がなかったというのにワイトのおかげであの胸が気になって仕方なくなってしまうた。

視線を合わせることも出来ず、視線は下がってしまう。下がってしまうとあの胸があるのだ。

気にするなというのも無理がある。

これはつまりワイトが悪い。

そう、ワイトが悪いのだ。

ワイトのおかげで自分の中にわかに信じがたい程の独占欲が芽生えてしまった。

相変わらずナシュリーはウィルの言葉に微笑みをくれる。

思い切って伝えた「専任^{わたしのあなたでいて}でいて欲しい」という言葉は激しく勇気を

必要とするものであったが、彼女は微笑んで受け入れてくれた。

「君が足りない^{さみしかった}」と伝えた時も宥めるようににっこりと微笑んでお茶をいれてくれた。

さすがに職場で押し倒す訳にはいかないが、そろそろ二人の関係を進展させる頃合だろう。

――さて、どうしよう。

ウィル・ヒギンズの観察記録7

後悔、とは読んで字のごとく事柄が終わったあとで悔いることだ。そう、つまり――ナシュリー・ヘイワーズは後悔していた。

生真面目な上官に対して、ほんの少しばかりの同情心が芽生えたのかもしれない。あほんだらな兄に虐げられて育っていたのだ。多少性格がアレなのは仕方ない。

しかし、なんといっても未だ二十代なのだからもう少し人生というものを楽しめばいいと思い、連れ出したのが間違いのもだった。

「ナシュウウ」

居酒屋【アルビオンの絶叫】は今日も兵士や騎士でもりあがっていた。騎士達は貸し切りにしてしまうことが多いが、今日はそういうこともなく色々な隊がまぎれている。

ナシュは馴染みの顔を見つけて上官を紹介し、こういった場では階級はあまり気にしてはいけませんと口をすっぱくして説明した。きつとウィル・ヒギンズの耳にはたこが二匹ぶら下がっているに違いない。

士官学校からの友人であるレニィ・インはすでに適当に酒が入っていたが、さすがにウィル・ヒギンズの姿に一瞬萎縮した。一瞬だけだ。だが、ここが酒場だということを思い出したレニィは堅物のウィル・ヒギンズに気安く挨拶し、酒を酌み交わした。

そうこうするうちに周りにいた兵士達数名でわきあいあいと飲んでいたので、やはりウィル・ヒギンズはなかなか場に馴染めないようだ。

たかが一日で何かがかわるわけではないだろう。ナシュは上官のフォローをしながらそれでも自分も楽しむ為に酒を飲んでいた。

そして、それは一刻近くもその場の人間に酒が浸透した頃合。こん

な場だから猥談も出るし、品の無い単語も吐き出される。そういった雰囲気もウィル・ヒギンズにとって悪いものではないだろうと思っていたが、突然レニイが動いたのだ。

「ナシユウウ」

——その両手を突然卑猥にわきわきと動かし、むにりとナシユの胸を下から持ち上げるようにして、揉んだ。

「うぎゃ」

「あああ、この重み。この柔らかさがおサイコーっ」

「おおおっ、糞っ、女同士は羨ましいぜっ」

げらげらと笑いが沸き起る中、ナシユは脱力してレニイの頬を引っ張った。

「いやらしい手つきで触らないように」

「いやらしい手つきで触らないと意味がなーい！ ふふふふ。よいではないかよいではないかっ」

なんだそれは。

「少佐、少佐だってこの凶悪な武器はちゃんと点検したいですよねえ」

酔っ払いレニイは突然酒をちびちびと飲んでいたウィルへと流し目を送り、ナシユは卒倒しそうになった。

よくよく見ればウィルの半眼は伏せられ、なんだかよく判らないオーラが漏れている。

ひくりとナシユが引きつると、ウィル・ヒギンズは真顔で言った。

「人の胸をもむな」

……

「もおっ、少佐はお堅いんだからあ」

「いやいや、俺も固いぞ。ナシユリーの柔らかな胸で癒してほ……」
品の無い下ネタで盛り上がっているところ悪いですが、今、人の胸という単語が明らかに――人の胸わたしと聞こえたのですが。

気のせいですか？ 気のせいですよ。

ナシユは引きつりつつ、気付いた。

この上官、すでに酒の量が許容量を越えているのではないのか？

そのなんだか据わったような瞳とか、いつもよりだらだと不機嫌そうに垂れ流している何かとか。

ナシユはがばりと立ち上がり、皮の財布から二人分の酒代をがしりと取り出してテーブルに叩きつけ、ウィルの腕をぐいと引いた。

「帰りますよ！」

酒の量くらいきちんと把握して飲んでくれ。

おまえはいったい幾つの子供だ！

ナシユは内心で上官をぼろくそに怒鳴っていたが、当然表面上はそんなことを臆面も出さなかった。

「中尉、酒代は――」

「私が誘ったのですから、私がもちます。少佐はお気になさらず」
「そういう訳にはいかない」

腕を掴んだままぼそぼそと言う上官を引っ張る。しかし、相手はムツとしたかのように足に力を込めて立ち止まり、ナシユが押しても引いても動かなくなってしまった。

「少佐っ、ちょっ、動いてください」

「君におごってもらう訳にはいかない」

「――判りました。判りましたから、とりあえず今は」
店を出るぞ、このぼけ上官。

ナシユは相変わらずの無表情で酔っ払っていると思わしき上官を引き立てるようにして無理やり店を出た。

早く帰るぞ酔っ払い！

宿舎へと向かう一本道を示すナシュに、ウィル・ヒギンズははじめのうちこそ引かれるように付いてきたものだが、そのうちにぱったりと足を止め、無表情のままを見下ろした。

「とりあえず今は――」

足を動かせ、このでかぶつ！

ぐいぐいと引っ張ってやろうと振り返れば、酒臭い息が頬を掠める。左手が腰をさらい、右手がわき腹を抑える。

わき腹に添えられた手がシャツの上をなぞり、胸の脇をかすめた途端、びくりと身をすくませたナシュの耳元で、ウィル・ヒギンズはかすれたような声で囁いた。

「他人にあんな風に触れさせてはいけない」

「いや、あの……あんなの、女同士（ゆうじんどうし）のじゃれあいじゃ――」

いや、そうじゃないだろう。

自分の胸をどうしようかとあんたには関係が無い。ナシュは狼狽し、どう告げればいいのか逡巡してしまった。

一旦体を引き離れたウィル・ヒギンズの湖畔の瞳がじっとナシュの瞳を見つめる。

「じゃれあい？」

「そー……です」

低く唸るような言葉と、無表情が怖い。

何よりこんな場面を誰かに見られたくないという思いで辺りを見回し、ナシュはほっとした。

中途半端な刻限が幸い、繁華街から外れて宿舎へと戻る細い道には人の気配が無い。そもそもあの店は王宮から近い場であるし、一般客など滅多にないような繁華街の外れだ。そこから宿舎までの一本道など人通りが少なくて当然――

ほっと息をついたところで大きな手が下から掬いあげるようにそ

つとナシユの左胸をなぞり上げた。

普段から女友達や、はたまた不埒な男達に幾度も撫でられたり掴まれたりした胸だ。本来であればナシユはそんな時の対処も手馴れたものだというのに、思い切り固まった。

「ではこれもしゃれあいだな」

「ちょっ……少佐っ」

形と柔らかさを確かめるように優しくなぞり、重さを確かめるように持ち上げる。酒の力も手伝ってか、ぞくぞくと背筋を奇妙な漣が這い登り、ナシユは狼狽した。

「酔いすぎです」

「酔ってなどいない」

これだから酔っ払いはっ。

酔っ払いは大抵そう言うんだよ！

「ちょっ、離して下さい」

「何故彼らが良くて私では駄目なんだ」

子供か？

そういう話か？

くそっ、酔っ払いはネジがぶっとんでいるのか？

ナシユは護身術の応用として相手の手首を掴んで身を引く方法を取ろうとしたが、気付くと自分の背中はとんと壁にぶち当たる。

「もうあんな風に触れさせてはいけない」

さわさわと胸をなぞる感触が甘いうずきにかわりそうな恐怖。

叱責するように淡々と言いながら体でナシユの体を押さえ込み、威圧するように上から言葉を落とし込まれる。

きゅっと胸をつかまれ、軍服という厚い地だというのに的確に胸の中心にある部分を中指と人差し指の間で挟みこまれ小さな痛みに声が漏れた。

「ナシユ？ 聞いているね」

な、なにをっ？

相手の力から逃れようと意識が向けられていて言葉など拾い集めている場合ではない。しかし、返答の無いことが相手の不興を買ったのか、ウィル・ヒギンズはナシユの胸を押しつぶすようにつかみ、耳元でもう一度言った。

「返事は？」

「はいっ」

威圧する言葉に慌てて応えれば、ふっとウィル・ヒギンズは吐息を落としてナシユの瞼に唇で触れた。

「いい子だ」

酒臭い息が耳元で柔らかさをもって囁く。

壁に押さえつけられたまま、このままどうなってしまうのかとナシユが焦りをつのらせる頃合に、問題の上官はぎゅっと一層強くナシユを抱きしめた。

――ナシユ……

その後、あのでかぶつの無表情淡々口調の上官は、普段は決して吐き出されない、やけに色っぽい艶やかな口調でナシユリーの名を口にし、囁いた。

「気持ち悪い」

思わずペンを持つ手に無駄に力が入り、ナシユは「ふふふふふ」と肩を揺らしながら、折れたペンをゴミ入れの中に放り込んだ。

壁に向かってしゃがみ込み、吐くに吐けない馬鹿上官の口に、ナシユは青筋をたてながら指を突っ込んだ。

腹が立っていればどんなことでもできるものだ。なんて自分は男らしい。どうして男に生れ落ちなかったかと悔やみながら、ナシユは新しいペンの先端を火で炙った。

吐いた後の始末もつけてきっちりと上官を官舎に連れ帰り、寮長に引き渡した自分は本当に立派だ。

立派過ぎて涙がでる。

「あああ、放置すればいいじゃないか、馬鹿ナシユリー！」

気づいたところで後の祭り。せめて今はせこせこと日記でつづり鬱憤を晴らすことしかできないナシユリーだった。

そうだ召喚してみよう！

物心ついたときから父親とか母親という人は居なかった。

それでもちっとも寂しいなんて思ったことは無いのは、優しいおじいちゃんがいまし、あまり家には居ないけれど、ぱぱがいたから。

ぱぱは有名な召喚魔導師だった。

召喚っていうのは、魔方阵と宝石や色々なアイテムでもって魔獣や悪魔やらを引き寄せる術のこと。そして魔導師っていうのは、召喚魔術士達を指導することが許されたとっても偉い人だ。偉い人だから、ぱぱはいつだって忙しくしていて、ちっとも家には寄り付かない。

ぱぱはぱぱであってパパじゃない。六歳のファウリーには良く判らないけれど「血の繋がらない女の子を援助するのはパパだから。ちよっ、父さんもレイシェンも睨まないでよ。よし、じゃあぱぱにしとこう！　ぱぱならいいだろう」と言っていたから、あくまでもぱぱはぱぱだ。パパだとおじいちゃんが怒るから、そこは間違えちゃいけない。

——ぱぱはよく「面倒くさい人だよね」と人に言われているから、きっと面倒くさい人なんだと思う。

それに、ママが必要な時は、お隣のレイシェンのお母さんがいつだって手をかしてくれたから、ファウリーはちっとも寂しくなんか無かった。

おとなりのレイシェンは十も年の離れたファウリーのお兄ちゃんだ。

でももうお兄ちゃんとは呼ばないとファウリーは決めた。

だって友達のレガッタに酷いことをしたし、カロウのことも虐めた。だからもうレイシェンはお兄ちゃんじゃない。

お兄ちゃんっていうのは、優しい筈なのに、レイシェンはちっと

も優しくない。だからレイシエンはお兄ちゃんは落第だから……ファウリーの弟にしてあげよう。

ファウリーはぎゅっと手を握り締めた。

そうしてはじめて気付いた。

「レイシエンが弟なら、ファウリーはおねーちゃんだ！」
なんて素敵。

とっても素敵！

あたしってば頭いいっ。

ファウリーは有頂天になってばたばたと駆け出し、三階にある自分の部屋の窓から勢いをつけて飛び出し、屋根の上を歩いてお向かいに伸ばしてある板の上を歩き、いつだって開いているお隣の家の窓に入り込んだ。

「おにー……」

つい癖でお兄ちゃんと言ってしまいそうになったファウリーは慌ててがばりと口をふさいだ。

窓を開いて入り込んだ先は、レイシエンの家の屋根裏部屋に当たる。

自分の部屋だってある癖に、レイシエンはここに入り浸って小難しい本を読んだり、なんだか判らない数式と戦っているのだ。

その時も屋根裏部屋に置かれている木箱に寄りかかり、レイシエンは本に視線を落としていた。

「ファウリー、きちんと下から来なよ。窓はぼくが通る道なんだから」

「だってズルイ！ おにー……じゃなくて、レイシエンばかり楽しそうなんて許されないんだからっ」

はじめて呼び捨てにされた当人は瞳を瞬き、その短く色素の薄い青銀に見える髪をかきあげた。

「レイシエン？」

問い返す声は穏やかなものだった。

「そう！ レイシエンは意地悪だからもうおにーちゃんて呼ばないことにしたのっ。今日からはあたしがおねーちゃんて、レイシエンはおとーとね！ だからっ」

とっても素晴らしい筈の提案だったというのに、レイシエンはいかにも「うわー馬鹿がいる」という生ぬるい眼差しで十年下の六つの子供を見下ろし、いつも通りその頭をべしりとはたいた。

「その脳みそ、もう少し皺を増やして出直して」

「くうううっ」

ファウリーはごんつと音をさせた頭を両手で押さえて涙目でレイシエンを睨みつけた。

「お」

「お？」

「おまえのかーちゃんてべそおおっつつ」

うわーんつと身を翻してファウリーが撤退しようとすれば、その襟首をとっ捕まえてレイシエンは窓ではなくその部屋唯一の扉からひょいっと廊下へとファウリーを放り出し、階下に向かって声をあげた。

「かーさんっ、ファウリーが母さんのこと出臍だつてさ」

張り上げられた声を最後にぱたりと閉ざされた扉に張り付き、階下からずんずんと足音も高く階上へとあがってくる恐怖の大王に、ファウリーは半泣きで扉をたたいた。

「おにっ、お兄ちゃんっ助けてっ」

召喚魔術達人の為の書。

金色の飾り文字で書かれたぶあつい本の表紙を指先で何度も撫でる。召喚魔導師であるぱの蔵書から引き出した一冊は、幼い子供の心に激しい好奇心を呼び起こした。

その場にはないものを召喚する。

知らないもの、知らない生き物。

本の中には色々な情報がひしめいているが、生憎と難しい文字が多すぎて今年やっと八つになったばかりの子どもには理解できないところもある。

それでも、必死になって解読した文字をつなぎ合わせ、そうして屋根裏に少しばかり不恰好な魔方陣を描いた。

心臓がどきどきする。

「えっと……あとは」

必要ものはカエルの干物とトカゲの尻尾。猫のヒゲとジギタリスの葉にんだか判らないレッドシエル。レッドというくらいだから赤いものに違いない。ということでトマトを用意した。ついでに猫のヒゲは切ったら可哀想だから、じいちゃんの白髪で代用する。白くてちくちくするからきつと大丈夫。ネコの髭とたいして違わない。ジギタリスの葉が理解できなくて、「レイ、ジギタリスを頂戴」とお隣のレイシェンにお願いしたら、笑顔で頭を殴られた。

葉というくらいだから葉っぱでいい筈だから、ジギタリスはほうれん草で代用。駄目だったら今度は小松菜とかでやってみよう。

「よし！」

準備はできた。

その全てをすりつぶしてどろっどろにして煮込んだ液体は激しくイヤな色をしているし、においもかんばしくない。けれどもそれに、更に――

「イキチ……」

生き血、だ。これってつまり、この自分の腕に流れているどくどくとした血。

顔をしかめながらそれでも勇気をもってナイフを掲げた。ぷるぷると震える手で、そっと、そおっと指先をぷつり。

「いたいっっ」

ぷつんっと切れた指から血が流れ、咄嗟に自分の口でちゅーっと吸いそうになってしまったけれど、違う。駄目、それじゃせっかく切った意味がなくなってしまう。

必死に自分を押さえ込み、ファウリーはぎゅっと唇を噛んだ。

謎のどろどろとした臭い液体にぼとりと落とす。

いっぱい入れたほうがいいかもしれないけど、もう駄目。

我慢できなくて慌てて指先は口の中に入れた。なんだか美味しくない血は舌に絡んで顔をしかめた。

とにかく、さあ、召喚の為の準備はできた。

弱冠八つの稀代の魔術師（自称）ファウリー・メイは嬉々として本を片手に呪文を唱え、そして問題の液体を仰々しく魔方阵にぶちまけた。

「さあ、あらわれなさい！ 暗黒の獣。紅ドラゴン！」

そしてあの憎つくき、レイシェンを踏み潰して。
もう絶対に許さないんだからっ。

人のことを小馬鹿にして。いつもいつも！

でもそれも今日この時まで。泣いて謝って「ファウリー様、もうぼくは弟でいいです」くらい言えばちよっとは許してやるっ。

紅ドラゴンが踏み潰したらそれどころではないとまでは考えない、浅はかな小娘ファウリーだった。

ぽわんとひろがる煙。ざわざわとざわめくその期待感にファウリーは瞳をきらきらと輝かせて叫んだが、すぐにその異臭を放つ煙にげぼげほとむせかえり、涙交じりに身をよじった。

必死に目じりの涙をこすりながら煙の向こう、そこには大人程の大きさの何かの存在を確認したが、あまりの目の痛みにぎゅっと目を瞑ってしまった。

白い煙が立ち消えて、そしてその場に現れた召喚獣にファウリーの笑顔はゆっくりと凍りついた。

「……あれ？」

びちびちと奇怪な動きの生き物は……手のひらサイズのタツノオトシゴ。

「たっ？」

びちっ。

「……竜^{たつ}？」

やがてぴちりとも動かなくなったタツノオトシゴにファウリーは血の気を引かせて青ざめ、慌てて「水っ、水っっ」とタツノオトシゴをつまみあげて水道水を溜めた桶の中に放り込んだが、海の生き物であるタツノオトシゴは海水ではなく真水に落とし込まれて止めをさされ、残念な結果を迎えることとなった。

「……ごめん、ごめんね、タツ。おまえはきっと生まれ変わったら紅ドラゴンになるよ」

いや、もしかしたら前世が紅ドラゴンだったのかもしれない。そうだ、きっとそうに違いない！

庭先に「紅ドラゴンを前世に持つタツノオトシゴ」は丁寧に埋葬され、墓標としてファウリーの食べたアイスの棒が差された。

「でもタツの死は無駄にはしないわ！ 何より、召喚術は成功よ！」

ファウリーはしっかりと召喚術達人の為の書を握り締め、やがてクッククックと喉の奥を鳴らした。

「見てなさいよ、レイシェン！ ギャふんといわせてやるんだから」「ギャふん」

仁王立ちで不気味な笑い声を上げるファウリーの頭を背後からべしりとたたき、レイシェンは平坦な口調で応えた。

「人の庭に勝手に穴掘るな」

「だってうちの畑はこないだ豆を植えたばかりだもんっ。可愛い紅ドラゴンの転生体であるタツノオトシゴが肥料になるでしょ」

「はぁ？ 何言ってるのさ」

「レイシェンは頭悪いからわかんないんですううっ」

「なあにが紅ドラゴンだよ、糞ガキっ！」

庭先でぎゃんぎゃんと騒いでいるファウリーとレイシェンを見下ろし、屋根の上から唾を飛ばしたのは黒髪に黒い瞳を持つ青年だった。

あぐらをかくようにして屋根にすわり、苛々と足を揺り動かす。ぎりぎりど噛み締めた口元からは鋭い犬歯がのぞいた。

甘い、甘い匂いが誘いをかけたのだ。

カラメルのふんだんに使われたプリン。チョコレートを混ぜこんだ生クリーム。こんがり焼けたシナモンと甘い蜜の香りがたっぷりとした焼きりんご。

空腹だった訳ではない。どちらかといえば腹は満たされていた。だが言うではないか、デザートは別バラ。

甘くてとろけるようなその香りの誘いに意識を集中させ、出所を探って飛び込めば――

そこは古臭い屋敷の屋根裏部屋。

そしてちまっこい糞餓鬼が、それこそ乳臭い糞餓鬼が、ありえないような材料を使って召喚なんぞをしかした現場だったという訳だ――

このオレ様を！ この偉大なる大悪魔のオレ様を、トマトとほうれん草とジジイの白髪なんぞで！！

ふざけんなっ！ ぜってえ許せねえっ。

オレ様は偉大なる大悪魔だというのに！

生憎とうかつに召喚なんぞされちまったこのオレのこの恨み、絶対晴らさずばいられまい。

なあにが召喚魔術士だ、こまっしやくれた糞餓鬼め。

とことん邪魔してやるから覚悟しやがれ！

「召喚されたショックで、慌てて身代わりとしてタツノオトシゴを残してやったが、この先おまえが何かを召喚しようとした時には愚にも付かぬものを出してやる」

恐怖に慄き涙しろ！

——召喚術を行使すると何故か海産物を召喚する台所事情にのみ優しい大召喚魔導師ファウリー・メイの物語、ここに開幕。

しません。

また・召喚してみよう！

一体何がいけなかったのか？

ぐりぐりと薄茶の紙にペンを走らせながらファウリーは唇を尖らせ、うつぶせという格好で後ろ足をぱたと動かした。

アルコールの香りがつんと鼻につくような屋根裏部屋は、四方に置かれた魔法石のランタンが灯りを点し、そのぬくもりさえも伝えてくれている。

ファウリーの周りには幾つもの本が詰まれ、辞書も散乱していた。一見すると勉強熱心と感心されそうなものだが、ファウリーの勤勉さは完全に趣味と報復活動によって支配されているものだった。

「ドラゴンはやっぱりちよつと高度すぎたわ」

ファウリーは独り言を呟きながら新たな魔方陣を紙に書いていく。先日この屋根裏部屋の床に直接書き上げた大きな魔方陣は、三日の間せつせとデッキブラシで磨いて一生懸命証拠隠滅を図ったものの、結局おじいちゃんに見えられてお尻を叩かれるという屈辱を味わった。

しかもレイシエンは壁にもたれて薄ら笑いを浮かべて、

「子供のしたことだし」

と、庇うようなことを言っていたが、おじいちゃんに告げ口したのはレイシエンに違いないとファウリーはにらんでいた。

足腰の弱いおじいちゃんがわざわざ屋根裏部屋まであがってくるなんて早々無いことなのだ。

ひりひりするお尻で更に二日かけて丹念に磨き上げ、最後にはアルコールで消毒まですることとなった記憶は生々しい。

色々レイシエンに嫌がらせをしようと試みたけれど、なんといつても十歳という年齢差はいかんともしがたい。

レイシエンが道端で同級生の女の子達と話しをしている時に、これこそ素晴らしい嫌がらせだろうとぼたぼたと駆け寄り「おにいちやん、こんなところで遊んでないでファウリーの勉強みてくれないと駄目っ」と腰に抱きついて言ってやれば、レイシエンは平然とファウリーの頭をなでて「わかったよ」と、そのままにっこりと笑って「じゃあね」と女の子達に手を振ってくるりと背を向けてしまった。

レイシエン、超シスコン説を流布させてやろうという目論見は、その場にいた女の子達の「レイシエンって優しいわね!」という言葉でうやむやになってしまった挙句、実際に勉強をみっちりやらされるという踏んだり蹴ったりの結末だったのだ。

そんなこんなで、ここはやはり召喚術だとファウリーは結論を出した。

またしても禍々しい獣を召喚し、レイシエンへと復讐を考えたのだ。

ということ、今日は魔方陣を紙に書くことにした。

紙なら処分が簡単! 破って丸めてゴミ箱に放り込めばいいのだから、今まで誰も考えなかったとは驚きだ。

ファウリーはやっぱり自分って頭いいなあと悦に入りながら、鼻歌を歌い、それに合わせて足先を振っていた。

「今度はもっと小さくて、でもすんごく威力のありそうなのがいわっ」

がうっと口をあけると牙がによつきりと生えていて、レイシエンをがぶりと齧ってくれそうな生き物ってないかな。

傍らにある【よいこのまじゅうじてん】をぺらぺらとめくり、丁

度良さそうな魔獣を物色する。大きさは犬程度でいい。顎が強くて、カッコイイのがいい。

頭の中であれこれと想像し、あるページでぴたりと手をとめた。猛々しい肉食の獣が前足をたしんとふんばり、獰猛な口をがばりとあけてそこから発達した犬歯がきらりと覗く魔獣、牙豹のイラストにぶるりと身震いが出た。

「ファウ」

怖い想像に顔をしかめていたところで、かすかな声が窓の外から聞こえ、ファウリーは慌てて持っていたペンを放り出してぱたぱたと屋根裏の出窓からよっきりと顔を出した。

ファウリーの家は三階建てで、更に屋根裏ともなれば随分と高い。玄関の脇で口元に手を当てて「ファウリーっ」と声をあげているのは、友達のカロウだった。

特徴的なくたびれた帽子がひよこひよこ動いているのが判る。突然やつてきた遊び仲間に、ファウリーは「屋根裏部屋にあがつてきてっ」と声を掛けようとしたが、それより先に隣の家の二階窓からレイシエンが顔を出し、何事かをカウロに言いつけ、二・三会話を交わすとカロウは肩を落とすようにして身を翻して駆け出してしまった。

「ちよっ——何してんの、レイシエンっ」

「何って、ファウリーは勉強の時間だから帰れって言っただけ。宿題してるんだろうね？」

また阿呆な遊びなんかしていたら小学部にして奇跡の落第だ」

「馬鹿にするんじゃないわよ！」

誰が落第などするものかつ。

ぐぐぐつと手を握り締め、ファウリーは忌々しいというように舌を打ち鳴らした。

「あたしはゆーしゆーなのっ」

「この間のテストの結果をぼくが知らないとしても？ 隠す場所変えたほうがいいよ？ もうワンパターン」

「ちよっ、人の部屋荒らさないでよっ」

馬鹿にしきった口調で階下の窓からひらひらと手をふり肩をすくめてみせるレイシエンにカチンときて、ファウリーは出窓から落ちそうな勢いで指を突きつけた。

「見てなさいよ！ あたしは召喚魔術師なんだからっ」

「召喚なんてまだ言ってるの？ そんなことできる訳ないだろうに」——以前召喚したタツノオトシゴはその証拠を突きつける前にお墓を作ってしまった、その眠りを破ってはならないという優しさで掘り起こしてレイシエンに突きつけることもできなかった。

だが、今回は違う。

材料もちゃんともう一度用意したし、魔方陣はちよっと小さくて紙に書いたものだけれどきっと代用が利く。

ファウリーは「絶対にぎゃふんって言わせてやるんだから！」ともう一度いい、またしてもレイシエンに馬鹿にしきった顔で「ぎゃふん」と返された。

「つつっ」

真っ赤になって怒鳴りつけるファウリーは、ふいに冷静さを取り戻してふんつと鼻を鳴らした。

「そんなに言うなら、あがって来なさいよ！

あたしのカレーなる召喚術をその目で見ればいいわっ」

まったく、また馬鹿なことをしだした。

ハチドリのような姿に擬態した悪魔は眇めた眼差しでファウリーを見下ろしていた。

一旦召喚されてしまった魔獣と召喚主は仮契約を交わされる。本来であれば――仮契約であるから一回の召喚で役割を与えられ、それさえ済めば自由を得られ、逆召喚によって元の世界へと戻される。

だが、生憎と「悪魔」は逆召喚を受けていない。ファウリーは召喚されたものをタツノオトシゴであると思っているから、まったく気にしていないのだ。いや、元々逆召喚すら知らないのかもしれない。

おかげで自分の世界に帰れないという有様。

手っ取り早く召喚主であるファウリーが命を落とせば戻れるが、生憎と召喚された者は召喚主を殺すことはできない決まりだ。

ハチドリは光の届かぬ暗闇からじつとファウリーを眺め、ケツと危うく舌打ちしてしまいそうになった。

屋根裏部屋の中では、紙に書かれた召喚魔方陣――その前で絶対にそれは間違っているだろうという謎の液体の壺を足元に置いたファウリーと、そのファウリーを生あつたかい眼差しで見下ろしているレイシェンがいる。

「やれるものならどうぞ」

という態度を隠そうとしないレイシェンは、腕を組んで左肩を壁に押し当てて立っていた。

「そこでおっくりと見ていればいいわ」

ふふんっと鼻を鳴らすファウリーは、小さなナイフを取り出し、口の中でもごごと召喚の為の文言を唱えはじめた。

――どうみても、それは子供の児戯でしかない。

壺の中身もでたらめであるし、唱えている言葉も難しい単語は拾

えないのだろう。ところどころが抜け落ちている。

ハチドリは不機嫌そうに顔を顰めた。

その様子を見れば見るほど、どうして自分が召喚されてしまったのか理解できない。理解したらしたで自らの自尊心が偉いことになりそうだ。

けれど、ファウリーがそのナイフの切っ先でぷつりと指に切れ目をいれ、ぷくりと赤い血が盛り上がった途端、ハチドリは自分の内部がざわりと鳥肌たつようなざわめきを覚えた。

甘い、渴望。

そう、あの時と一緒に。

下らぬ技で召喚されたあの時。無視しがたい激しい欲求を覚えて咄嗟に来てしまったあの時と。

つっと血が壺に落ちると、それは今までの異臭ではなく極上の甘味のようにひきつける。

――震えが走る程の動揺に驚いていると、壁に身を預けていたレイシェンが余裕のない程顔を顰めてファウリーの手からナイフを引き抜いた。

「こんな危険な遊びは禁止っ」

「遊びじゃないもんっ」

「とにかくっ、人間の血を使って召喚なんて駄目だ」

怒鳴るレイシェンを無視し、ファウリーはその壺の中身を歪んだ魔方陣の上にぶちまけた。

「我が呼び声に応えて現れよ、牙の王――漆黒の牙豹っ」

ぞわりと一気に走り抜ける緊張と激しい嫌悪感。

ハチドリは慌ててその姿を人形へと変化させ、その魔方陣から現れようとする未知の恐怖を力任せにねじ伏せた。

魔力と言う魔力を集中させ、開かれようとする召喚門を押さえ込む。

レイシエンは悪魔に気付くことなく、魔方阵からたちのぼる閃光と煙とに目をやられ、咄嗟にファウリーを庇うようにその腕の中に抱きしめて身を伏せた。

巨大な獣が自らの手の下で自由を求めて暴れるのを全力で阻み、それに重ねて魔方阵の上に自らの魔法をたたきつけ、別のものを無理やり召喚する。

——邪魔をつ、邪魔をするなあああ。

獣の咆哮だけがアオオオオオオンと耳に残り、獣がその門と魔力に押し戻されていくのと同時に、悪魔が門を押さえるために反対方向から出現させたものが、びったんばったんと紙の魔方阵の上で暴れた。

びたん。

「……うわー、すごいやあ」

びびびびびつつ。

先ほどの騒ぎなど無かったのか如く、床に座り込んでその膝の上にファウリーを抱え込んだレイシエンが起伏の無い声で言った。

「マグロ……」

呆然と呟くファウリーに、レイシエンは乾いた笑いを浮かべた。

「ザンネン、ブリだよ——なんというか、まさかブリを出すとはね！」

「ブリーイイっ」

レイシエンの膝からはいでた小娘が卒倒するような声をあげているが――

それどころじゃねええええ！

それどころじゃねえだろうがっ。

こいつ、この馬鹿娘。今いったい自分が何を召喚しようとしていたのか判っているのか？

しかも、俺がいなければソレは召喚門を通り抜けてこの場で――この一里四方までも蹂躪していたかもしれないと気付いているのか！
今はネズミの姿に変化した悪魔はぶるぶると身震いし、キィィィと鳴いた。

珍しくげらげらと笑っているレイシエンが床をたたいているが、ファウリーはびちびちと暴れている自分の背にも近いその魚を前に半泣きでレイシエンに指を突きつけた。

「おぼえてなさいよおおっ」

「忘れるなんて無理だって！ ブリ、めちゃくちゃイキのイイブリ召喚っ」

なにこれ、産地直送？

「レイシエンのばかああっ」

だからそれどころじゃねえつつうんだ、この馬鹿二人！

――いったいゼンたい、何故こんなことになるんだ？
なぜあんな出鱈目であんな強大な魔獣をつ。

二本足で立つネズミなど知らぬ氣に、ファウリーは「もお、なんで魚!」と地団駄を踏んでいた。

召喚してません！

窓から堂々とファウリーの私室に入り込んだレイシエンは、出窓からとんと床におりたち、気安い口調で声をあげた。

「ファウリー、明日の――」

勉強机に向かっている子供は、べったりと机の天板になついていた。

「……まだ早い時間だつていうのに」

ぼやくと、レイシエンはやれやれと肩をすくめてファウリーの両脇に手を添えて抱き上げ、机とは反対側にある寝台の上に横たえた。ベッドメイキングなどという言葉を知らない寝台には毛布が丸まって隅においやられているものだから、それを引っつかんでファウリーの上に掛けてやると、レイシエンは肩をすくめてファウリーの机に戻り、小さな椅子に腰を落としてその机を探り出した。

左側の引き出しの一番奥――

二重底になっている板がぽこんと外れた。

手探りで引っ張り出した一冊のノートにはお世辞にも綺麗とは言いがたい文字で「日記」と書かれている。

レイシエンは当然のようにそれを開き、肩肘について顎を乗せて無造作に読み始めた。

ファウリーが日記を書き始めたのは小学部に通うようになってからで、レイシエンがその日記の存在に気づいたのはファウリーが九つになった頃のことだ。

ノートはもうすでに三冊になっていて、一冊目は見逃してしまったのが残念でならない。

時折りファウリーの留守に探してはいるのだが、なかなか見つからないのが難点だ。

――どうしてレイシエンは意地悪なんだろう。昔はもっと優しくかった気がするのに。

喉の奥がクツと音をさせてしまい、慌てて息を潜めた。

――レイシエンの馬鹿！　いつかやつつける。

「相変わらず語彙が少ないな――」

笑いたいのには必死に堪えたが、思わず小さな声は漏れてしまっていた。

――今日もレイシエンに頭を叩かれた！　人を馬鹿って言うほうが馬鹿って知らないレイシエンが馬鹿だと思う。

「じゃあやっぱりファウリーも馬鹿じゃないか」

ぺらりとページをめくり、この二週間程の日記を楽しく拝読していると、ぴたりとレイシエンの手が止まった。

――カロウがもってきてくれた飴すんごく美味しかった。また一緒に遊びにいったらくれるかな。

「餌付けされてるんじゃないよ」

――今日はナーイと遊んだ。カウロも遊ぼうって言ったけど、ナーイ達女の子は男の子と遊ぶのは嫌がる。どうしてだろう。乱暴だっ
て言うけど、カウロもマーカスも優しいのに。カロウはいつもお菓子くれるのに。

「ドニーの名前が無くなったのはいいけど、カロウは少し邪魔だな
――……ファウリーは食べ物に弱いのはどうにかならないものかね」

やれやれ。

ぱたりと日記を閉ざし、レイシエンは二段目の引き出しの奥にもう一度日記を収めなおすと、寝台で毛布に抱きつくようにしているファウリーを見た。

つい先日十になったばかりのちびすけ。この辺りでは滅多に見ることもないさらさらとした黒髪と黒灰のような透明な瞳を持っている。

初めてレイシエンがファウリーを見た時、すでにファウリーは四つ程の年齢で、そして隣に暮らすパードルフが困った顔をしてその腕に抱っこして現れたのだ。

「すみません、コールストンさん。お乳ってでます？」

……パードルフはちよつと変わった男だが、どうやら四歳くらいの子供はすでに乳離れをしているということも知らない様子だった。そして十四歳の少年の母親が乳などでないことも。

あげく常識知らずのパードルフはその子供を「ちよつと見といて下さい」と言ってその後半年近くもの間レイシエンの家に預けっぱなしにしたのだ。

ただしパードルフは召喚魔導師という職種の為にか金払いは良く、その時に皮袋一杯の金貨をおいていったものだから、むしろレイシエンの母親などは憤慨した。

「この子は今日からうちの子だよ！」

と、完全にパードルフを無視して言い放ち、レイシエンも数日もすればそのまま受け入れた。

「名前は？」

問いかけると黒い飴玉のような眼差しをまたたいて、不思議そう

に「ふあう」と言う。

「ファウ？」

「りー」

続いた言葉に「ファウリー？」と確認すれば、こくりとうなずく。

「とー、たまは？ とーさま。かーさま？」

外国の子かと思っただが、言葉はきちん通じるようではあった。不安そうにパードルフを探しているようだったけれど、母は無視して身を屈め「ファウリー、あたしがママだよ。こっちはお兄ちゃんのレイシェン。パパはいつもは遠いところで仕事しているが、丁度今日の夜は戻って来るよ。お腹はすいたかい？」

母の説明に不安そうに黒い瞳が揺れる。

「にー、ちゃ？」

とにかく、その日からファウリーはレイシェンの家族だった。

艶やかな黒髪の大人しい子供は、はじめのうちこそびくびくとしていたし、何かといえばレイシェンの足にはりついてはにこんでいた。ものめずらしい姿も手伝って、町の人は遠巻きに見ていたけれどそのうちにファウリーの姿は町に馴染んでいった。

時々意地悪な子供がいてファウリーの髪や瞳の色を嘲るけれど、そうするとファウリーは決まってレイシェンに抱きついて「どうしてファウリーはお兄ちゃんと違う色？ お兄ちゃんみたいな綺麗な色なら良かったのにっ」と潤んだ瞳でせつせつと語るのだ。

はじめてできた妹は、まるで壊れ物のように可愛くて仕方が無かった。

「いやあっ！ 久しぶりい」

いつものように外で一杯ファウリーを遊ばせて、疲れて眠った彼女を抱っこして自宅に戻ったあの日、満面の笑みで片手をあげて言ったパードルフを殴らなかつたのは今も後悔している。

呆氣に取られているレイシェンの腕からファウリーを取り上げ、眠っているファウリーの頬にチュツチュと音をさせて口付けたのだ。ぶちりと血管が切れそうになった。

「寂しかったかい、ファウリー」とパードルフは陽気な口調で言ったが、たたき起こされたファウリーはむにやむにやと口を動かし、パードルフを見て「だあれ？」と尋ね返した。

その時ほど胸がすつとしたことは無い。

パードルフは呆然としてファウリーを見つめ、わざとらしくふるふると首を振った。

「ま、まあいい。今日からは一緒に暮らせるからね！ 父さんを説得して連れてきたから、日々の世話はおじいちゃんがしてくれるよ」

「冗談じゃありませんよ！」

母は怒鳴り声をあげ、ファウリーはびくんっと身をすくめた。

「ファウリーはうちの子ですっ」

「そんな訳ないですよ。ファウリーは俺のです——ちょっと預かっていてもらっただけじゃないですか」

不思議そうにパードルフは首をかしげ、ファウリーを抱いたまま歩き始めた。

「ファウリー、帰ったらおじーちゃんに挨拶するんだよ」

「なに？　ねえ、何……？　ママっ、おにーちゃんっ、なんなの？」

泣き声をあげるファウリーに、レイシェンは慌てて手を伸ばした。小さな手がレイシェンの手にふれからみ、必死に救いを求めるといふのに、パードルフはひょいっと容易くよけて肩をすくめた。

「ファウリーはうちの子だっ」

「レイシェン、ファウリーを可愛がってくれたんだね？　ありがとう。でも我儘でおかしなことを言っちゃ駄目だよ」

——違う。おかしなことを言っているのはパードルフだ。

突然来て、傍若無人に子供を置いていった挙句に連れ去ろうとしている。

けれど結局、ファウリーは隣の家連れ戻された。

養育権というヤツをパードルフは主張し、預けている間の費用もきちんと自分が出していたことを証明したのだ。

幸いなことにパードルフは引越したりしなかったから、ファウリーは毎日レイシエンの家を訪れたし、それまでと何も変わっていないかのようにも見えた。

でも、そんなのはまやかした。

以前のように一緒に起きたりしない。

共に食事をする回数も激減したし、お風呂にいられてやることもない。なにより、父親が引き取るのは当然のことなのだとなんとか納得させようとしたのに、パードルフはおかしなことを言ったのだ。

「血のつながらない娘を援助するのはパパだからパパって呼んで」

——血が繋がっていないのにファウリーの所有権——いや、養育権を主張した意味が判らない。パードルフは父親ではないのだ。

レイシエンはパードルフが大嫌いになった。

大嫌いでありながら、他人には「尊敬している」と嘯く。当人には笑みを向ける。そうすることで自分の内にまったく別の感情を育て、隠し通していくのは難しいことだった。

突然ファウリーを連れ去られてはたまらない。

もともとパードルフなど隣の家にも暮らしているのかいないのか判らないような存在なのだ。警戒などされてファウリーを連れて行かれるくらいなら、いくらでも褒め称えてやる。

ファウリーはその記憶の中にレイシエンと暮らしていた半年あまりなどすでに留めてもいないし、パードルフのことを「ぱぱっ」と言っていて慕っている。

絶対にファウリーは馬鹿だ。

考えれば考える程腹がたってくる。

レイシエンは机の上の魔導石のランタンを消し、薄暗くなった部屋に浮かぶファウリーの白い寝顔に溜息を吐き出した。

「まったく馬鹿でしょうがない」

ファウリーが馬鹿なのは仕方ない。

帰る家を忘れてしまった愚かなファウリー。

あの時、手を離してしまっただけから帰ることができなくなってしまったファウリー。

でも、大丈夫。

「あと五年くらいかな。少し長いけど、五年たてばうちに帰れるよ」だから、大丈夫。

レイシエンは小さく微笑を落とし、眠るファウリーの頭を一度撫でていつものように窓から軽やかに抜け出した。

本棚の上で飛びうさぎの格好でそれを眺めていた悪魔はかしかと耳をかきながら「ぶっ」と鳴いた。

——人間つつうのはおかしいイキモノだよな。

起きている時は怒らせてばかりの癖に、寝ている時はまるきり違う行動をとる。

おかしいながらもこの「人間」てやつを眺めて二年。

悪魔はそれでも一つ気付いたことがある。

「ガキの日記見て喜んでる人間は人間としてまずくねえ？」

残念なことに、悪魔は悪魔なのでそれ以前の問題でこの青年が色々まずそうなことにはまだ気付いていなかった。

召喚禁止！

「ばばはっ」

泣いて泣いて、泣きはらした翌日。

ファウリーはぼうっとかすむ頭で台所におりて、暖かいミルクとベーカーコンに目玉焼き、昨夜の残りのとろとろのコーンスープにおじいちゃんの焼いてくれるおいしいパンという朝食を平らげた。

その後食器の片付けもそこに、おじいちゃんに昨夜訪れていたばば——召喚魔導師のパードルフはどうしたのかと尋ねた。

本来であれば朝一番に叫ぶべきだったが、毎日の習慣で思いつきり朝食を食べてしまったオコサマファウリーだった。

「ファウリーが寝た後に帰ったよ。ミルクのおかわりはいるかい？」
帰った、というのはおかしな表現だ。

ここはパードルフの家なのだから。

だが、仕事が忙しいパードルフは実際に自宅にいることは滅多に無い。

昨日だって突然訪れ、そして——ファウリーをさんざ叱り付けて、うなだれているファウリーを宥めながら寝かしつけるまでの数時間しか在宅しなかった。

ファウリーはパードルフが居ないという言葉に、おじいちゃんの言葉を無視し、慌てて階段を駆け上がった。

二段飛ばしで足音も荒く駆け上がり、思い切りパードルフの書斎のドアノブを引っつかみ——キーンという硬質な音と共にその扉からバチンッと静電気の攻撃に短い悲鳴をあげた。

『あけちゃいやーん。えっちいー』

耳に痛みをもたらす音と、パールドルフの声と同時にドアノブの上にぐりゅんつと出現したのは、黒い奇妙なぶよんぶよんとした雫のようなモノだった。

「くうっ」

ファウリーはその気持ち悪さに咄嗟にドアノブから手を離れたが、未練からもう一度勇気を振り絞って手を伸ばした。

『いやあああ、やめてえ。痴漢よおお』

まるで襲われる乙女のようにパールドルフの声音でソレが悲鳴をあげながら微弱の電流を流しまくる。

そう、不愉快な声をあげているのはその黒いぶによぶによだ。

召喚魔導師パールドルフの「封印」の為の召喚獣。

ファウリーはわなわなと身を震わせ、半泣きで叫んだ。

「ばばの馬鹿あああ」

「おはよう、ファウリー」

医療魔法士の資格をとったばかりのレイシエンは、研修士の白衣姿で嫌味ったらしく笑みを浮かべていた。

レイシエンはファウリーの髪を毎日結い上げるという日課を持っている為、今もその手にはブラシを持っていたが、ファウリーは今日は絶対に髪を結わせてやるつもりなんて無かった。

それどころか、もう絶対にレイシエンとなんか口を利かない。

「昨日、パールドルフ先生が来てたんだって？ 言ってくれればいいのに」

レイシエンの言葉に、ファウリーは泣きはらした目で相手を睨みつけた。

「レイシェンでしょう！」

「何が？」

「ばばにあたしが召喚したってチクったの」

口なんか利かないと誓ったが、もうすでにその誓いは破られた。

三歩歩くまでもなく忘れる鶏頭なファウリー、十一歳。

悔しくて悔しくて仕方が無かった。

パードルフは召喚術を禁じた挙句、ファウリーにとっても大事な魔導書の宝庫である書斎を出入りできないように封印してしまったのだ。

「チクったなんて人聞きの悪い。さすが尊敬するパードルフ先生の娘だって褒めただけだよ」

しれっとレイシェンは言うが、パードルフに告げたという事実はいい逃れる気は無いらしい。

ファウリーは小刻みに身を震わせ、ぎゅっと拳を握り込んだ。

レイシェンの告げ口のおかげで昨夜こつてりと絞られたのだ。

「召喚術を行使するには資格が必要で、その資格をもたないものは犯罪者として投獄されてもおかしくない。それがたとえ子供であっても！」

召喚魔導師としてのパードルフはそれを許すことはしなかった。

召喚術の初歩を学園で学ぶことができるのは、中学部に入ってから。それも基礎と召喚術に対する倫理、法律を学ぶだけで実際に召喚をするのは二年目に入ってから。

それも教師が居る場と決められている。

卒業までの間に試験をパスすることができれば、やっと高等部で召喚士としての専門課程を受けることができるのだ。

現在ファウリーは十一——さすがに色々とまずいと思い、パードルフには秘密でこっそりと召喚の術を高めようとしていたのだが、いくらやってもファウリーは魚介類しか召喚できなかった。

それで先日思いあまり、十歳のときにレイシエンに禁じられた自らの血を使つての召喚を試みたのだが運悪くレイシエンにばれたのだ。

「レイシエンの馬鹿っ」

「なんとでも。約束を破ったのはファウリーだろう。ぼくは血を使うのは禁止だと言っておいたのに。それを無視して阿呆な真似をするから悪い」

「つつ。あんたなんて大っ嫌い」

「もうその台詞飽きた」

ふんつと鼻で笑われ、ファウリーは地団駄をふんでくるりと身を翻した。

「ファウリー？ 髪は？」

ふりふりとブラシを振ってみせるレイシエンに背を向けたまま、ファウリーは背負った鞆のベルトを少しばかりずらしながら「知らないっ」と言葉を吐き捨ててそのまま石畳の坂道を駆け上がった。行った。

腰までの髪が鞆の左右でざんばらで揺れている。

普段であればきっちり左右の三つ編みに結い上げ、頭をくるりとめぐらせるようにして止めている黒髪。今日はぞんざいに櫛は通した様子だが、好き放題に伸びて鞆の上も跳ねている。

それを瞳を細めて見送り、レイシエンは吐息を落とした。

「また朝から喧嘩？」

窓から顔を出した母親に、自宅の階段に座り込んでいた白衣の息子はブラシを振った。

「喧嘩するほど仲がいいってね？」

「……嫌われてるようにしか見えないけどね」

呆れるように眉を潜められても、レイシエンは肩をすくめた。

「仲良しだよ」

真っ赤な目のファウリーが背負った鞆の皮ベルトを掴むようにして足音も高く歩いていると、突然「きったない！」と嘲る声が響いた。

いつもと同じように今日は蝶の擬態でひらひらとファウリーの頭に張り付いていた悪魔は、その声にすうっとファウリーの頭を離れて近くの家の屋根で座り、ニヤニヤと人型に変化した。

最近のファウリーの天敵、ニナ・ローダというクラスメイトの少女は、それは見事な金髪をばさりと片手でわざとらしく払って見せた。

途端にファウリーの眉が一層潜まる。

ファウリーが通っている小学部へと続く坂道の先、同じ鞆を背負った金髪の少女は意地悪く唇を尖らせていた。

「あんた本当に女の子？ 汚らしい真っ黒い髪。せめて結い上げておかないと見苦しいったらありやしないわね」

結い上げていれば結い上げていたで「黒が際立って汚い」と言う癖に。

ファウリーは涙をぴたりと止めて、ふんつと鼻を鳴らした。

「今日もわざわざご苦労さま」

ニナは最近こうやって道の真ん中でファウリーを待ち伏せしてい

るのだ。決まってこの場所で。

嫌味を幾つか口にする習慣をつけたようで、ファウリーはうんざりとしていた。

——ニナは、ほら、レイシエン先生が好きだから。

と、気の毒そうに友人のチェルシーが教えてくれた。

ファウリーからしてみれば「目が悪いの？ それとも趣味が悪いの？」と本気で心配になる事柄だが、さすがに今までそのことを指摘したことはない。

だが、今日のファウリーは違った。

たった今、レイシエンと喧嘩してきたばかりだ。

こうやって訳のわからない嫌がらせを受けることもまたレイシエンのせいだと思ふとむかむかしてくる。

「どうせ寝坊でもしたんでしょうけど、女捨ててるのってどうなのかしら」

ニナが冷たく言う言葉に、ファウリーは覚めた眼差しで口を開いた。

女捨てているも何も、十一で女を前面にだしてくるほうがファウリーには判らない。男だの女だの面倒くさい。ファウリーに大事なものは、召喚魔術だ。

「女捨てているだのどうでもいいわよ。どいてくんない？」

「あんたって本当に生意気！」

意味が判らない。

「レイシエン先生が優しいからってつけあがってるんでしょう！」

……ファウリーはますます顔をしかめた。

レイシエンは現在学園の隣にある医療療法士の塔で研修生をしていて、小学部の定期健康検査などの手伝いをしたりもするので、生徒

達の間では専ら「先生」といわれている。ファウリーは口が裂けても先生などと言ったことは無い。

そして何より、生憎とレイシェンが優しいなどという事実はまったく全然欠片も無かった。毎日のように喧嘩している訳ではないが、いったいゼンたいレイシェンのどこが優しいというのだろうか。

「……今までずっと黙ってきいてたけど」

ファウリーは淡々と言った。

「ニナ、あんたってすつごく趣味が悪いんじゃない？」

「なっ、何の話しょ？」

「レイシェンのどこがいいの？」

言った途端、ニナは真っ赤になった。

「なっ、何よあんた。何突然言ってるのよっ」

……うわ、気付いてないつもりだったのか？ そんな馬鹿な。

ファウリーはあきれ返り、相手を無視してその横を通り過ぎようとした。しかし、相手は突然の指摘に逆上したのか、いきなりファウリーを突き飛ばした。

坂の上から。

自分より上にいた相手にどんっと突き飛ばされたファウリーは、そのまま真後ろにのけぞった。

慌てて左手で身を庇おうとしながら、自分を突き飛ばした相手を見返す。

それはきつとほんの数秒の出来事だったろうに、ファウリーは相手の顔が怒りから驚きに変わり、口元が歪むのを確認した。

馬鹿じゃない？

驚くならそんなことしなけりゃいいじゃないの。

石畳の上に体が投げ出され、鈍い痛み小さな悲鳴があがる。幸い、背負っている鞆がクッションになり頭を打ち付けるようなことは無かったが、庇った手首がぐきりと痛みを伝え、ファウリーは呻くように顔をしかめた。

顔を顰めながら二ナを見れば、さっきまで真っ赤だった顔が、今は青くなって――そしてぷいっと顔をそらして駆け出していった。しまった。

「……ひどっ」

ファウリーは小さく呟き、投げ出されたままの格好でなんとか上半身を起こし、ひりひりと痛む尻で石畳に座ったままツキツキと痛む手を持ち上げた。

「……」

石畳の上でこすれ、白く後になったところには擦過傷。

ファウリーの顔が引きつったのは、痛みで確認ができないが手首のあたりから手がぷらーんっと力なくうなだれている。

そして、手の平には小さな石が幾つもめり込み、ついで血が滴る。確認した途端に激しい痛みが身を襲い、ファウリーは奥歯を噛み締めた。

せめて骨折の有無は確かめようとおそるおそる手を振ろうとした途端、大きな手がぐっとファウリーの痛む手を掴み上げ、そして――血に濡れた手のひらに生暖かな舌が触れた。

「え……?」

しゃがんだままのファウリーの後ろ、その肩を抱くようにしてファウリーの手首を掴み、手の平の汚れなどものともせずその傷口

を舐めているのは、黒髪の男だった。

それは抗えない甘美な誘惑だった。

ファウリーの体がどんつと無遠慮に押された時、悪魔はいつものように足を組んで屋根の上でそれを眺めていたが――普段どおり、何があるうとただ傍観しているつもりだった。

ファウリーは悪魔の召喚主だが、悪魔はそれを認めていない。ファウリーへの復讐の為にこうしていつも近くにいるだけだ。

最近ファウリーと口げんかする人間が一人増えた。それに対して何か思いがある訳ではない。ニヤニヤとファウリーとその子供のやりとりを眺めていたが、その小娘がファウリーを力任せに押した途端、不快な気持ち湧き上がり、ついでファウリーが石畳に音をさせて叩き付けられた瞬間、辺りに甘い香りがほとばしった。

甘い、甘くて抗えない誘惑。

ものを考えるということさせない強い欲求が、悪魔を愚かな行動に走らせた。

とんとと地面におりたち、その甘い魅惑の根源に舌を這わせた。

とろりと赤い液体が舌に触れた途端に、どうしようもない程のざわめきが自分の中に広がっていく。

驚いたように小さくファウリーが声をあげ、慌てて悪魔に捕らえられた手を引き戻そうとする。それが途端に腹立たしく感じた。

強く押さえつけて、もっと――もっと欲しい。

欲望のままに求めようとした途端、突然げしりと横合いから蹴りをいれられた。

「どけ、この変質者っ」

力任せに、容赦なく悪魔に蹴りを入れたレイシエンは更にもう一撃、自らの持っていた鞭で悪魔の頭を力任せに殴りつけ、そのまま未だ石畳の上に腰を落としているファウリーの二の腕を掴んで立たせた。

それまで甘美な酔いに身を震わせていた悪魔は、突然の攻撃の意味がまったく理解できずに頭を抱えてうずくまっていたが、何かを考えるより先にもう一撃、レイシエンの蹴りを受け、その場にへたり込みそうになったが、だんだんと腹立たしさが沸き立ち、反撃してやろうと顔をあげたところで――レイシエンの後ろにばたばたとこちらに掛けてくる警備隊の姿を認め、悪魔は面倒くささに舌打ちをしてその場から逃げ出した。

レイシエンは警邏隊に変質者だと告げ、自分もその後を追いかけるようにしたが、ファウリーがよろけて短い悲鳴をあげた為にその足を押しとどめた。

「ファウリー？ 怪我させられたのか？」

「……いや、あの」

「何かされた？」

ファウリーは眉をぐぐつと潜め、てるーんと力なくうなだれたままの自分の腕をみて、更に眉を潜めた、

「……もしかして、氣遣われたの、かも？」

「何言ってる？」

「あの人に何かされたって訳じゃ……いや、手のひら舐められたけど」

「舐められた？」

低く唸るようなレイシエンの口調に、慌ててファウリーはぶんぶんっと首をふった。

いつもとはまったく違うぴりぴりとしたレイシエンの様子にファウリーは怖さを覚えた。まるで自分が怒られているかのようなのだ。

なんであたしが悪いかのように怒られてるの？
悪くないよねっ！

「さっき転んで！ 咄嗟に腕をついたらこんな感じになっちゃったの！ それで、あの人が……傷を気遣って？ くれたのかな？」
そう口にはじめてファウリーは気付いた。

「どう見ても変質者だろ」

さっき、自分の手のひらを舐めていた青年が——自分と同じようにこのあたりでは見ることもない黒髪に黒い瞳であったことに。

慌てて駆け出して追いかけようとしたのを、レイシェンが手首を強く掴んで押さえ込んだ。

「怪我、見せて」

「それどころじゃっ」

「ファウリー！」

きつい眼差しで睨まれ、ファウリーは唇をぎゅっと引き結んだ。

——自分が貰われっ子だとは知っている。

パードルフは隠そうとはしないし、隠し様もない。

ファウリーの持つ色彩は今まで誰も持っていなかった。国がまず違うのだ。

「ファウリーはぼくの宝物だよ」とパードルフはさりと流してしまふ。父のことも母のことも教えてはくれない。せめて、自分と同じ色彩の人にあってみたいと今まで思っていたのに、せっかく出会えたかと思えばコレだ。

ファウリーはレイシェンの手に包まれ、治療呪文で熱をもちはじめた手を見つめた。

生暖かい舌先が汚れた傷跡を清めるように舐めていた感触がよみがえり、気恥ずかしさにぶるりと身が震えた。

「痛い？ 少し時間が必要だよ。今日は学校は休んで治療に時間をとろう——大丈夫。きちんと治せるから」

レイシエンが珍しく優しい口調で労わってくるのが——気持ち悪い。

ファウリーは内心で顔をしかめながら、町の警邏隊が追いかけていった青年を思っていた。

……また、会えるだろうか？

いや、でももしかして本当にただの変質者？

舐められた手を思い、ファウリーは複雑な気持ちになった。

「糞レイシエンぶつつぶす！」

その時、レイシエンとファウリーに変質者認定を受けていた悪魔は、ずきずきと痛む頭を抱え、屋根の上でレイシエンへの報復を誓っていた。

召喚した？

真新しい装丁の本には、召喚魔導基本の書と流れるような飾り文字で書かれていた。

中等部も三年目に入り、やっと自らの希望の通りに必修科目で召喚術科を選んだファウリーだったが、当然、基礎だとか基本なんて阿呆くさいものには興味は無い。

しかし、ファウリーは着実に「召喚免許」を手にいれなければならないのだから、この道は定められた通りに歩まなければならないのだ。

おじいちゃんは「あの阿呆と同じ道を行くなど止めて欲しいんだがな」と肩を落としたが、別にぱぼであるパードルフが召喚魔導師であるからこの道を望んでいた訳では無い。物心ついた時から、ファウリーは何も無い場所に新たな存在を招く召喚という行為に憧れていたのだ。

何より。

おじいちゃんが言うようなことではなく、ただ単に腹立たしい幼馴染に報復する手段として手っ取り早いのではないかというのがきっかけだ。

目にも鼻にもつくレイシェンに何かやり返してやろうと思った時、パードルフが所蔵している「召喚術の書」が目についただけなのだ。

「基本なんて今更学ばなくてもね」

鼻歌交じりに言いながら、それでもファウリーは自分の部屋の寝台に体を投げ出し、寝そべるようにして真新しい本を開いた。

ぱらりと本をめくれば、そこに書き記されているのは国の法律だった。

——召喚は国法召喚第二条によって定められたものだけが使うことを許され、許可なきものは誰であろうと厳罰に処する。

いかめしい文体で書かれたそれに、ファウリーは眉をぎゅっと潜めた。

厳罰についてはパードルフにも聞かされた。

ファウリーは幼い頃に自分勝手に召喚術を行使してしまった。

免許の無いものが召喚術を行使することが罪であるなどその当時は知らなかったのだ。

一度目の召喚で現れたのは、ちっぽけなタツノオトシゴだった。今思い出せば、ちっぽけというにはちよっぴり手の平よりおっきなサイズで違和感を覚えるが。

突然表れたソレに対し、海の生物だということをつっかり失念し、ポンプでくみ上げた生水の中に入れたことによりトドメをさしてしまったことは、幼いファウリーにとって苦い思い出だ。

ついで二度目の召喚はブリだった。

そう、ブリ。

体の側面にそれはそれは綺麗な黄色と青いラインの入ったぴっちぴちの新鮮な魚。

どちらの召喚も魔獣と呼ばれるものを召喚するつもりであったというのに、何故か海産物だった。

いったい何がいけなかったのか……調べようにもその後パードルフによって図書室に鍵と封印を施されてしまった為に謎は謎のままだ。

学園の図書館も、召喚術や魔導書の類は一定の許可を持つものでなければ読むことが許されない。

「でも、それもオシマイ」

中等部の三年になり、召喚術を専攻すれば一応図書館のC区画許可がおりる。

まだまだ初歩の段階の書籍しか読むことは敵わないが、これからは毎日のように図書館に通って召喚術を学ぶことができるのだ。

ファウリーはつまらない法律の書かれたページをさらりと無視し、ぺらりとページをめくった。

喜びを示すかのようにその足が寝台の上で揺れている。

——そんなファウリーの様子を、実は戸棚の上から眺めているものがあるのだが、ファウリーは相変わらずソレをはつきりとは認識できていなかった。

幾度か何かがよぎるような気がしているが、虫や小型の生き物のように思われる。大きさは時としてネズミ程。

実害という程の害を覚えてはいない為に放置しているが、実際はソレが四六時中自分に張り付いている悪魔だと知った場合、激しい嫌悪感が膨れ上がったことだろう。

悪魔は現在棚の上をせっせと清掃中。

細かい埃はくしゃみのもとです。

「それに、むかつくけどレイシェンが監督してくれば召喚術だってやっていいんだし！」

レイシェンは召喚魔術師でも魔導師でもないが、腹立たしいことに教員免許を取得している。

教員免許を所有している人間は監督官をすることができるのだ。
レイシェンへの報復活動の手助けをレイシェンにやらせるという、
なんとも素晴らしい復讐のシナリオ。

ある意味、か・ん・ぺ・き！

ファウリーは鼻歌交じりで本の文字をむさぼった。

「いやあああつ」

金切り声の悲鳴をあげて、ファウリーはがばりと体を起こした。
召喚基礎の本の文字を視線が追えば追うほど、胃が引き連れるよう
な思いを味わった。

まずファウリーの喉からうめき声を出させたのは、謎のマスコット
キャラ、召喚獣の【しょうちゃん】が博士課程を学ぶ学生が頭に乗
せるような帽子をかぶり、偉そうに【はじめての召喚】について語
っているところから始まる。

——はじめての召喚は、とにかくイキモノ、ナマモノは避けること。
【召喚術は相手の意思を無視して自らの元に召喚する強制力の強い
魔術だから、決して初期の段階でイキモノを招いたらいけないぞ！
技量以上のイキモノを召喚して食べられちゃうことはよくあるん
だ】

さらっと怖いことが書かれている。

「食べられちゃうって……」

しょっぱなから紅ドラゴンを召喚しようとした記憶がまざまざと
よみがえる。

脳裏に残虐なドラゴンがファウリーをがしりとその鉤爪のついた手
でがっしりと掴み上げ、ギャオオオンと炎を撒き散らしている場
面を想像し、目元がひくひくと引きつった。

【自分の技量に見合ったものをこつこつと召喚して経験をつんで行こう！】

まるで小学部のテキストのような文体に苛立ちを覚えながら読み進めていくうちに、召喚術の基本アイテムの欄がカラフルな図解入りで書かれていた。

「なんか、あまりイイ趣味じゃないな」

思わずぼそりと言ってしまったのは、使われている品物がどれも「エグイ」様相を示しているからだ。

カエルの干物、クロトカゲの尻尾。猫のヒゲ――

ふと、猫のヒゲにいやな記憶が呼び起こされる。

「でもおじーちゃんの白髪で代用されるんだから、結構適当よね」
乾いた笑いが漏れたが、そのうちにどんどんと自分が使った品物と書かれているものの差異に血の気が引いていく。

挙句、マスコットキャラの【しょうちゃん】がやたら生真面目な調子で念を押す。

「アイテムの使用法、分量はきっちり調べて決して間違っては駄目なんだ。召喚獣は君のちょっとしたミスを利用して、召喚主を陥れることもある。召喚したらきちんと契約を交わし、名前を与えてちゃんと自分の支配下におかなくちゃ駄目だぞ」

……とりあえずタツノオトシゴはいいとして、ブリは食べてしまいました。

契約は勿論、名前なんて付けてない。

そして、引きつりつつも文章を指先で追いかけるように読んでい

たファウリーだったが、最終的に堪えられずに悲鳴をあげたのだ。

幼い自分のやった愚かな行為が恥ずかしくて。

「うわっ、うわあっ。やだ、ちよつと自分バカすぎ。どうしようっ。恥ずかしいっ」

突如として胸に飛来する羞恥心。

召喚術にトマトとほうれん草を使ったのはもしかしたら自分だけかもしれない。

ファウリーは近くにあったクッションを振り回して寝台に幾度も当たて、最終的にそれを抱きしめるようにして「ばかー」と自分を罵倒した。

「何がバカなの？」

そしてはたと気付くと、自分の部屋の出窓を外側から開けてやけに堂々と部屋に入ってくる男が一人。

ファウリーは思い切り相手を睨みつけた。

「レイシェンっ、来るなら下から来なさいよっ」

「こっちのほうが早いからね。それより、なに？ さっきの悲鳴」

レイシェンは勢いをつけて窓から室内に入り込むと、眉を潜めて寝台の上のファウリーを見下ろした。

召喚魔術の本とクッションとを抱えるようにして今は胡坐をかいて座っている十四歳の娘は、不機嫌をあらわすように唇を尖らせた。

「レイシェンには関係ありません」

「もしかしてまたネズミでも出た？」

「ちよっ、どうしてネズミがいるのしってるのっ」

正確に言うのであれば、ネズミのようなモノだ。

時折目の端にちらっと見かけののだが、それを確実に目にしたこと
は無い。なんとなく毛のあるイキモノでは無いかという予想でファ
ウリーはソレをネズミではないかと疑っているのだが、勿論その実
態はファウリーがその昔召喚してしまった悪魔である。

——現在は棚の上の埃を綺麗に拭き取り、得意顔で胸を張っていた
のだが、窓からの来客に顔を顰めていた。

「ぼくは千里眼だから」

レイシエンはさっくりと言っているが、彼の愛読書は日記と書か
れているファウリーの勉強机の中に隠されているノートだ。

ファウリーが普段どんな阿呆なことを仕出かし、考えているのか
良く判る素晴らしい書物で、レイシエンは二週間にいっぺんそれを
読むことを楽しみにしている。

あまりに素晴らしすぎて、時に赤いインクで添削してやりたい衝
動にかられてしまうが、とりあえず今はまだやったことはない。

とっても高尚な趣味だとレイシエンは自負しているが、ファウリ
ーにばらすつもりは今のところ無かった。

もしばれた場合、悪魔の存在以上にファウリーに激怒されるのは
目に見えている。もう幾度も突きつけられた「絶交」程度ではすま
ないだろう。

レイシエンはまったく気にしないが。

「ネズミ、もしかしてレイシエンの家からうちに逃げてきたんじゃ
ないでしょうね？」

唇を尖らせるファウリーに、レイシエンは片眉を跳ね上げた。

「もしかして話を誤魔化そうとしているんじゃないだろうね？ さ
っきの悲鳴は何？ その様子じゃネズミが出たって感じでもなさそ
うだし」

「――」

ファウリーは呻いて思わず横を向いてしまった。
「なんでもない」

――ジギタリスなんて毒草だし。
ほうれん草で代用しちゃったわよっ。

過去の失敗の恥ずかしさにのた打ち回り、思わず声をあげてしまったなどと恥の上塗り過ぎて言えない。

自分の無知が恐ろしい。

もうこの記憶は永遠に封印してしまいたいが、こういった羞恥は突然何の前触れもなく、「いやぁ」と声をあげだくってしまう黒歴史となるのだろう。

ファウリーはぶるりと身震いし、自分の頬が赤く染まるのを感じて思わずむにむにとつまんでしまった。

「ファウリー」

冷ややかにファウリーの名をゆっくりと口にするレイシェンを見上げて、ファウリーは唇を尖らせた。

「な・ん・で・も・ないってば」

「学校で何かあった？」

「ああ、もおうるさいなあ。出てって」

ファウリーは顔を背け、寝台の上に放置されていた「召喚魔導基本の書」へと手を伸ばそうとしたが、それより先にレイシェンがそれを手にしていた。

「専攻、召喚にしたんだ？」

「――そう」

「ファウリーのことだから、ちょっとやってみたいか思ってるだろう？」

ぴくんとファウリーの体が反応する。

それを確かめるように見つめ、レイシエンは淡々と口にした。

「よければ見てあげてもいいけど。ああ、でもファウリーにはパードルフ導師がいらっしゃるもんね？　ぼくが見てあげるなんておこがましいか」

レイシエンの言葉にファウリーはぐっと拳を握り込んだ。

確かに、ファウリーには保護者のパードルフがいる。宮廷の魔導師に名を連ねている超絶有名人だが、有名人だけに自宅に戻るなど滅多に無い。

年に両手の指だけ顔を合わせれば多い程だ。

そして、パードルフ以外に魔術に通じている知り合いといえはレイシエンしか居ない。

ファウリーが自宅で魔術を練習したいと願うのであれば、それはレイシエンに頼むほか道は無いのだ。

――元よりそのつもりだったファウリーだが、まさか相手から言われるとは思っていなかった。

「じゃあ、ぼくは用無しだろうから帰るよ」

あっさりと言い切り、手にしていた「召喚魔導基本の書」をぽんと寝台に放って背を向けようとするレイシエンの腕を、ファウリーは咄嗟に掴んでいた。

「レイっ」

「ん？　なに？」

レイシエンは色素の薄い瞳を細めて「なにか？」というようにファウリーを見下ろしてくる。

ファウリーは何故か判らない屈辱のようなものを覚えつつ、悔しさにひきつる口元を動かした。

「見て、くれる？」

「んん？　どうかしたの？」

もごもごと動くファウリーの口からこぼれた声が小さいのか、レイシエンは一旦離れかけた足を一步ファウリーの元へと戻し、少しだけ身を屈めて見せる。

レイシエンの腕に自分の手を掛けたまま、ファウリーは苦痛を堪えるように眉を潜めた。

「ねえ、ファウリー？　どうかした？」

勢いをつけて言ってしまうばい。

「召喚の練習がしたいから、時々監督官をして」って、ただそれだけの話なのだ。何より、今レイシエン自身が申し出たのだから、きつとレイシエンだって無下に断ったりしないだろう。

勢いだ。

思い切って言えば――

一旦伏せた瞳をあげ、思いのほか近い場所にレイシエンの眼差しを見つけ、ファウリーは危うく悲鳴をあげてしまいそうになった。

「ぼくにどうして欲しいの？」

「う、あ……えっと」

「どうしたの？」

小さなファウリーの声を聞き入れる為に身を伏せるレイシエンは、まるで内緒話でもするように声を潜め優しく囁いた。

「何か頼みがあるのなら、ちゃんとお願いつて言ってごらん」

レイシエンが口元を緩めてその指先で頬に触れようとした途端、どすりという鈍い音と同時に、レイシエンは突然「うぐっ」と呻いた。

「なにっ」

がくりと体制を崩したレイシェンの様子に驚いたファウリーは、レイシェンの足元にごとりと音をさせて落ちたモノに大きくその瞳を見開いた。

「亀！——って、えええ、なに、何で亀？っ」

ひっくりかえった亀は、ファウリーの声など完全無視でじたばたと四肢を動かしていた。

亀の種類などあまり知らぬファウリーだが、とりあえずすっぽんではなさそうだ。平らな腹を見せてなんとか爪先を床に当ててひっくり返ろうとしている亀の姿は、やけに——シユール。

「ファウリー！ 召喚術は勝手にやっちゃ駄目だと言ってるじゃないかっ」

腰に突然亀が激突したレイシェンは憤慨を示したが、召喚術など行使した覚えのないファウリーはレイシェンと亀を交互に見ながら「いや、違うからっ」と慌てて言ってはみたが、レイシェンは信じられなかった——だが、

「もう二度とこんな風に召喚術を行使しないと約束してくれたら、ぼくがきちんと監督してあげるよ」

というレイシェンの言質はとれたので、ファウリーはなんだか納得しきれぬものを残しつつも良しとすることにした。

それに、もしかしてあまりにもあたしが天才過ぎて知らぬ間に召喚してしまったとか！？

あくまでも前向きなファウリーだったが、勿論そんな阿呆なことはない。

「ケケケケケケケ」

ファウリーによって【カメダさん】と名づけられた亀をさっさと元の海へと逆召喚した悪魔は満足気におかしな笑いを漏らした。

そう、亀は立派な海亀だというのに、またしてもファウリーは風呂桶の中に亀を放り込んだ。

さすがにレイシエンが塩を入れていたので、今回命にかかわるような事態にはなっていないが。きっと朝目覚めてカメダさんがいないことにファウリーは落胆するだろう。

しかし、その落胆を思っただけで悪魔は笑っているのではない。

「ざまみろレイシエン！」

勿論、海亀を出現させたのは悪魔の仕業だ。

以前レイシエンに変態扱いされた挙句、蹴りをいれられた恨みは忘れてはいない。

ことあるごとに何かしらの報復を考えていたのだが、今回はじめじめと日々考え、ねちねちと練り込んだ完璧な計画ではなかった。

レイシエンの指先がファウリーの頬に触れようとした途端、何だか腹立たしさを覚えて思いきりレイシエンの背中に着地してしまったのだ。

アライグマの姿で。

——掃除の為にちよつと小型のアライグマになっていた悪魔だが、ネズミならともかくアライグマがそうそういてはまずいだろうという認識くらいはある。

悪魔は咄嗟にその場に海亀を召喚したのだが、阿呆なファウリーとレイシエンはやっぱり愚かにも騙された。

ばーかーだーよーなあああ。

ケケケつと笑いつつ、悪魔はちらりと寝台で眠るファウリーを見下ろした。

「レイシエンにいいように扱われてるんじゃないよ、ばーか」

何といっても、ファウリーをいいように扱っているのは、積年の恨みを持つ自分なのだから。

琴女

千八百五年——箱根の関所を抜けた山道にある大岩に腰をおろし、旅装束の娘は白木の杖を手にあふりと欠伸を一つかみ殺した。

時節は春。娘の年はいえは十七・八か。

大きめの瞳に黒緑の髪。艶のある髪を結び上げもせず、腰までたらし、下のほうで緩く結わえた姿は愛らしいが、何故か額には紫の鉢巻という一風変わったその姿は人目を引いた。

これがもし一人旅であつたならば、すぐさまどこぞに引かれ、若いその身は無残に散らされもしようが、娘には連れがある。

年の頃は彼女の父程にも離れたようにも見える男は山伏のような也をし、口元には無精髭が蓄えられ、その眼差しは厳しくあたりを睨みつけていた。

「琴、琴女——そんなに休んでばかりだと今宵は野宿になるぞ」

惘然と男が言え、娘は唇を尖らせた。

「箱根の宿で泊まればいいじゃないの」

まだ関所は越えたばかり。ここはもとより宿場町ではないかと驚く娘に、男はもう幾日も手入れもされていない髪をかきあげたが、ずさんな髪に指が止まる。その頭は髻も結わずぼらに伸ばして結い紐で結ばただけだった。

「すくなくとも日暮れまで歩かなければ」

低く威嚇するような声で言え、琴女はついつと視線をそらした。

「いーやーよ」

「琴っ」

「歩くのに疲れたわ。お風呂も使いたい。彦だつて臭いし汚い。近くにいる人間の迷惑を考えなさいな」

つんと冷たく言い切る娘を忌々しそうに睨みつけ、彦——彦江は不精に伸びた顎髭を引っ張るように撫でた。

その時にくんつと鼻を二・三度動かしたのは、さすがに琴女の言葉が気に掛かったのかもしれぬ。

「誰の為に先を急いでいると思ってる」

「誰もついて来て欲しいなんて言っていないわ」

ああ言えばこう言うの見本のように突き返される言葉に、彦江はざりりと奥歯を鳴らし、持っていた錫杖をがしりと鳴らした。

——俺がいなくば何もできないだろうに！

そう怒鳴ってしまいそうなのを必死に堪えた。確かに琴女言う通りで、彼女の道行きに半ば無理やりついてきたのは彦江のほうだった。だがそれは七割がた彼女の為であり、二割がしがらみであり、自分の意思は残りの一割に満たない。

時折山道に放り出してやりたい気持ちになるが、それでも彦江はいつだって耐えてきた。

「それにしても、江戸ってどんなかしらねえ」

産まれてはじめて江戸に入る娘は夢想でもしているのかにんまりと口元を緩めている。江戸の噂など数多耳に入っているだろうといえば、琴女は小首をかしげた。

「田舎者とか？ 東者？ 悪口なら山と知れてるけれど、それはどこも一緒よ。あたしは京ばかりが良いとは思わないわ」

そう言う琴女は都言葉を使おうとは思わない。「お里が知れる」と笑うが、それは決して悪い意味では無かった。

大岩に腰を落として歩こうとしない娘にげんなりしていると、ふいに空々しい程に明るい声が入り込んだ。

「足でも痛めなされたかい？」

穏やかな若者の言葉に琴女がぴくりと反応し、相手の姿が年若く楚々とした——いわゆる好青年であることに微笑んだ。

「ええ！ 長い旅に足を痛めてしまいました。難儀しておりますの。どこぞかに良いお宿をしりませんか？」

声音まで変えて媚びを見せる琴女の豹変に彦江は苛立ちを覚えて琴女の頭をにらみつけたが、琴女はすでに藍色の着物の――旅装束ではない着物の男に夢中といわんばかりの様子だ。

箱根に居を構えていると思しき男は、少しばかり淡く微笑み、ちらりと彦江を見たがすぐに琴女に視線を戻した。

一瞥で女の連れがただの用心棒風情と見たのだろう。

「私の知り合いの宿にお連れしましょうか。私の頼みなら宿賃も少しは融通してくれるだろうしね。立てますか？」

「よければ手を貸して下さる？」

琴女は口唇をゆがめて笑い、すがるように男に手を差出した。

「ご親切な方、特別に教えて差し上げますが内密に願います」

琴女はもったいぶった口調で相手の瞳を覗き込み、囁いた。

「私は公家の日野の娘――内侍ないしの局つぼねと呼ばれておりました。どうぞ琴女とお呼び下さいな」

「何故あんなことをっ」

宿の部屋につくなり彦江が声を潜めつつも我慢ならぬというように言葉に力を込めた。

「ばれたらただでは済まんぞっ」

低く唸る言葉は自然と振るえを含ませる。

眼光は射殺す程の強さでもって琴女を見ていたが、当の琴女はものともしない。

「あーら、ばれたりしないわよ」

くすくすと琴女は笑い、長い髪を払った。

「内侍ないしの局がどんな娘かだなんて、誰も知らぬのですもの」
微笑を湛える琴女は、それよりもと部屋の中を見回した。

用意された部屋は十二畳程の部屋と隣には布団がしかれた二つ間になっており、しかも宿の離れという贅沢なものだ。わざわざ温泉までも別に引かれたそこは、偉い方を迎えるのに使われるのだと宿屋の主人は汗をふきふき言っていた。

「内密だと言ったのに、口の軽い男」

意地の悪い言いように、彦江はぶるりと身を震わせた。

宿屋の主人の下にも置かぬ扱いに、まるで不本意というように琴女は寂しげに眉を潜めて囁いてみせるが、そんなものは演技に過ぎぬと長い付き合いのうちでよく知っている。

琴女は他人をそうやってからかうのを楽しんでいるのだ。

「人に知られぬ旅にございます。どうぞ他言無用に願います」

公家に連なる日野の娘といえば、今上様の妹背とも謳われたこともある尊き姫君だ。よくよく考えればそんな姫君がこんな場に修験者のような也をした男と二人で旅をするなどあろう筈が無い。だが、高貴の娘といわれれば確かに琴女は神々しき娘に見えるし、そこはかとなく漂う妖しさがへんに説得力すらもたらす。いかめしい彦江はといえば、世を忍ぶ屈強な護衛にも見て取れる。

「それより、お風呂！ 温泉っ」

琴女は言いながらしゅるりと額に巻いた紫色の鉢巻を引き抜き、そのまま手から離れた。途端、慌てたように彦江がそれを掴んで綺麗に畳む。

琴女は我かんせずで着物の帯紐に手をかけてぱたぱたと隣室に作られている浴室へと足を向けた。

「琴女っ」

ぽいぽいと着物を脱いでいく女を呆れつつも彦江は追いかけて、落とされる着物の帯、腰紐と拾い上げては丁寧に処理していく。最後に汚れた足袋を拾い上げたところで、ぴしゃりと浴室の木戸が閉ざされ、大きく息をついた。

「一人で平気か？」

呆れが滲む声を木戸へとむければ、盛大な湯の落ちる音と共に陽

気な声が響く。

「髪を洗って」

当然のように命じられ、更に深く息をつく。

まったく手のかかる女だった。着物にしても自ら脱ぐことはできるが、それを着るとなれば彦江の手伝いが必要でなければならず、着せ方が悪いと難癖までつける。不器用で口は悪く到底一人で生きていくには無理がある。

その琴女が「京を下る」と言った折りに彦江は覚悟を決めた。

自らも行かねばならぬのだということを。そうでなければこの女は途中の山で野垂れていたに違いない。

脱ぎ散らかされた衣類をきちんと纏め上げ、当然のように着替えを用意していない琴女の為に自らが背負ってある^{こもり}いている行李から洗ってある着物を一揃え引き出し、あとで自らの風呂の時にでも琴女の汚れた着物を洗ってやらねばなるまいとやれやれと呟いた。

「ひーこー」

「うるさい」

なんだか腹立たしさを覚えてだかだかと足音をさせて木戸を開くと、室内風呂の桶縁に頭を預けた琴女があふりと欠伸をこぼした。

「……」

湯には柚子がぷかぷかと浮かび、その一つを手の中で弄ぶようにしながら琴女は唇を尖らせる。

柚子と同様にまろく形の良い白きふくらみがぷかりと覗くのを慌てて視線をそらすことで誤魔化した。

「足が痛むわ。眠る前に足をもんで」

「俺はおまえの下男か！」

怒鳴ってはみたものの、彦江は手馴れた様子で琴女の長い黒髪を手桶で流し、持参している石鹸を泡立てた。

湯殿に用意されているのは洗い品ときたら案の定『ぬか』で、こんなもので髪を洗おうものなら琴女は数日の間むつつりと口をつぐ

んで不機嫌を示す。この石鹼一つで長屋暮らしの親子四人が半年は暮らせるとこの女は本当に理解しているのだろうか。

髪を洗っている間、琴女はふんふんと鼻を鳴らして気持ちよさげに唄を謳っていたが、やがて仕上げに湯を打ちかければ用は済んだとばかりに彦江を追い立てた。

——彦、彦江、夜は怖い……

泣きながら彦江の手をぎゅっと握り締めていた幼い娘は——記憶の改ざんではあるまいか。

「ほら、あんたもお風呂入りなさいよ。その無精髭もきっちり剃るのよ。あたしの共をするならもう少し身奇麗にしないと崖から蹴落とすわよ」

俺が落としてやりたい。

彦江はふるふると身を震わせていたが、身奇麗になった琴女が着崩れた浴衣姿であらわれれば苦言も言う気が失せた。

自然と手を伸ばしてきちんと整えてやのながら、眉を潜めて濡れた襟に苦言を落とす。

「髪の水気をちゃんととらんと」

「それくらいできるわよ。あんた臭いって言ってるでしょ」

まるで野良犬でも追うように手を振られ、彦江は自らの着替えの準備を済ませて琴女の汚れ物と自らの汚れ物を手に風呂場へと入った。

——白い足袋に浅黒くついた汚れは血だろう。

長く歩き、肉刺ができて潰れてはまた新たな肉刺を作る。

彦江は琴女の足袋を丁寧に洗いながら嘆息した。

今日の琴女は岩を見つけたたびに足をとめてその重い尻をどしりと落としていた。本当に足が痛んだのだろう。無理をさせていたつもりは無いが、まだ年若い琴女には長旅は厳しいものがあるのだろ

う。だが、だからといって駕籠^{かじ}ばかりを使ってなどいられない。

懷に余裕のある旅でなし、最後の手段としてある錢刀の中身などできれば当てになどしたくはない。この宿屋だとて、こんな良い部屋を当てられてもその代価を要求されれば払うことすらできない。琴女が困惑気味に「こんな高い部屋はお払いできませぬ」と言えば店主が慌てて「めっそももございません。尊き姫君から御代を頂くなどっ」と言っていたが――事態がいつかわるかもしれない。

彦江は暗澹たる気持ちで首を振った。

最悪逃げる為の算段をしなければならぬだろう。

まったくいつだって問題を起こさずには居られないのだ琴女という女は。

内心で琴女への悪態を羅列しながら洗濯に励んでいた彦江は、足袋を洗い終わりついで無造作に手にしたものが琴女の襦袢であることに気付いて小さく呻いた。

何故男に襦袢を洗わせて平気なのか、琴女。

ならば自分の襦袢を洗え――洗ってみせろ。のしりつつそれを想像した彦江は無言となり、ただもくもくと襦袢を洗いあげた。

――京にいる家人には決して見せられない有様だ。大の男が女の襦袢を洗っているなどと嘆かわしい。だが、琴女にやらせたら最後着る服がなくなるおそれがある。

ぎゅっと洗濯物を絞り水分を切ると、空桶の中に放り込んでがりと木戸を開け放った。

「琴――」

声をかけたその場に、琴女の姿は無く、彦江は抱えていた桶をどさりと落とした。

「内侍^{ないし}の局」

「どうぞ琴女と。そもそも内密にとお願いしましたのに」

困惑を込めた口調に、藍色の着物の若者は慌てたように謝罪した。
「すみません。ですが、ああでも言わなければ部屋に空気がなく、大部屋などそれこそどんなやからがいるか判らぬ状態ですから」

「私には屈強な護衛がおりますもの。ああ見えて彦江は忍びの流れのもの――どんな場でも私を守ってくださいるのよ」

ふふって唇をすぼめて微笑を落とした琴女は、まだ足が痛むように座る場を求め、仕方なく柳の木の幹に背を預けた。

「しかし、京の都の姫君がこんな場にいるなど」

「あら、私が誰かはあなたは判っているのではなくて？」

唇をにんまりと歪めて琴女が微笑み、その指先を相手の胸元に添わせた。

「琴女様？」

「私は占女ですの。巫女として神域に住まうもの――お優しい方。あなたの望みを、かなえてさしあげる」

妖艶な笑みを浮かべ、琴女は唇を引き結ぶようにして甘い吐息を落とした。

「ひと時の夢を与えてあげるわ」

琴女が上機嫌で部屋へと戻ると、彦江は部屋の中央で胡坐をかいて胡乱な眼差しで琴女を睨みつけた。

その顔に無精髭はなく、元々親子程の年齢差を思わせていたというのに、今は兄のように泰然とそこにいる。

「何をしていた」

「やあね、怒りっぽいのは嫌われるわよ」

琴女は言いながら袂から巾着袋を一つ取り出し、ぽんっと無造作に放り投げた。

がしゃりと音をさせて彦江の手に落ちたそれに、彦江は苦いものを

嘲むような表情を浮かべてその中身を確認した。

黄金色に輝く小判が五枚……くらくらと気が飛びそうな金額だ。

「売ったのか？」

「勿論。タダでなんてあたしは安くないわよ」

「――幾つ？」

「五枚。あんまりねだるのだから。それ以上は駄目って言ったのに……どうしても欲しいって値までつりあげて。いけない人」

くつと喉の奥を鳴らして言う女を更に睨み、彦江は乱暴に立ち上がった。

「出るぞ」

「えーっ。今日はここに泊まりましょうよっ」

「この愚か者っ。おまえの『符』が評判になればなるだけ危うくなるんだぞっ。五枚だと？」

一枚きりだと幾度も念を押しているというのに、何故聞き分けぬっ彦江は言葉を吐き出しながら、どうしてこの女から目を離れたかと自らを叱責した。

占いだけであれば問題は無い。琴女の占いに害は無い。失せモノを探し当てるくらいが関の山、未来は見通すことなどできぬのだからだが、『符』は駄目だ。

琴女の扱う寿ぎの『符』は一枚だけ使うのであれば「幸せな夢」を与えるだけですむものだ。家族を失ったものがその家族の夢を見る――恋するものをその腕に抱く夢を見るものもある。たった一度の幸福感に酔いしれるのであれば害はない。

たった一度の夢は生きる希望となるものだ。

だが、人はただひとたびの幸せが幾度も続けばそれ無しで生きることがかなわなくなるのだ。

琴女はまごうことなき神域に住まうもの。

だがその扱いを違えればそれは神の寿ぎから地の呪いへと変貌する。夢に浸りすぎるものはやがて身を破滅させるのだ。

その能力が災いし、京を出たのではないか。引きとめようとするもの達が無理やりに閉じ込めようとするからこそ、そこから逃れたのではないか。

彦江は絶望の呻きを漏らした。

「きちんと約したわよ。年に一度だけ、その日だけと定めて使うようにと。決して他言は無用と」

ふんつと機嫌を損ねた琴女だが、ことはそう簡単に終わることは無かった。

「局様っ。琴女様っ」

今にも逃げ出そうと彦江が荷を揃えている頃合に、離れのその客室にあわただしく足音が迫っていた。

「なんてことっ！ あの前ときたらちっとも秘密を守れないのだわっ」

憤慨する琴女だが、彦江はその両肩に手を置いて激しく揺さぶり「おまえは馬鹿かーっ」とどやしつけてやりたい気持ちを抑え、黙々と荷を詰めた。

琴女の共の名乗りをあげたこと――それはこういうことであるのだ。と。

琴女の符はその後二年の間江戸の町で名をはせる。

だがその騒乱と公家の姫君の名を語る不屈き者を江戸幕府は許さず、とうとう琴女は牢獄へと落とされるが、その罰は江戸ところ払い――

故に江戸の民はまことしやかに噂したという。

琴女は正しく公家の姫であり、幕府はそれを保護、京へと送還したのだと。

したがそれは二年の後のこと。
琴女はこれより江戸へと下る。

悪代官への道

直参旗本といえは聞こえはいいが、その次男ともなればただの跡取りの代替品としての意味しかない。

外に放逐する訳にもいかず、ようは実家で飼ひ殺される人生。

その人生に不満ばかりを抱えていた訳ではないが、似たような境遇の連中と酒と女に明け暮れて過ごすのは皆が通る道と言って過言では無い。

――幼名、中富次郎。

元服後の名は中富清治郎。

その名だとしてあまりにも適當すぎやまいかと内心でぼやき、酒の席で友人にからかわれたものだ。

遊郭と居酒屋、賭場に通ひむしゃくしゃとした人生をやり過ごす。それだとして金子は全て親や兄の世話になるしかなく、自ら仕事を求めることもできない下らぬ人生。

変えたいと望んだことがあったとしても、それは兄を蹴落とすことに他ならない。

――まったく、くだらぬ。

「ふんっ。何が代官だ――地方代官になんぞなったら、俺はせつせと悪銭を溜め込んで果ては楽隠居で面白おかしく遊興に励むさ」

兄の清朗が地方代官という役職を受ける伝ができたという報告を肴に笑い飛ばした時期が俺にもありました。

「代官様っ、村のもんから喧嘩で怪我人が出たと訴えがっ」

「ええいっ。知るかつ。んなもんは内証でさっさと済ませろ。いいか、いちいちこちらに話を持ち込むな」

内証——つまり、ナイショだ。

いちいち公正に書類を起こして事件扱いにしているは、どれだけの金子が掛かると思う。地方代官所に金があると思うなよ。

というか、俺だって金があると思っていた時期がある。

そう。地方代官になれば村や町の人間から錢を搾り取って、商人と暗躍して大判小判がざくざくに飴あられな夢を見ていたものだ。

兄が流行り病でぽっくりあっけなく身まかり、その後に転がり込んできたぼた餅は、決して甘くはないものだった。

葬式のあとのしめやかさを携えて下男一人を連れて任地におもむけば、ついた場所は恐ろしい程の田舎だったが、田舎には田舎の楽しみがあるさと自分を慰めたものだ。だが、その自分を慰めるといふ行為が連日続けば恨まずにはいられない。

——兄よ、何故に俺にこんな役柄を押し付けた。

俺は確かに自分の人生にくさくさとしていたさ。だが、あの時の俺に懇切丁寧に言ってやりたい。

お前は幸せだったのだと。

「代官、大野屋さんが見えです」

「——判った」

この村、町で一番の商人の出現に嘆息しつつ、一番日当たりの良い部屋にまで足を向けると大野屋雪也という名目上盲目の男は伏せた半眼をあげた。

雪也は所謂金貸しを副業としているが、金貸しという職業は特殊

なもので一般にゆるされてはいない。

「悪い、金を貸してくれ」

と清治郎が気安い口調で頼んだのが後のまつり「確か金貸しは盲目だか坊主だかでないとできないんじゃないやありませんでしたか？」と雪也は首をかしげ、金貸しの地位を奪い取られたのだ。

——この書類の偽造により、確かに清治郎は悪代官といえなくも無い。隠密と呼ばれる人間にあれば代官という地位を奪われ、こつぴどい仕打ちを受けざるを得ない所業だ。

だがしかし、この郡は果てしなく貧乏だった。背に腹はかえられん。

「雪也、以前の書類を精査して判ったんだが少し話を聞かせてくれ」

もう馴染みの商人の涼しい顔に少しばかり顔をしかめ、清治郎は持ってきた書類をどさりと落として自分も胡坐をかいた。

「なんなりと」

雪也はうなずき、清治郎が差し出した帳面に視線を落とした。

「五年前まで収められていた年貢と、去年の年貢とを比べると明らかに差異がある。去年は凶作や何かがあったのか問えば、そんなことは無いという。おまえ、わかるか？」

代官所の役人達は人手不足の為になかなかモノを知らぬ新しい代官の話を聞いてはくれない。

なんといっても、まっとう勉強などに励んだこともない新米代官なものだからその扱いは肥溜めの肥えより酷い。肥えは役に立つがもの知らずの代官は役に立たない。それに構っている程暇ではないというのだ。

「米を作る農家が減りましたから」

雪也はあっさりと言った。

「なんだ、それは？ 米農家が減る？」

「ええ、彼等はこぞって今や蚕産業に精を出してますよ」
蚕、といえば絹糸だ。

ならばむしろ年貢は増えるのではないか？

清治郎の眉が潜まると、雪也は実におかしそうに喉を鳴らした。

「年貢の率が違うんです。米ならこの辺りでは五公五民。半分を年貢で収めなけりゃならない。けれどお蚕さんは農家の妻のちよつとした内職扱いで、一公九民。つまり、一割足らずを年貢として収めればいいってことになる」

「……」

「当然うちの小作人達もこぞってお蚕の育成にはげんでおりますよ」

につこりと微笑を浮かべる悪徳商人の顔を睨みつけ、清治郎は危うくもっていた大事な書類をぐしゃりと握りつぶしてしまいくらいになった。

「くそ農家がああああ」

どうりでがっくりと年貢が減った訳だ。

だが、何が内職だ。思い切り本職にしているじゃないかっ。

「そんな話を聞かれたら、農民達が怒りますよ。それより、先日の貸付の話はどうなってます？」

「うっ……」

代官所の雨漏りが酷い為に屋根の葺き替えをしたのだが、屋根自体に腐れた箇所が幾つかあり、思ったより出費がかさんでしまった。その時に足が出た分をツケにしてあるのだが、悪徳商人は袂からそろばんを取り出すと、しゃらしゃらと鳴らした。

「まあ、色々と相談には乗りますよ」

ふんっ。何が代官だ――地方代官になんぞなったら、俺はせっせと悪銭を溜め込んで果ては楽隠居で面白おかしく遊興に励むさ……

「すまん。少し待ってくれ」

そんな風に思っていた時期が俺にもありました。ええ……

勝手に出た（召喚）

「相変わらずドブネズミみたいな髪ね。いい染料でも紹介しましょうか？」

腕を組むようにしてふんつと鼻を鳴らすニナには特徴がある。

決して他の人間の前ではそんな台詞を口にしたりしないし、言う時は決まって――坂道の下。

どうやら一度坂道の上からファウリーを押して怪我をさせたことをそれなりに気にしているらしい。

気にするくらいならもう止めればいいのに――

ファウリーは内心で「またか」と呟き、ニナを避けて歩こうとした。

「無視する気？ 生魚のファウリー」

「へんなあだ名つけてるのってまさかニナじゃないでしょうねっ」
さすがにカチンときてしまった。

ナマザカナって、何だってそんなおかしな名前にするんだ。

「あーら、生魚がお気に召さないのであれば、魚介類のファウリー」
「……」

屈辱。

ファウリーは口元がひきつるのを感じた。

できるならば軽やかに相手を見無視して通り過ぎたいのだが、ニナときたら行く先を塞いでいるし、言われたくないことをべらべらと喋り続けている。

「あんたがぎりぎり落第しないのは、食堂のおばちゃんに気に入られてるからって噂は結構信憑性が高いわよね」

――違うわよ。

と、実は結構言い切れない為にファウリーはぐつと言葉を詰まらせた。

召喚実習で魚介類を出すファウリーは、課題をこなせないという点で確実に落第候補生だったが、それでも召喚することができるという能力を買われて、ギリギリ落第せずに今年二年への進級を果たしていた。

学園長じきじきに言われてしまったのだ「本来であれば、課題をこなせていないのだから落第と言われてもおかしくはないのです。けれど、ファウリー・メイ——あなたの能力は決して低いものではないという教員達の総意がある。今回は二学年に進級を許します」

ただし。

そう、ただしと学園長は続けた。

「今年度中に海鮮以外の生物を召喚しなさい。そうでなければ、召喚師という道をすっぱりと諦めてもらうことになるでしょう」

白髪のふくよかな女性学園長は結い上げた髪を一度撫でつけ、そつと溜息を落とした。

「あなたの海鮮召喚術は実にすばらしいものです。ただ、本来定められたものではないものを召喚することは大変危険を伴うと判断します。判りますね、ファウリー・メイ」

あたしだって、好き好んで魚介類を召喚している訳じゃないわよ。ちゃんと課題の通りに、小型魔獣のリリックス——手の平サイズのスカンクのような生き物——を召喚しようとした訳だし、その為の薬草も全てきっちりと計って間違わずに用意した。

だというのに、出たのはサンマだった。

サンマ……旬のサンマはとっても美味しいですね。
あたしだって大好きだ。

「今日出た学食のサンマ、あんたが出したってもっぱらの噂よ」
ニナが勝ち誇った調子で言うが、それもまた事実なのでファウリ
ーはぐぐつと拳を硬くした。
サンマが大量だったわよ！

床の上をぴちぴちと飛び跳ねるサンマの体はたった今海から無理
やり引っ張って来られたという様子で傷ひとつなく銀色の艶やかさ。
きつと市場に出せばなかなかの高レートでさばけると思われるが、
ファウリーの実習中は食堂の下っ端が何故か待ち構え、嬉々として
その魚を回収していった。籠で二つ分。

——毎度毎度、扉のところで大きなケースを抱えてまっているあの
男はいったい何者っ。

嬉しそうにニコニコと「ファウリーさんっ」とかほざいているあの
料理人が憎い。

ファウリーはぎりぎりと奥歯をかみ締めた。

「なんとか言いなさいよ、魚屋ファウリー」

「レイシェンに振られたって本当？」

——よし。

ファウリーは「覚えてなさいよーっ」と叫んで逃げていくニナを
冷たく見送り、深く深く、嘆息した。

何故魚介類しか召喚できないのか。
それは心底自分が知りたい謎だ。

先日もぱばであるパードルフに泣きついてみたものの、パードルフ

自身が理解できないと苦笑した。

「ファウリーは才能があるよ。それは間違いない。けれど力のコントロールが難しいのかもしれない」

このままでは召喚師としての免状を受けることはできない。

この先もずっと、ずうっと監督官がいる場でしか召喚ができないのだ。

ファウリーは一定の速度で歩いていた足を速め、逃げ込むように自宅の玄関を入るとそのままの勢いで階段を駆け上り、三階の自分の寝台に飛び込んだ。

悔しくて嗚咽が漏れる。

才能はあるのだと、皆が言う。

才能はある——けれどそれだけだ。

能力のコントロールができなければ、召喚師として認めてはもらえない。

認められなければ、召喚術を行使することは許されない。それをすれば——即刻牢獄に入れられてしまうのだ。

「どうしてよおっ」

子供の頃から自分は天才だと信じていた。

いつかそのうちにコントロールが利いて、きちんと召喚を行えると思っていた。

それが——いつの間にか十六歳。

ファウリーが声を必死に殺して肩を揺らし、泣く様子を、本棚の上から真っ黒い毛玉が見下ろしていた。

ざ・ま・あ・み・ろ。

ケツと喉の奥を鳴らしながら、それでも悪魔はなんだか居心地の悪い感情に眉を潜めた。

ファウリーが泣いている。

それは自分が望んだ光景だ。

八つのガキの分際で、大悪魔である自分を召喚しくさった糞ガキ。その糞ガキに復讐する為に今までせつせと下らないことに精を出してきたのだ。

どれくらい下らないかといえば、いちいちファウリーが作り上げる召喚門を押さえ込み、出てこようとする魔獣ではなく海産物シリーズをかわりに召喚してやるという親切の押し売りだ。

下らないことは重々承知している。

下らないからこそその復讐なのだから。

そうして、その復讐が実り、ファウリーが泣くのは心の底から歓迎してしかるべきだ。

ファウリーが召喚術を行使するたび、せつせと繰り返した日々はこの涙の為ともいえる。

オレ様すごい。

「……」

くふつと喉の奥で嗚咽を繰り返し、枕に顔を押し付けて小刻みに震える十六歳の少女を眺めながら、本日は耳のかいきつねのような格好に扮して尻尾でもって棚の裏の掃除に励んでいた悪魔は、その大きな耳がだんだんとへたりと沈むのを感じた。

「昨日はよくもやってくれたわね」

相変わらずニナは坂の下にいる。

もういつそ趣味なの？

ファウリーは冷たい眼差しで肩に掛かる鞆の重みを軽減するように、学生鞆の皮ベルト部分を握り締め、そっと嘆息した。

「訂正すると、何もしてないわよ。言っただけで」

「どうしてあんな酷いことが言えるのよっ」

いやいや、ニナ。

その発言はブーメランだから。

ものすっごい勢いで戻ってるから。

「あんたの趣味がものすっごく悪いのは判ったから、あたしに構うのやめてくれない？ あたしだって好きでレイシエンの隣に住んでる訳じゃないし」

「なんて罰あたりなっ！」

罰あたりって……

「昔はっ、あんたがレイシエン先生の妹だからと思って優しくしてあげたのにつ」

怒鳴るような言葉に、ファウリーは瞳を瞬いた。

記憶をこそごと探ると、確かに遥か大昔——ニナとは仲良く遊んだ時期もあったような気がしないでもない。

言われれば「そうかな？」程度の記憶なので、「昔から意地悪だったよね」と誰かが訂正すれば「そうだね」と塗り替えが簡単な記憶だが。

「それは残念ね。あたしはあんな外面ばっかの男の妹なんて冗談じ

やないけど」

「誰が妹になりたいって言ってるのよっ」

きいいいと怒るニナはそのうちに血管が切れるのではないだろうか。

ファウリーはやれやれといつも通りにその脇をすり抜けようとしたが、本日のニナは怒り心頭らしい。

がしりとファウリーの腕を掴んだかと思うと、今度は意地の悪い笑みを浮かべた。

「あんた、悪魔の子だっていわれてるの知ってる？」

「それは初耳だわ」

おそらく言い出したのはニナだろうけれど。

「その真っ黒な目や真っ黒な髪！ 悪魔の色だものねっ」

——別に黒は悪魔の色ではない。

ただ、いないだけ。

黒灰の瞳に真っ黒い髪の間人は、この大陸にきつとファウリーだけだ。

子供の頃に幾度かパードルフに「何故自分だけ色が違うのか」と問いかけたことがある。

パードルフはファウリーを膝に乗せ、その黒髪を指にからめて笑って見せた。

「ファウリーの髪はお母さんにそっくりだよ。とても綺麗な人だね。誰より強くて、誰より自信満々で——腰まである黒髪が艶やかで、オレはあの人が好きだよ」

「じゃあ……お父さんは？」

おそろおそろたずねると、途端にパードルフは不機嫌そうに瞳を眇めた。

「さあ。知らないんだ。気づいたらあの人はファウリーを抱っこしてた。抱っこして、自分の宝物だと言っていたんだ」

ぎゅっとファウリーを抱きしめて、パードルフは明るい口調で言った。

「つてことで、あんまり腹立たしいからファウリーを貰ってきちゃった。そのうちにあの人が怒り狂って追いかけてくるかなって思ってたんだけど――やっぱり色々難しいのかな」

遠いから。

くすくすと笑うパードルフに、ファウリーは小首をかしげた。

「あの人が迎えに来たら、ぱぱがどれだけファウリーを愛してるか、あの人を愛してるかちゃんと説明してね？　じゃないと俺殺されるかもしれないし。何より――」

パードルフはちゅっとファウリーの額に口付けて、とっておきの喜びを分け与えるかのように囁いた。

「あの人が来たらもう二度と離さない。ずっと一緒にいてもらうんだ。そしたら、あの人と、オレと、ファウリーでちゃんと家族だね。ぱぱはパパになっちゃうね」

――あの時間いたことは、あまり考えたくない。

もしかしてそれは誘拐と定義されるのではないだろうか、とか。深く考えると色々とまずそうなので、ファウリーは「いつものぱぱの冗談」として流すことにしている。

「聞いているの、ファウリー？」

不機嫌そうなニナの台詞に現実に戻され、ファウリーは嘆息した。

「悪魔でも何でもいいわよ。あたしはこの辺りの子供じゃない。レイシェンの妹でも、ぱぱの娘でもない。それで？　それがどうかしたの？」

「つとに、可愛くないっ。本当に悪魔なんじゃないの？」

ニナの激昂などいつものことで、ファウリーはふんつと顔をそむけて行こうとしたのに――顔を向けた先に人がいるとは、思わなかった。

ばふりと鼻から人にぶつかった。それは無様に。

「悪魔悪魔とうるさいガキだな」

「なっ」

ぶふつと勢いをつけてぶつかってしまった相手を見上げ、ファウリーは黒灰の瞳が零れ落ちるのではないかという程見開いていた。

「黒髪黒目がなんだつつうんだよ、このタコ。」

世間にはもつと奇抜な色がわんさかいるぞ。

毎日毎日、ガキは家帰って勉強でもしてろ」

言われたニナも瞳を見開き、ついで本当に悪魔にでもであったかのように悲鳴を上げて逃げ出した。

逃げ出したい気持ちは良く判る。

黒髪に黒灰の瞳を持つファウリーはこの辺りではもう認知されている。

いまさら、ニナのようにうるさく言ってくるものはいないし、何よりファウリーの保護者であるパードルフは有名で有力者で、そして厄介な相手であるから誰も好き好んで喧嘩を売ったりなどしない。

けれど、やはりこの国で黒髪は異質だ。

ファウリーは自分と同じ黒髪を持つ青年をじっと見つめ「あ、ガイジン」とつぶやいた。

それと同時に、やっぱり自分は「ガイジン」なのだという思いが飛来したが、それより先に手は動いていた。

「あのっ」

がしりと相手のシャツを掴みあげると、それまで唇を尖らせていた黒髪の青年が、ギョっとしたように飛び退ろうとしたが、ファウリーに掴まれていた為に阻まれた。

「うわあっ」

相手のあまりの慌てっぷりにファウリーまでおかしな声があがりそうになったが、ファウリーは更に手に力を込めた。

「この間、会った人ですよねっ」

「なっ、なっ、うおおおっ、俺何してんのおっ」

黒髪の青年は卒倒するような声をあげ、必死にファウリーの手を引き剥がして逃れようと暴れた。

「あのっ、ありがとうっ」

ファウリーの口について咄嗟に出た言葉は、何に対してのありがとうだったのか――先日、手を舐められたのはお礼を必要とする事柄であるのか、それとも今……今はかばわれたのだろうか。

まるで猫に見つかってしまった鼠のようにとびはね、ファウリーの手が離れた途端駆け出して行ってしまった相手に、ファウリーは落胆しながらそれでも必死に「あたしファウリーっ、あなたはっ」と名を尋ねてはみたものの、返ってくるものは無かった。

当然だ。

黒髪黒瞳を持つ悪魔には未だ名は無い。

ぎよおええええええつ。

悪魔は一足先にファウリーの部屋に飛び込み、ぼふんっとその姿

を最近気に入りのイモリに変化させ——どっからどう見てもヤモリなのだが、家守などという名前は悪魔的に縁起が悪いのでイモリ——自分を落ち着かせる為に冷たい窓にぺったりとひつついた。

小さな心臓が激しく鼓動している。

ドクドクドクドクという心音を間近で感じながら、うおおおっと気分だけ頭を抱えた。

何だって俺様ってばファウリーの前に立ってるんだよ。

駄目だろお。駄目だってばよ。

ファウリーが虐められていようと俺には関係ねえってのに。

無意識の行動にあうあうとうめいていると、遅れて帰宅したファウリーが自室に入り、鞆を机に投げ出し、そのままの勢いでぼったりと寝台に身を投げ出した。

「うわぁーっ、すごい。やっぱり強く願えば叶うことってあるのね。忘れないように日記に書いておかなくちゃっ」

ぎゅうっとレイシエン作の枕を抱きしめて、ごろごろと寝台で転がるファウリーの様子を視界に入れて、先ほどまで動揺していた悪魔は——

悪魔は——え、なにこいつ？

なにヘラヘラしてんだよ。キショっ。

と、別の意味で冷静さを取り戻した。

勿論——この日の日記を盗み見て冷静さなど吹き飛ばす男がどこかにいるのだが、それはまた後日。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9858o/>

詰め合わせギフトパック

2011年11月6日19時05分発行